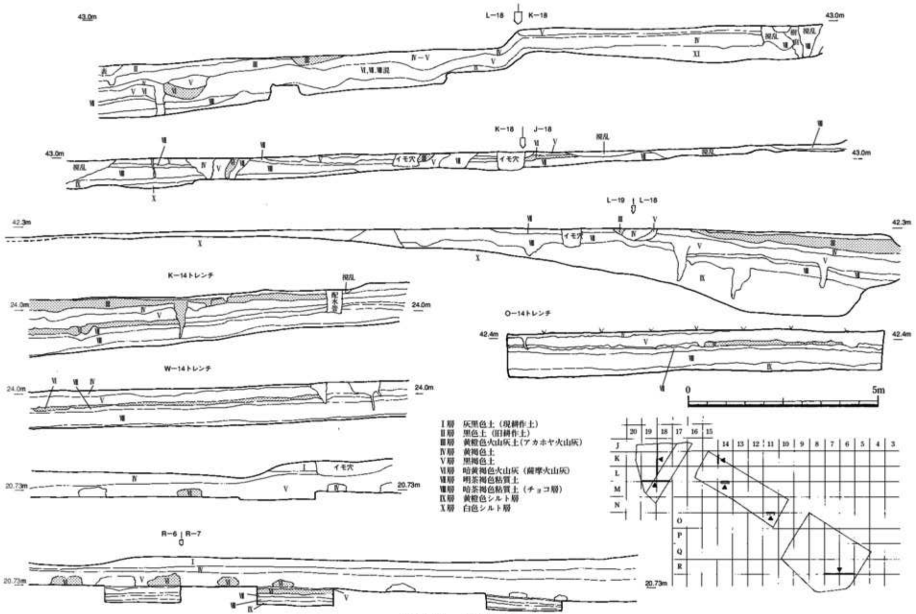
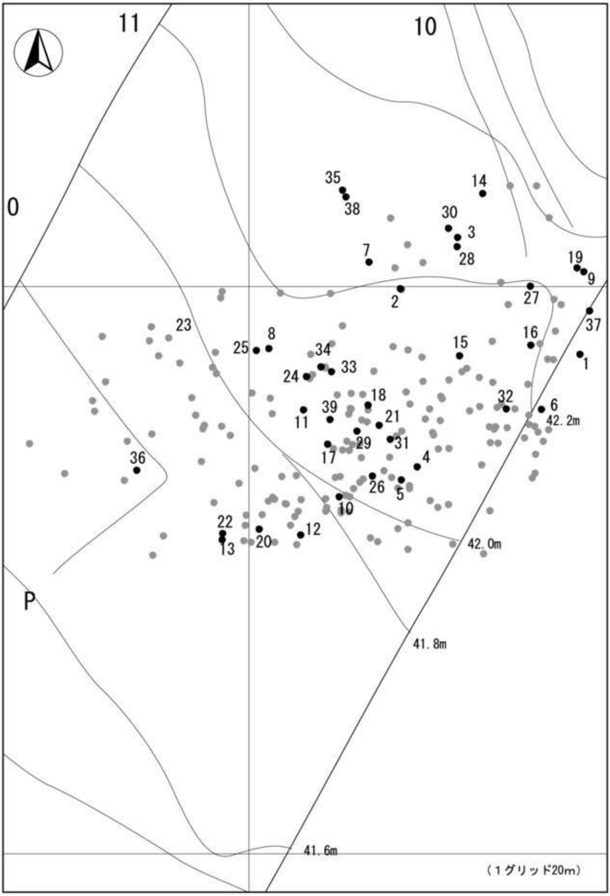
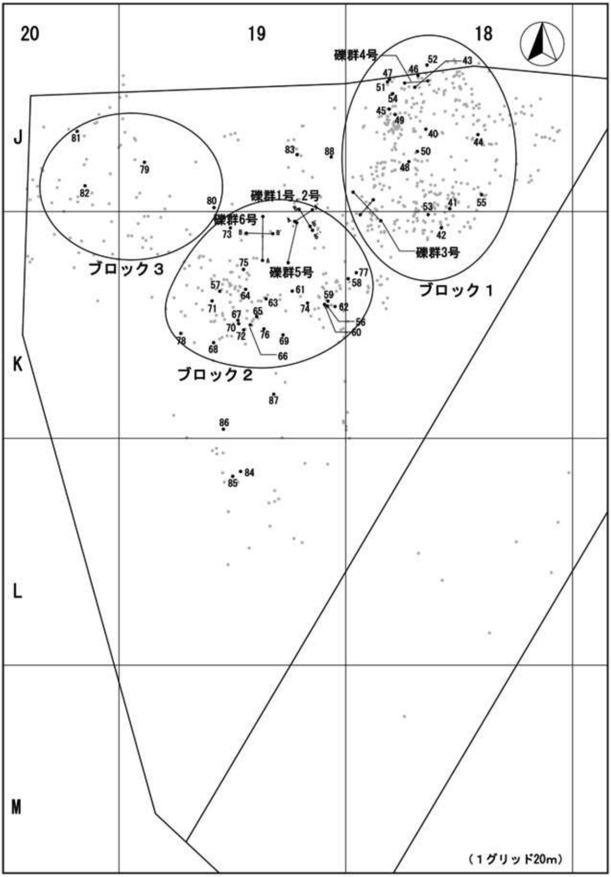

43.0m
L−18
K−18
K−18
J−18
42.3m
L−19
L−18
K−14トレンチ
24.0m
W−14トレンチ
O−14トレンチ
42.4m
20.73m
R−6
R−7
イモ穴
配水管
攪乱
0
5m
Ⅰ層　灰黒色土（現耕作土）
Ⅱ層　黒色土（旧耕作土）
Ⅲ層　黄橙色火山灰土（アカホヤ火山灰）
Ⅳ層　黄褐色土
Ⅴ層　黒褐色土
Ⅵ層　暗黄褐色火山灰（薩摩火山灰）
Ⅶ層　明茶褐色粘質土
Ⅷ層　暗茶褐色粘質土（チョコ層）
Ⅸ層　黄橙色シルト層
Ⅹ層　白色シルト層

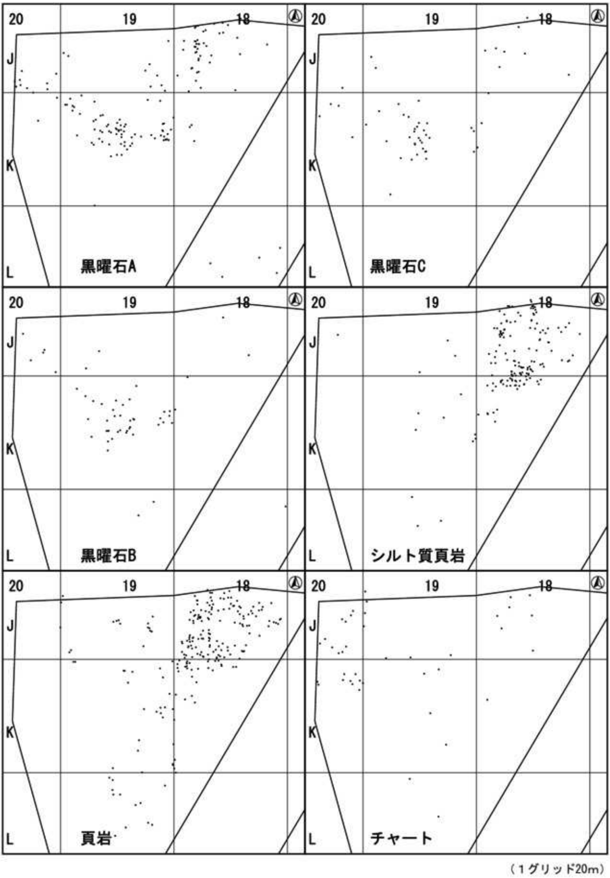
第3図　土層断面



第４図　東側調査区（O－10区～P－11区）遺物出土状況図



第５図　旧石器時代遺物出土状況図・遺構配置図

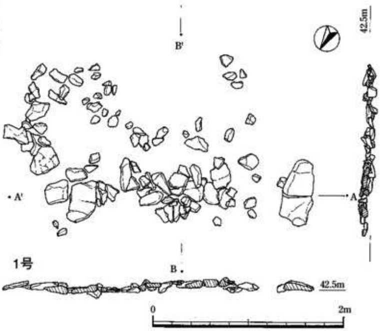


第6図　石材毎の分布図

第２節　遺跡の層序

宗円堀遺跡における層序は，農業開発総合センター遺跡群の基本的な層序と同一である。主な時代と包含層，遺構・遺物は以下の通りである。

- 平安時代～中世（Ⅱ層）
  溝
- 縄文時代晩期（Ⅲ～Ⅳ層）
  柱列・土坑
  土器・石器・装飾品
- 縄文時代中期～後期（Ⅳ層）
  土器
- 縄文時代早期（Ⅳ層）
  集石
  土器・石器
- 旧石器（Ⅷ層）
  礫群
  石器・剥片



第７図　礫群１

第３節　発掘調査の方法及び概要

宗円堀遺跡は平成12年度に調査を行った幹線道路部分と，平成14年度に調査を行った園花キ畑西側の尾根状の台地部分（西側調査区）と東側調査区の３つに分けられる。西側調査区は旧道路により南東側が一部カットされている。幹線道路部分東側調査区の北東側が諏訪脇遺跡と隣接する。

本調査前の状況は，西側調査区が南東方向に傾斜して荒れ地で，東側調査区は用地買収後に荒れ地化したほぼ平坦な旧畑地であった。調査のためのグリッドは20ｍ×20ｍで設定し，遺跡地内の東側から１，２，３…とし，北側からＡ，Ｂ，Ｃ…とした。

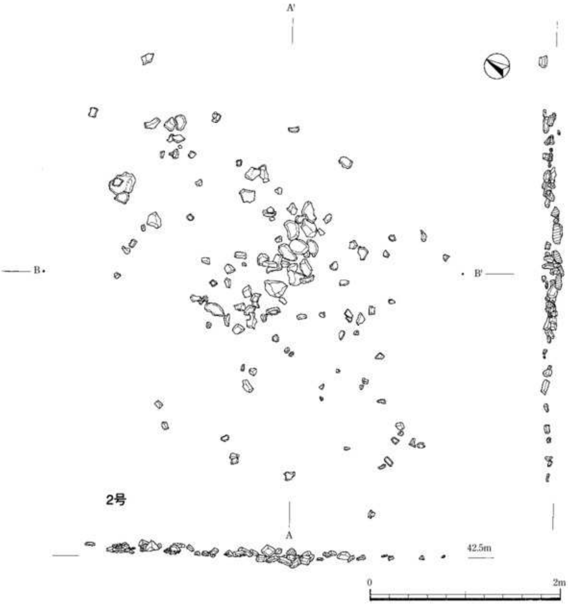
調査面積の調査はⅠ層を重機により除去し，Ⅱ～Ⅹ層上面までを人力で行った。Ⅱ層からは平安時代～中世の溝が検出されたが，遺物は出土しなかった。Ⅲ～Ⅳ層からは，縄文時代晩期の土坑や柱列が検出された。西側調査区で検出された土坑内からは，上加世田式土器に比定される土器が大量に出土したほか，管玉も２個出土している。柱列は東側調査区に集中している。Ⅳ層からは，西側調査区で縄文時代中期～後期の土器（市来式他）が出土している。また，縄文時代早期の土器（吉田式・石坂式）や石器類も大量に出土している。その他縄文早期のものと思われる集石も３基検出されている。Ⅷ層からは，幹線道路部分で旧石器時代（ナイフ形石器文化期）の石器類が出土した。ブロックは確認されなかった。また，西側調査区からは旧石器時代の包含層が２枚（細石器文化期・ナイフ形石器文化期）が確認され，特に細石器文化期の石器類がまとまった形で出土している。

第４節　旧石器時代の調査

旧石器時代は，西側調査区で遺構・遺物が，東側調査区で遺物が出土した。西側調査区では，細石器文化期に相当すると思われる礫群６基が検出された。細石刃や細石刃核等の遺物も集中して出土しており，ブロックも３か所確認された。その他，ナイフ形石器も３点出土している。

（１）遺構

西側調査区Ⅷ層上面で礫群を６基検出した。４号礫群はＪ－18区とやや離れるが，他の５基はＪ－19区とＫ－19区のグリッド境に集中して検出された。



第8図 礫群2

1号礫群（第7図）

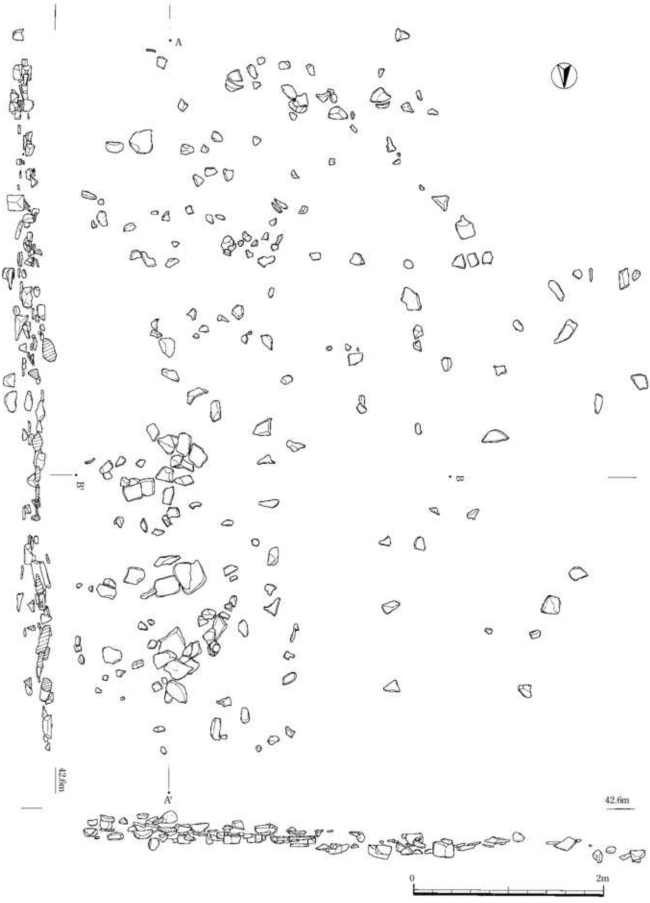
K－19区Ⅶ層中位で検出されたもので，長径180cm，短径70cmを測る。15cm×35cm大の大型の礫をはじめ，拳大よりやや大きめの礫が十数個と，10cm×10cm以下の小型の礫が混在して構成される。礫は平面的に検出されており，掘り込みは確認されなかった。

2号礫群（第8図）

K－19区Ⅷ層中位で，1号礫群と一部重なる状況で検出されたが，礫の集中域が1号と重ならず2つに分けられたため，別々の礫群として取り扱った。礫の集中域には拳大程度の角礫が数個重なっているが，他は10cm未満の角礫が平面的に散在する。集中域は長径90cm×短径50cmを測る。掘り込みは確認されなかった。

3号礫群（第9図）

J―18区とK－19区のグリッド境Ⅷ層中位で検出された。20cm×15cm大の大型の角礫数個の他，拳大程度の角礫が平面的に散在するもので，掘り込みは見られなかった。



第９図　礫群３

4号礫群（第10図）

西側調査区の北側，K－18区Ⅷ層中位で検出された。拳大程度の角礫が十数個集中している箇所も見られるが，それ以下の小礫は数も多く，平面的に広く散在している。礫の集中域は150cm×80cmを測る。掘り込みは確認されなかった。

5号礫群（第11図）

K－19区Ⅷ層上面で，拳大程度の角礫が平面的に密集して検出された。長径150cm×短径100cmの楕円形プランを呈する。掘り込みは見られなかった。

6号礫群（第12図）

K－18区Ⅷ層中位で検出された。礫群として取り上げたが，基盤の熔結凝灰岩の上で火を焚いた痕跡が残るものである。火を受けた部分は赤く変色しており，炭化物も見られた。

第10図　礫群４

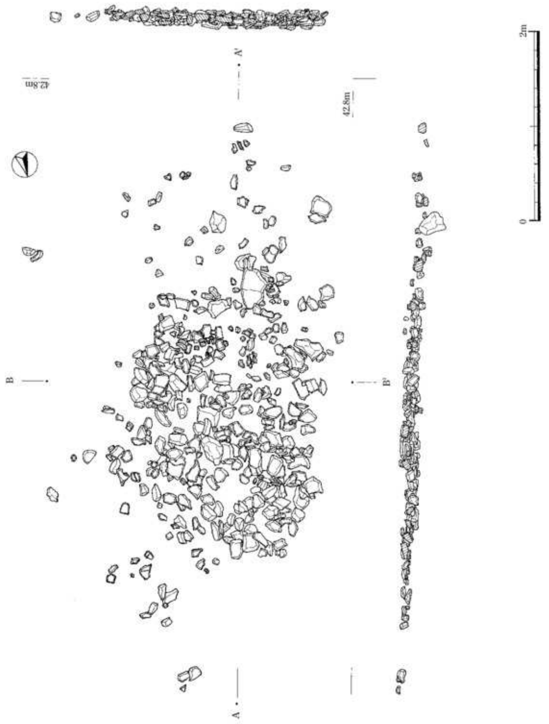
（2）遺物

宗円堀遺跡の旧石器時代の遺物は，遺跡の東側の範囲と西側の範囲で出土している。東側は，調査範囲全面に遺物が散在しており，明確なブロックは確認できなかった。西側では，石材分類を行ない，それぞれの集中区を検出したところ，3つのブロックを確認できた。

なお，黒曜石は肉眼により観察した特徴をもとに，下記のように分類を行なった。

黒曜石A・・・黒色で炭化している。不純物が少なく光を通さない。樋脇町上牛鼻産に類似する。

黒曜石B・・・黒色，アメ色で不純物を含む。鹿児島市三船産に類似する。



第11図　礫群5

第12図 礫群6

黒曜石C・・・黒色，ガラス質で小粒の不純物が多く含まれる。大口市日東産に類似する。

黒曜石D・・・全体的に灰色で黒色の筋が入る。光沢がある。

黒曜石E・・・半透明のガラス質で，不純物が少ない。桑ノ木津留産に類似する。

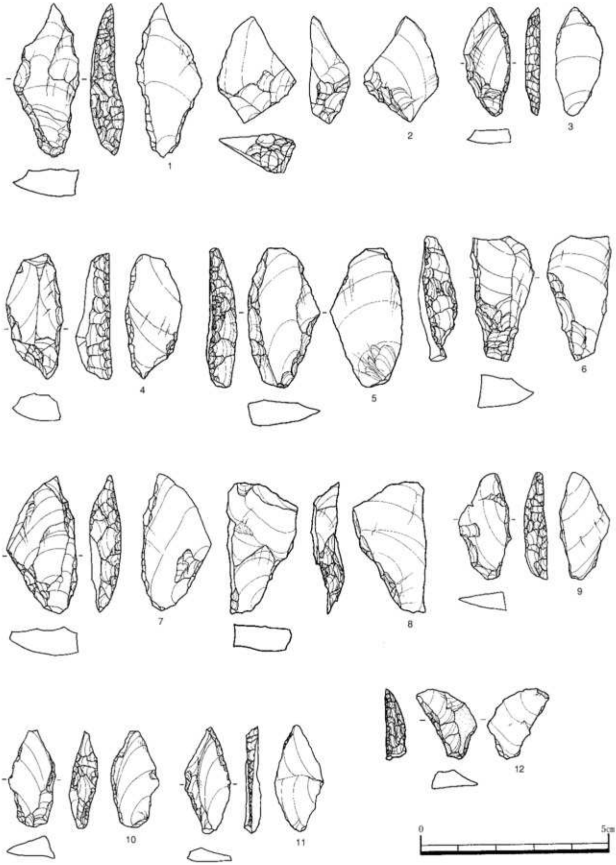
黒曜石F・・・黒色で縞状の筋が透けて見える。不純物はほとんどない。

黒曜石G・・・灰色がかったガラス質で，縞状の筋が入る。極小の黄色い粒が，わずかに含まれる。

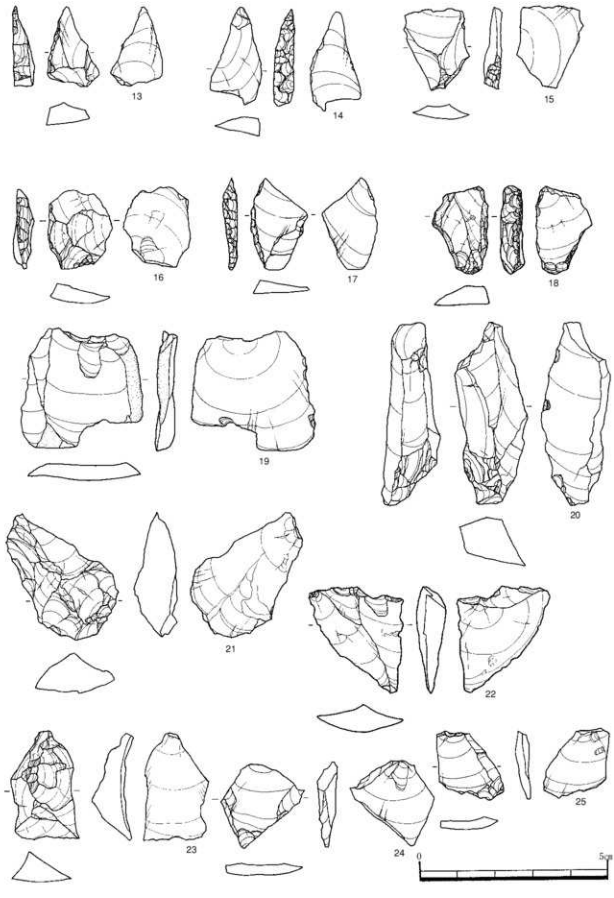
黒曜石H・・・光沢のある黒色で，極小の黄色い粒が筋状に入る。

東側調査区（第13〜17図1〜39）

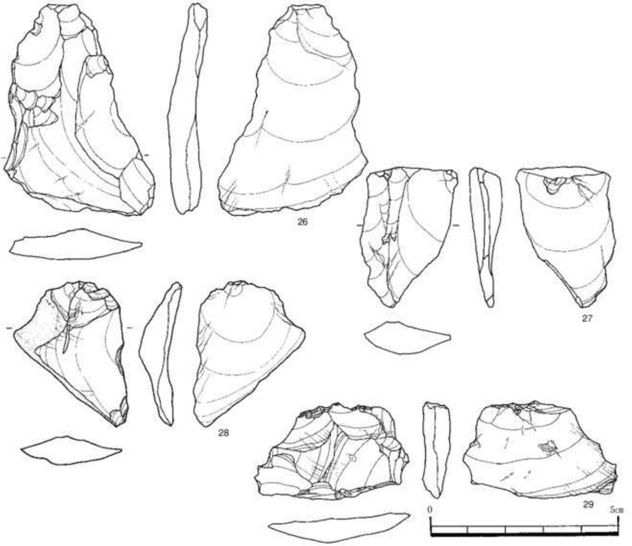
1〜18はナイフ形石器である。石材の選択は，玉髄製のものが多く見られる。1は玉髄の縦長剥片を利用し，基部を細かな剥離で形成している。右側面にブランディングを施す。2は下部が膨らむ横長剥片を素材としている。右側縁下部に裏面からの加工を施す。3は黒曜石製。右側縁に細かな剥離を施している。先端部に使用痕を観察できる。4は玉髄製。先端部を打点として剥ぎ取ったやや厚みのある剥片を素材としている。5はシルト質頁岩の縦長剥片を素材とし，右側面に細かな調整を施す。6は基部に細かい加工を施し，左側縁にブランディングを施す。7は横長の剥片を素材とし，左側面に正面から細かな剥離を形成している。8は縦長剥片の打点を基部



第13図　旧石器１



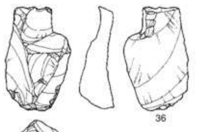
第14図　旧石器 2



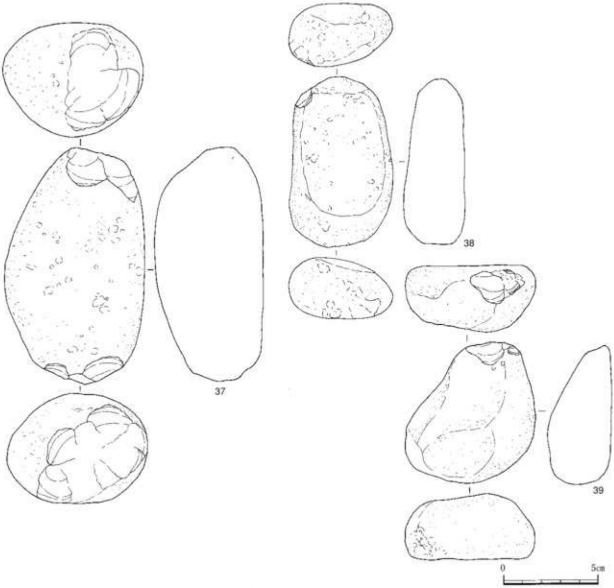
第15図　旧石器 3

として加工している。先端部には使用痕が観察される。 9 は玉髄製。右側縁部全体にブランディングが施される。左側縁部下部にも細かな調整を施し，基部を形成している。10は鉄石英製。右側面に細かな剥離が観察される。左側面上部には，使用痕が観察できる。11は左側面下部に細かな剥離を施し，基部を加工している。12は左側縁にブランディングを施す。13は縦長剥片を素材とし，基部が平坦である。左側縁部に正面から加工を施す。14は右側縁部に正面と裏面より細かな加工を施す。15は薄い剥片を素材として，下部に基部調整を施す。上部・両側縁部は薄く，細かな調整は見られない。17は薄い縦長剥片を素材とし，左側縁に裏面より細かな加工を施している。18は黒曜石製。縦長剥片を素材とし，左側縁上部には使用痕が観察できる。

19～29は剥片である。19・26～29はシルト質頁岩製，それ以外は玉髄製である。19は薄い縦長の剥片で，左側縁部に細かな使用痕が確認できる。20・21は下部に細かな剥離を施しており，ナイフ形石器の製作途中の可能性が考えられる。22・23はいずれも上部より打撃を加えて剥片を取り出し，その後細かな剥離を施している。24・25は薄い剥片である。下



第16図　旧石器４



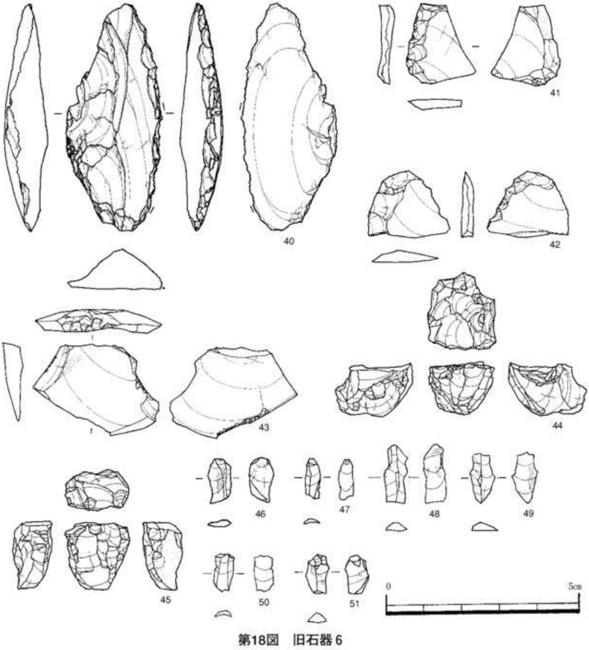
第17図　旧石器５

部に細かな剥離を観察できる。26は縦長の剥片を素材とし，左側面に正面からの加工を施す。27・28は縦長の剥片で，使用痕は確認できない。29は横長の剥片で，上部に細かな剥離が観察できる。

30～35は石核。30～32は玉髄製，33～35はシルト質頁岩製である。30は自然面を残すもので，正面の下方向より剥片を剥ぎ取っている。31は打面を転移させながら剥片を剥いでいるものである。32は上部の平坦面を打点として剥片を剥いでいるものである。33は下部からの打撃で母岩より取り出したものである。上部を平坦に加工し，縦方向に剥片を剥ぎ出している。34は縦長のもので，上面・下面・右側面から剥片を取り出している。35は拳大のもので，主として正面から剥ぎ取っている。

36は玉髄製のスクレイパーである。縦長の剥片の下部を正面から加工し，刃部を形成している。

37～39は敲石である。37・38は安山岩製。39は砂岩製。37は縦長の円礫で，長軸の両端広範囲に敲打痕が認められる。38は長軸両端に細かな敲打痕が認められる。39は上部に大きめの敲打痕，左側縁下部



第18図　旧石器６

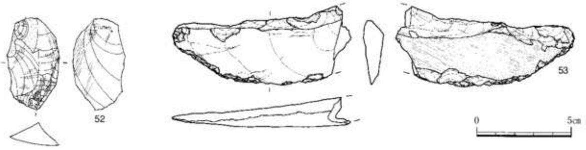
に細かな敲打痕が認められる。

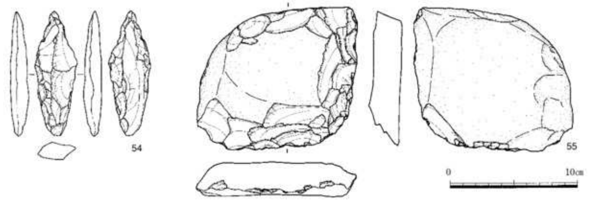
西側調査区（第18～24図40～88）

ブロック１（第18～19図40～55）

J・K－18区にまたがる約16ｍ×18ｍの範囲で，シルト質頁岩・頁岩が多く出土している。

40は頁岩製のナイフ形石器。横長剥片を素材とし，右側縁部に基部から先端部に向かって細かな加工を施す。41～43は使用痕剥片。41は左側縁部に，42は両側縁部に使用痕が観察できる。43は横長の薄い剥片を素材としている。下面に使用痕と思われる細かな剥離が観察できる。44・45は細石刃核。44は上面を右方向から打面調整を行なっている。45は上面が平坦な打面で，正面の作業面とほぼ垂直に交わる。右側面に自然面を残す。46～51は細石刃。47は使用痕が確認できる。49は鉄石英製。52は黒曜石であるが，産地の特定が困難なため，石材の参考資料とし





第19図　旧石器 7

て掲載した。灰色がかったガラス質で，縞状の筋が入る。極小の黄色い粒が，わずかに含まれる。53はシルト質頁岩製のスクレイパー。横長剥片を真中で切断また欠損し，弧を描く正面の下部に剥離を施している。剥離は先端部に行くほど細かなものになる。54は表面が風化している頁岩製の尖頭器である。両側縁部は裏面からの二次加工，および先端部と基部は稜上加工により整形される。55は頁岩製の礫器である。平坦な円礫の自然面をほぼ残し，右側縁部と下面に比較的粗い二次加工で刃部を形成している。

ブロック 2（第20〜22図56〜78）

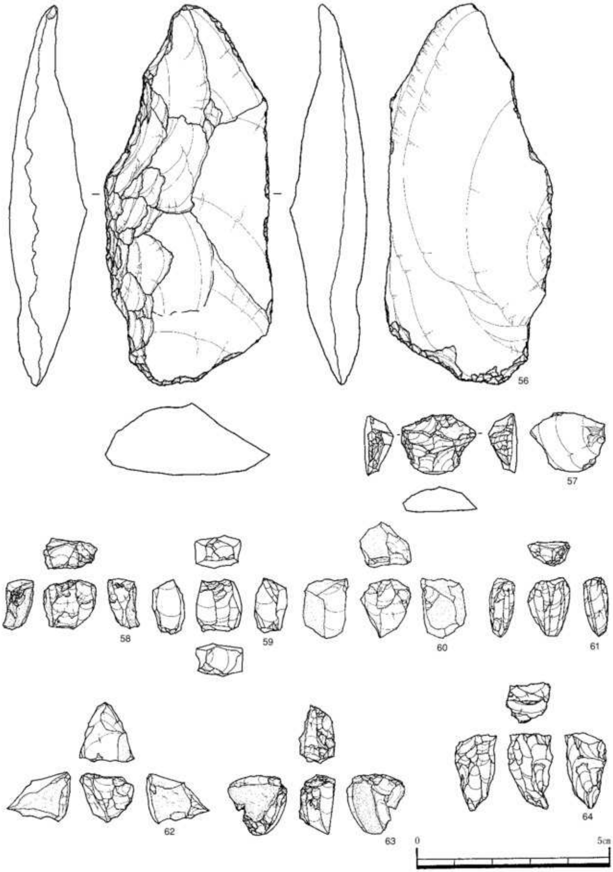
K−18・19区にまたがる約16ｍ×22ｍの範囲で，三船産類似・日東産類似の黒曜石が多く出土している。

56は大型のナイフ形石器である。頁岩製の横長剥片を素材としている。表面は風化している。左側縁部及び基部に細かな二次加工を施している。右側縁部から先端部にかけて使用痕が観察できる。57は台形石器。両側縁部及び上面に正面からブランディングを施す。58〜72は細石刃核。作業面が1㎝程度の小さなものが多い。58は作業面に対して打面が狭い。59は主作業面は正面であるが，裏面および右側面に剥離痕がある。60は正面以外の面に自然面を残すものである。61は主作業面は正面であるが，両側面にも剥離痕があり，作業面と平行な裏面を有する。62は打面が後方に傾斜している。63は作業面が狭い。64は縦長の石核を素材としたもので，作業面と平行な裏面を有する。65は上面に打面調整によるものと思われる細かな剥離を観察できる。66は打面がＶ状に凹んでいる。67は縦長の作業面を有するもので，下部に行くに従って窄まる。68は左側面に自然面を残すものである。69は上面・正面・下面に作業面が残るものである。70は残存作業面が1.2㎝と小型のものである。下部に行くに従って窄まる。71・72も小型のもの。71は打面が後方に傾斜し，作業面が菱形に残る。72は左側面・裏面に自然面が残るものである。73〜77は細石刃。74・75は使用痕と思われる微細な剥離が観察できる。78は縦長剥片を素材とするスクレイパーである。右側面に細かな剥離を施し，横断面が三角形を呈す。

ブロック 3（第23図79〜82）

J・K−19・20区にまたがる約20ｍ×10ｍの範囲で，チャートの出土が目立つ。

79は細石刃核。作業面は正面であるが，打面は作



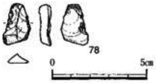
第20図　旧石器８

第21図　旧石器 9

業面に対して左側面及び後方に傾斜している。80～82はチャート製の細石刃である。使用痕は肉眼では観察できない。

その他（第23～24図83～88）

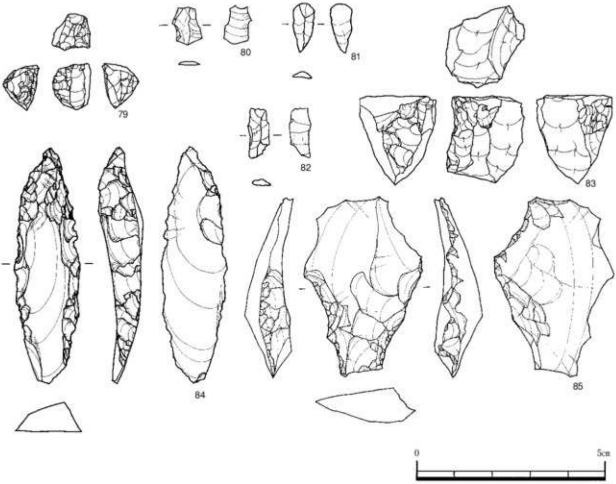
83は上牛鼻類似黒曜石の細石刃核。上面に平坦な打面を有し，作業面とほぼ垂直に交わる。84は三稜尖頭器である。裏面は剥離面をほぼ残し，先端部は正面からの二次加工と稜上加工によって整形される。85は大型の台形石器である。横長で，下部に厚みのある剥片を素材としている。両側縁下部に正面からの，右側面全体に裏面からの細かな加工が観察される。86・87はスクレイパーである。86は自然面を残す礫を，ほぼ加工ぜずに使用している。87も自然面を残すもので，右側面・上面に加工を加えて整形している。下部となる刃部には，使用痕と思われる細かな剥離が観察できる。88は裏面に平坦な自然面を残す頁岩製の礫器である。正面は大きな剥離で整形した後，細かな剥離で刃部を形成している。



第22図　旧石器10

旧石器時代石器観察表

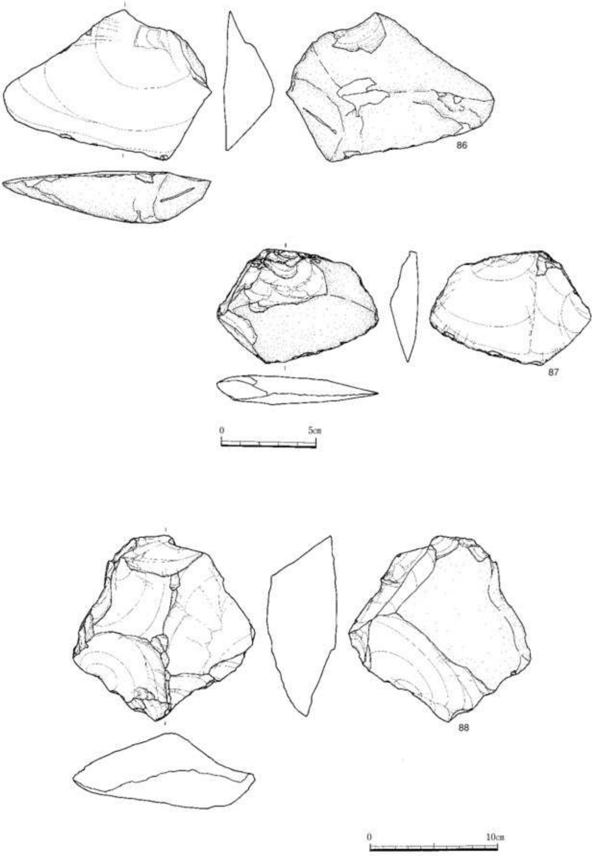
挿図番号	報告番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第13図	1	P－9	Ⅶ	ナイフ形	玉髄	4.05	1.7	0.8	4.5	
	2	O－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	2.85	2.05	1	3.6	
	3	O－10	Ⅵ	ナイフ形	黒曜石D	2.9	1.25	0.35	1.3	
	4	P－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	3.3	1.5	0.95	4	
	5	P－10	Ⅵ	ナイフ形	シルト質頁岩	3.7	1.9	0.8	4.7	
	6	P－9	Ⅶ	ナイフ形	玉髄	3.3	1.7	1	4.2	
	7	O－10	Ⅵ	ナイフ形	チャート	3.65	1.85	0.8	4.4	
	8	P－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	3.45	1.9	0.6	4.9	
	9	O－10	Ⅶ	ナイフ形	玉髄	2.8	1.4	0.6	1.7	
	10	P－10	Ⅶ	ナイフ形	鉄石英	2.55	1.25	0.7	1.6	
	11	P－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	2.8	1.2	0.4	1.1	
	12	P－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	1.85	1.6	0.4	1.2	
第14図	13	P－11	Ⅶ	ナイフ形	玉髄	2.1	1.4	0.55	1.4	
	14	O－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	2.6	1.4	0.5	1.1	
	15	P－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	2.15	1.75	0.5	1.2	
	16	P－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	2.1	1.7	0.6	1.6	
	17	P－10	Ⅵ	ナイフ形	玉髄	2.45	1.5	0.4	1	
	18	P－10	Ⅶ	ナイフ形	黒曜石E	2.3	1.5	0.7	2	
	19	O－10	Ⅵ	加工痕剥片	シルト質頁岩	3.15	3.25	0.5	4.3	
	20	P－10	Ⅵ	加工使用痕剥片	チャート	4.8	1.9	1.45	9.5	
	21	P－10	Ⅵ	剥片	玉髄	3.3	2.9	1.15	6.1	
	22	P－11	Ⅶ	剥片	玉髄	2.8	2.45	0.8	3.2	
	23	P－11	Ⅵ	剥片	玉髄	2.9	1.8	1.05	3.2	
	24	P－10	Ⅵ	剥片	玉髄	2.25	2.25	0.6	1.6	
	25	P－10	Ⅵ	剥片	玉髄	1.85	1.8	0.4	0.8	
第15図	26	P－10	Ⅵ	剥片	シルト質頁岩	5.65	4	1.05	15.3	
	27	O－10	Ⅵ	剥片	シルト質頁岩	3.7	2.6	0.85	6.3	
	28	P－10	Ⅵ	剥片	シルト質頁岩	3.8	3	0.8	5.3	
	29	P－10	Ⅵ	剥片	シルト質頁岩	2.6	4.2	0.7	23.5	
第16図	30	O－10	Ⅵ	石核	玉髄	4.6	5.65	2.5	58.6	
	31	P－10	Ⅵ	石核	玉髄	4.6	4	4.4	55.2	
	32	P－10	Ⅵ	石核	玉髄	3.1	3.5	2.4	15	
	33	P－10	Ⅵ	石核	シルト質頁岩	8.6	2.9	7.8	145.8	
	34	P－10	Ⅵ	石核	シルト質頁岩	12.9	5	8.2	342.1	
	35	O－10	Ⅵ	石核	シルト質頁岩	7.1	7.3	4.9	217.4	
	36	P－11	Ⅵ	スクレイパー	玉髄	5.5	3.4	2.3	26.4	
第17図	37	P－9	Ⅵ	ハンマー	安山岩	12.6	7.4	5.9	699.9	
	38	O－10	Ⅵ	ハンマー	安山岩	9.1	5.5	3.2	225.4	
	39	P－10	Ⅵ	ハンマー	砂岩	7.5	6.9	3.5	217.4	
第18図	40	J－18	Ⅶ	ナイフ形石器	安山岩	6.04	2.58	1.16	13.5	
	41	J－18	Ⅶ	使用痕剥片	シルト質頁岩	2.15	1.75	0.3	1.33	
	42	K－18	Ⅶ	使用痕剥片	シルト質頁岩	1.8	2.1	0.35	1.26	
	43	J－18	Ⅶ	使用痕剥片	黒曜石F	2.4	3	0.5	3.46	
	44	J－18	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.4	1.7	1.9	4.7	
	45	J－18	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.8	1.7	1	3.55	
	46	J－18	Ⅶ	細石刃	黒曜石G	1.2	0.8	0.15	0.12	
	47	J－18	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.1	0.4	0.1	0.06	
	48	J－18	Ⅶ	細石刃	鉄石英	1.35	0.6	0.25	0.12	
	49	J－18	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.6	0.7	0.3	0.18	
	50	J－18	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1	0.5	0.1	0.07	
	51	J－18	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.1	0.6	0.3	0.14	
第19図	52	J－18	Ⅶ	使用痕剥片	黒曜石G	4.9	2.75	1.15	15.6	
	53	J－18	Ⅶ	スクレイパー	頁岩	4.2	9.45	1.6	40.6	
	54	J－18	Ⅵ	尖頭器	頁岩	10	3.5	0.9	37.3	
	55	J－18	Ⅶ	礫器	頁岩	11.35	12.65	2.8	590	
第20図	56	K－19	Ⅶ	ナイフ形石器	頁岩	10.1	4.45	2.05	88	
	57	K－19	Ⅳ	台形石器	黒曜石A	1.6	2	0.75	1.92	
	58	K－18	Ⅳ	細石刃核	黒曜石B	1.3	1.4	0.7	1.49	
	59	K－19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石E	1.4	1.2	0.8	2.1	
	60	K－19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石B	1.5	1.4	1.1	2.55	
	61	K－19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石E	1.5	1.1	0.6	1.06	
	62	K－19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.2	1.4	1.6	2.23	
	63	K－19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石B	1.6	0.8	1.5	1.98	
	64	K－19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石A	1.9	1.2	1	2.42	



第23図　旧石器11

旧石器時代石器観察表

挿図番号	報告番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第21図	65	K−19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石B	1.9	1.9	1.6	5.35	
	66	K−19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石B	1.8	1	1.2	2.04	
	67	K−19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石B	2.4	1.2	0.9	2.82	
	68	K−19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石B	1.5	0.8	1.5	1.51	
	69	K−19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石A	1.4	1.2	1.4	2.19	
	70	K−19	V落ち込み	細石刃核	黒曜石C	1.3	0.9	0.7	0.95	
	71	K−19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石C	1.6	1.4	1	1.18	
	72	K−19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石C	1.3	0.9	0.6	0.72	
	73	K−19	Ⅳ	細石刃	黒曜石C	1.4	0.5	0.15	0.11	
	74	K−19	V落ち込み	細石刃	黒曜石A	1.55	0.4	0.1	0.07	
	75	K−19	Ⅶ	細石刃	黒曜石B	1.4	0.5	0.1	0.16	
	76	K−19	Ⅳ	細石刃	黒曜石B	1.1	0.55	0.15	0.1	
	77	K−18	Ⅳ	細石刃	黒曜石C	1.35	0.6	0.2	0.13	
第22図	78	K−19	Ⅶ	スクレイパー	黒曜石B	2.1	0.6	1.3	1.31	
第23図	79	J−19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石C	1.2	1	0.9	0.97	
	80	J−19	Ⅶ	細石刃	チャート	1.05	0.7	0.1	0.09	
	81	J−20	Ⅳ	細石刃	チャート	1.35	0.6	0.2	0.09	
	82	J−20	Ⅶ	細石刃	チャート	1.35	0.6	0.2	0.11	
	83	J−19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石A	2.3	1.9	2	8.38	
	84	L−19	Ⅶ	三稜尖頭器	ホルンフェルス	6.25	1.75	1.2	10.1	
	85	L−19	Ⅶ	台形石器	黒曜石H	4.8	3.1	1.15	12.38	
第24図	86	K−19	Ⅶ	スクレイパー	頁岩	7.93	11.05	2.75	184.6	
	87	K−19	Ⅶ	スクレイパー	頁岩	6.09	8.51	1.6	79.7	
	88	J−19	Ⅶ	礫器	安山岩	14.7	14.4	6	1016	



第24図　旧石器12

第５節　縄文時代の調査

縄文時代は，早期，晩期の遺構・遺物と中期～後期の土器が出土した。

１　縄文時代早期

縄文時代早期は，西側調査区において遺構・遺物が検出された。

遺構は，Ｊ―19区に集石遺構が３基，近接する状態で検出された。遺物は，Ⅳ層柱から土器・石器が出土した。土器は，早期前半のⅠ類土器から早期終末のⅩ類土器までが出土したが，その大半はⅣ類土器が占める。石器は，石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石皿が出土した。

（１）　遺構

①１号集石（第25図）

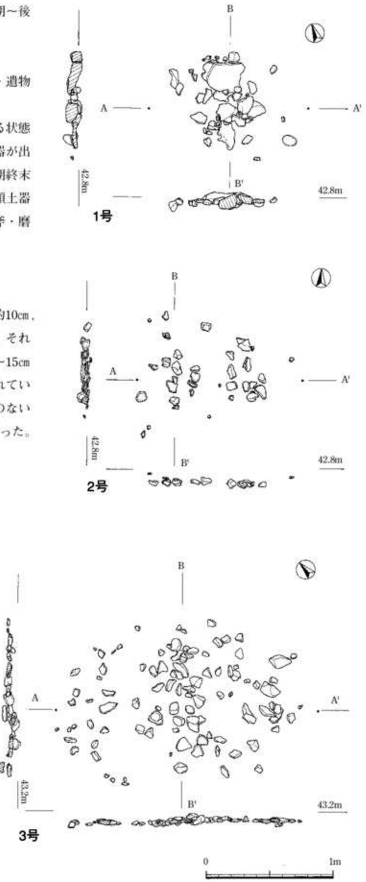
Ｊ―19区Ⅳ層から検出されたもので，厚さ約10cm，縦横の幅がどちらも約30cmの大型の石１個と，それよりやや小型の厚さ約10cm，縦横の幅が約10～15cm大の石が５個，他は拳大以下の小石で構成されている。礫の密集度合いは低い。礫はほぼ高低差のない状態で広がっており，掘り込みも確認されなかった。

②２号集石（第25図）

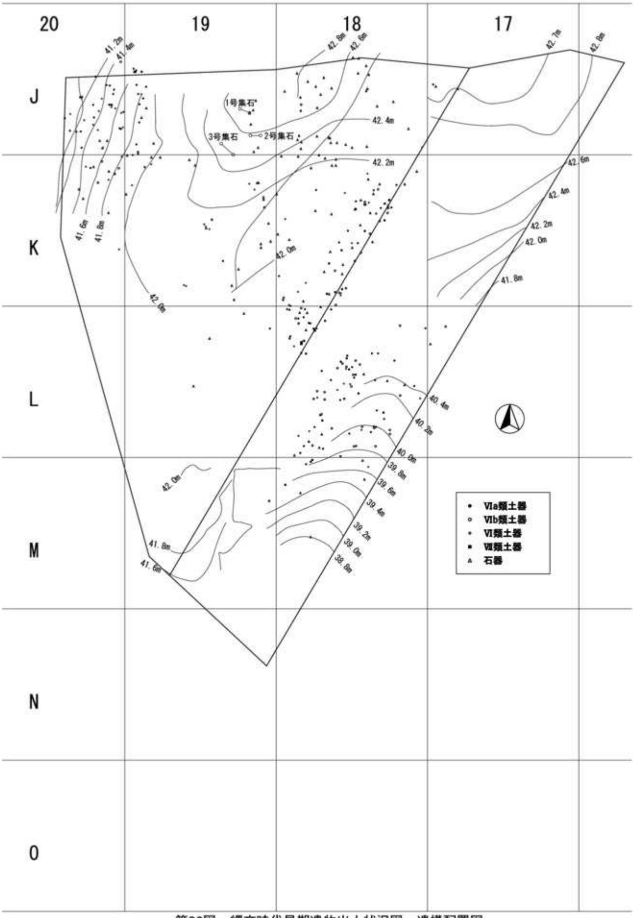
Ｊ―19区Ⅳ層から検出されたもので，礫に大小の差はほとんどみられず，拳大の角礫が30個ほどで構成されている。礫の密集度合いは低い。礫はほぼ高低差がない状態で広がっており，掘り込みも確認されなかった。

③３号集石（第25図）

Ｊ―19区Ⅳ層から検出されたもので，３基のうち礫の散乱範囲が一番広く，２ｍ×1.5ｍ四方の範囲で散乱している。礫は角礫で，拳大よりやや大きめのものが８個と，拳大またはそれ以下の大きさのものが数十個で構成されている。 礫の密集度合いは非常に低く，散乱している。礫はほぼ高低差がない状態で広がっており，掘り込みも確認されなかった。



第25図　縄文時代早期集石遺構



第26図　縄文時代早期遺物出土状況図・遺構配置図

（2）遺物

遺物は西側調査区において集中して出土したほかは，ほとんど見られなかった。

①土器

Ⅰ類土器からⅫ類までの12種に分類できる。

Ⅰ類土器（第27図　89）

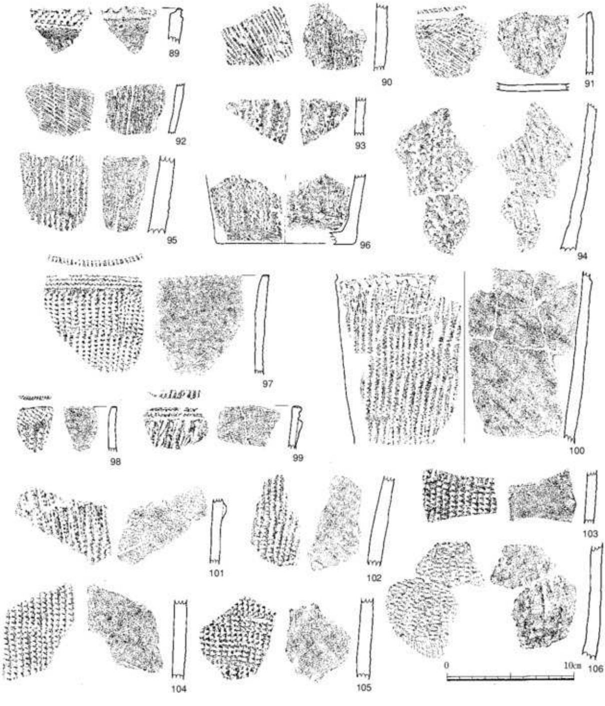
Ⅰ類土器は1点である。89は口唇部内側に段を有し，外側にはヘラによる刻目を施すものである。口縁部外面には斜位に貝殻刺突文を施し，その下に横位の貝殻刺突文を施す。

Ⅱ類土器（第27図　90）

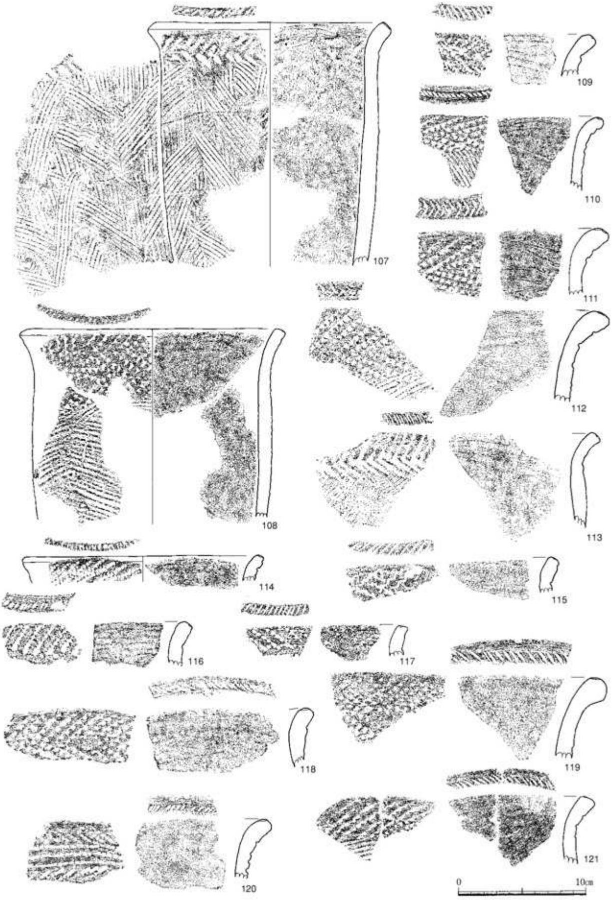
Ⅱ類土器も1点である。90は円筒の胴部で，斜位の貝殻条痕文の上に，2条の貝殻刺突文を施す。

Ⅲ類土器（第27図　91・92）

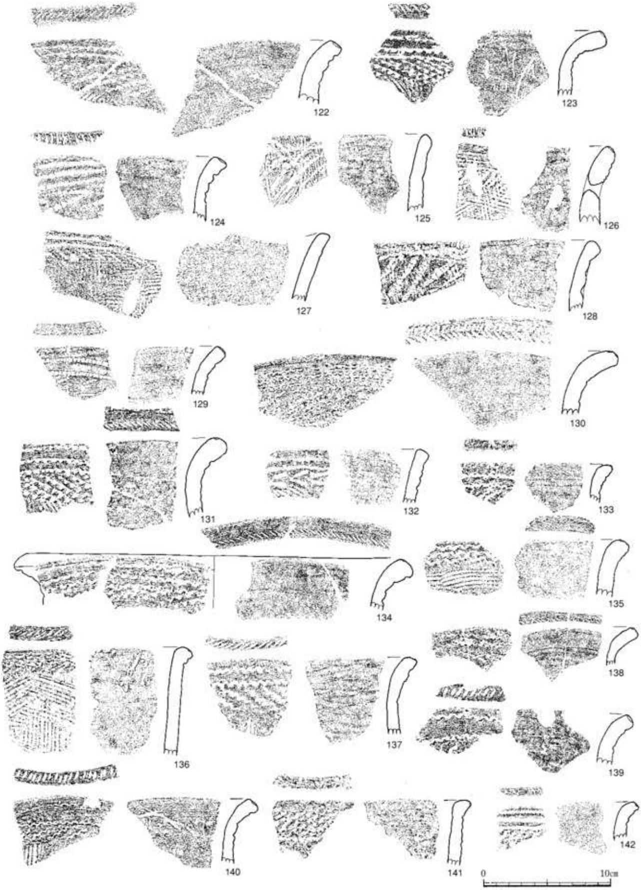
Ⅲ類土器は2点である。胴部外面は押引状の条痕文を施し，その上に貝殻刺突線文を縦位又は斜位に



第27図　Ⅰ～Ⅴ類土器


107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
0
10cm

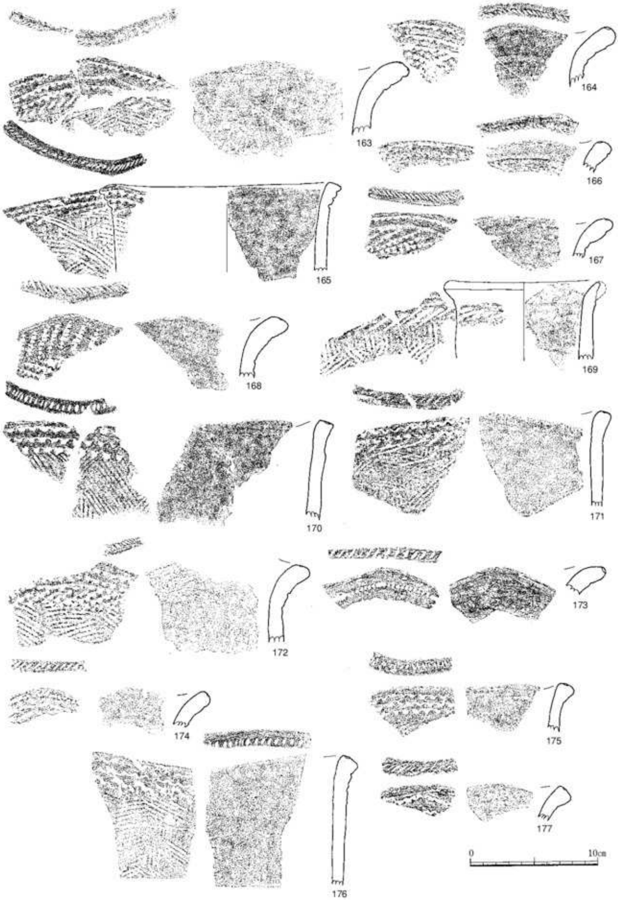
第28図　Ⅵa類土器 1


122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
0
10cm

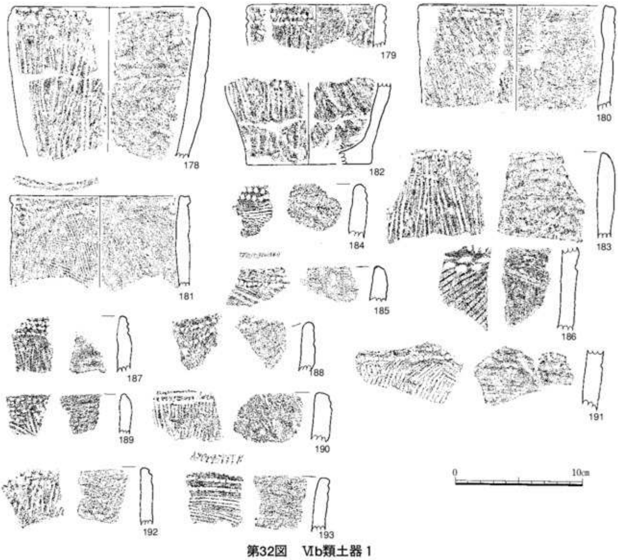
第29図　Ⅵa類土器 2

143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
0
10cm

第30図　Ⅵa類土器 3


163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
0
10cm

第31図　Ⅵa類土器 4



第32図　Ⅵb類土器１

施す二重施文である。91・92は角筒で，91は波状口縁を呈し，口唇部にはヘラで刻目を施す。口縁部外面には横位の貝殻刺突文を施す。

Ⅳ類土器（第27図　93～96）

Ⅳ類土器は，口縁部外面に横位の貝殻刺突文が施され，胴部に縦位又は斜位の貝殻刺突線文が施されるものである。内面はヘラケズリが施される。

Ⅴ類土器（第27図　97～106）

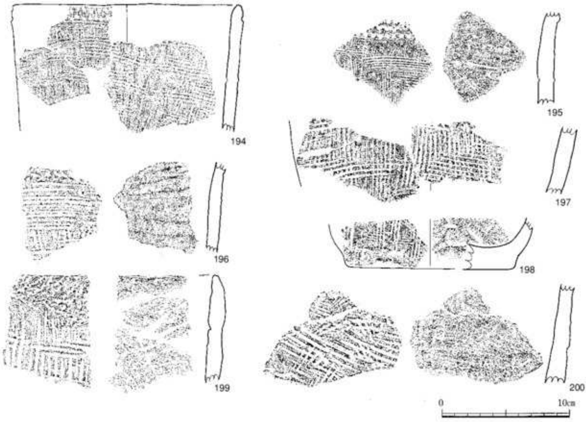
Ⅴ類土器は，口縁部が外反し，外面には横位又は斜位の貝殻刺突文が施されるもので，楔形突起を有するものもある。口唇部に貝殻筋による横圧やヘラによる刻目が施され，胴部は貝殻筋の押引きによる横方向の施文,胴部下位には縦位の沈線が施される。97・98は楔形突起がないタイプのものである。口縁部はわずかに外反する。99～101は楔形突起を有するものである。楔は雑な作りで間隔も狭く貼り付けられる。99・100は楔と楔の間に，101は楔の両脇に貝殻刺突文を施す。102～106は貝殻による横方向の押引きが施された胴部である。

Ⅵ類土器（第28図～第38図　107～271）

Ⅵ類土器は，縄文時代早期の中心を占める円筒土器である。口縁部が外反もしくはやや外反するものをａ，直行もしくはやや内湾するものをbとした。

Ⅵａ類（第28図～第31図　107～177）

107～177は口縁部が外反もしくはやや外反するものである。口唇部はヘラによる刻目が施されるものが多い。口縁部は貝殻腹縁による刺突文が，斜位・横位・縦位・羽状に施される。胴部には貝殻腹縁に



第33図　Ⅵb類土器２

よる条痕文が斜位もしくは綾杉文状に施される。底部には浅い刻目が観察されるものが多い。Ⅵ類土器の中でも中心を占める土器である。

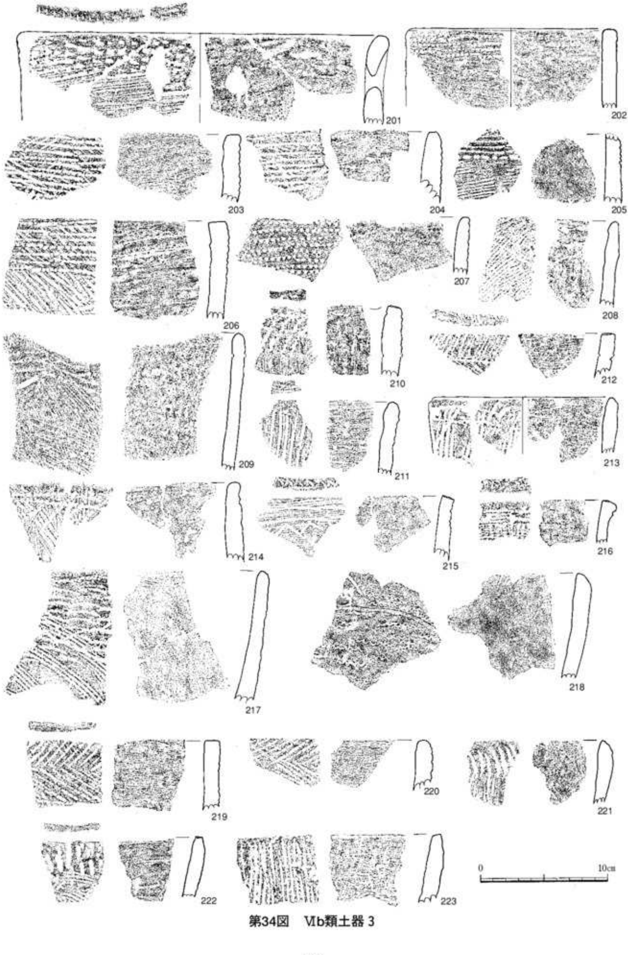
107は復元口径19.0cmを測る。108は復元口径20cmを測る。111・112は口唇部の刻みが羽状に刻まれる。114は復元口径18cmを測る。118～121は口縁部の外反の度合いが強く，口唇部の刻目が内面寄りに刻まれる。125・127・128は口縁部の貝殻刺突文の下にも条痕文を施す。126は補修孔が看取される。127には未貫通の補修孔と思われる凹みが見られる。130・131・134・135は口唇部の刻目が内側寄りに施される。134は復元口径31.4cmを測る大型のものである。145・149・151・153・160は横位に施された貝殻刺突文の下にヘラ状工具による連続刺突文が横位もしくは斜位に施される。143は口唇部の刻目が内側寄りに施され，口縁部の外反の度合いも強い。146は復元口径14.2cmを測る。

163～177は口縁部が外反し，さらに波状口縁を呈するものである。口縁部には横位，斜位，羽状，横位の下に斜位に貝殻刺突文が施される。164・166・176は口唇部の刻目が内面寄りに施される。165・169の復元口径はそれぞれ19cm，12.8cmを測る。

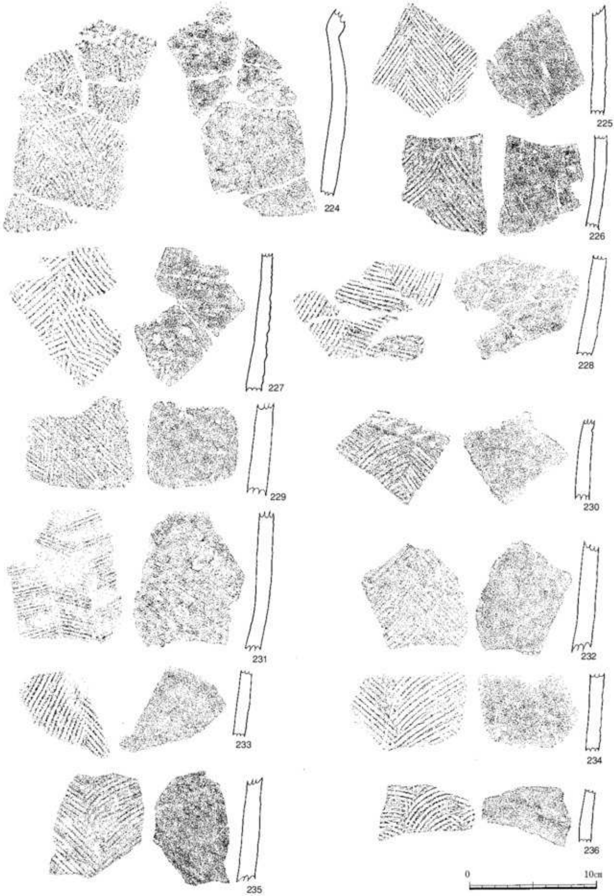
Ⅵb類土器（第32図～第34図　178～223）

178～223は口縁部が直行もしくはやや内湾するものである。口唇部は丸くつくられるものとほぼ平坦につくられるものがあり，ヘラによる刻目が施されるものもある。口縁部は棒状の工具による連点文や貝殻による刺突文が，斜位・横位・縦位・羽状，またはそれらを組み合わせて施される。胴部にはヘラや貝殻による条痕文が縦位・横位・斜位もしくは格子状に施される。

178～189は口縁部に棒状の工具で連点文を施すものである。178～183は，ヘラケズリ調整を面取り状に行った上から縦位の条痕文を雑に施す。178～180・183の復元口径は，順に14.8cm，11.0cm，15.2cm，14.0cmを測る。182は底部で，復元底径9.8cmを測る。178～180・183のいずれかと同一個体であると思われる。188は波状口縁を呈する。


201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
0
10cm

第34図　Ⅵb類土器 3



第35図　Ⅵ類土器１

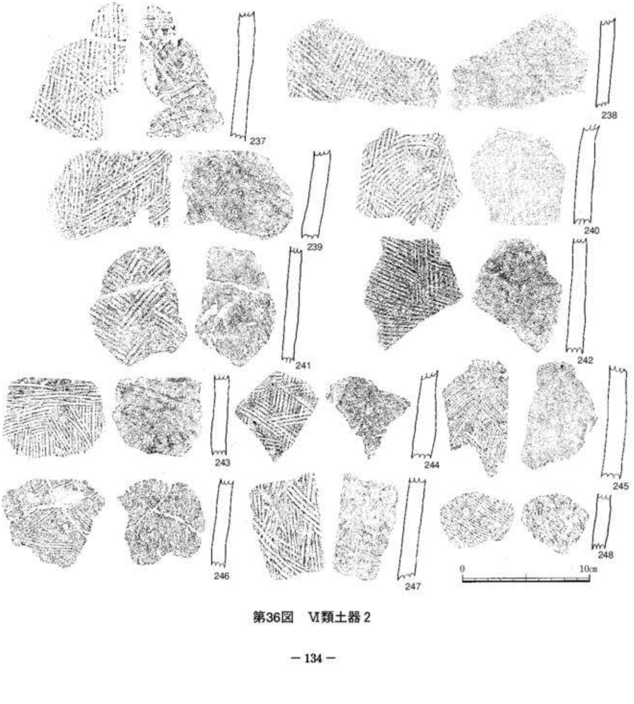
190～193は胴部に貝殻条痕文，その上から口縁部に貝殻刺突文を施す。190は貝殻で刺突後そのまま条痕を引いたものと思われる。

194～200は胴部に格子目状の条痕文が施されるものである。194は口縁部に棒状の工具による連点文が廻る。復元口径17.4cmを測る。195は口縁部に貝殻刺突文を横位に施す。198は底部である。199・200は条痕文を格子状に深く施すもので，199の口縁部には貝殻刺突文を斜位に施す。

201は口縁部に大型の貝殻を使用して縦位の貝殻刺突文を押引き状に施し，下には条痕文も施される。復元口径14.7cmを測り，補修孔が見られる。

202～208は口縁部に横位の貝殻刺突文を数条施す。202は復元口径16.4cmを測る。209は波状口縁を呈する。212は口縁部にヘラ状工具による斜位の沈線と，それに接して横位の沈線が施される。213は復元口径14.0cmを測る。218は内面にミガキ調整が施される。219・220は羽状の貝殻刺突文が施される。221～223は縦位の貝殻刺突文が施されるもので，223は刺突文の下にも強い縦位の貝殻条痕文が施される。

224～258はⅥ類土器の胴部である。貝殻もしくはヘラ状工具による条痕文を綾杉状，斜位，縦位，横位に施す。



第36図　Ⅵ類土器2

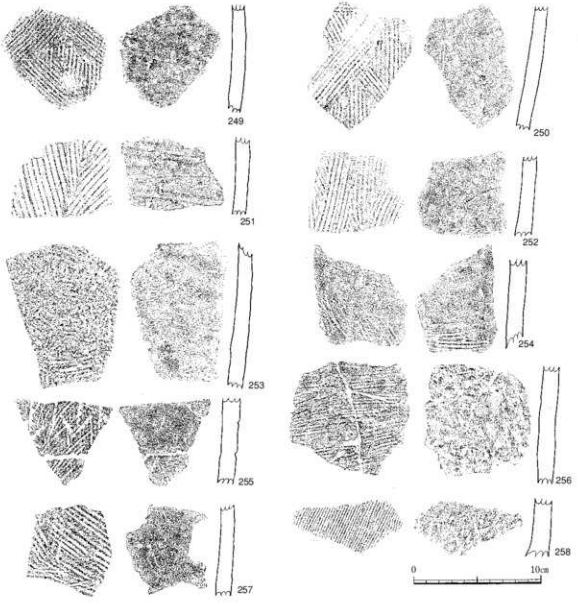
259～271はⅥ類土器の底部である。胴部には貝殻もしくはヘラ状工具による条痕文が施される。259～265の底部下面には刻目が見られる。264の底面はミガキを施したように滑らかである。

Ⅶ類土器（第39図～第41図　272～303）

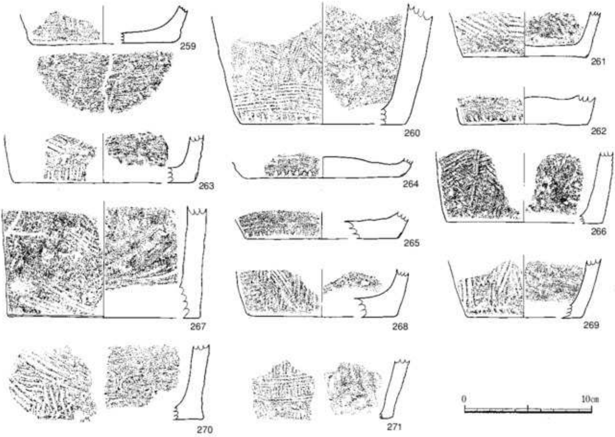
Ⅶ類土器は，胴部に貝殻腹縁による刺突文が羽状に施されるものである。口縁部は直行またはやや内湾し，瘤を有するものも見られる。272は，横方向に羽状の貝殻刺突文を施すものである。胴部中位から上と下では刺突文が変化しており，施文具の貝殻を途中で変えたものと思われる。273～278は羽状の貝殻刺突文を縦方向に施したものである。273は波状口縁を呈し，口縁部直下に棒状の工具による連点文を1条施したあと，貝殻刺突文を羽状に施す。

279～282は斜位の貝殻刺突文を組み合わせた上から，横位の刺突文を施す。283～286は小型の貝殻を使用して刺突文を施すものである。287はヘラ状工具により綾杉状に文様を施したものである。290～298は羽状の貝殻刺突文を横方向に施したものである。290は復元口径18.6㎝を測る。298は底部である。299はヘラ状工具により綾杉状の文様が施されるもので，Ⅵ類の範疇に入る可能性もある。

300～302は口縁部に瘤を有するものである。300は口縁部と瘤上に横位の貝殻刺突文を施し，胴部に



第37図　Ⅵ類土器 3



第38図　Ⅵ類土器4

羽状の貝殻刺突文を縦方向位に施す。瘤は横形のもので，4か所もしくは5か所付くものと思われる。301・302は縦形の瘤を有し，301の瘤には縦位の貝殻刺突文が施されるが，302の瘤は無文である。303は貝殻を押引き状に刺突して羽状の文様を施したもので，波状口縁を呈する。

Ⅷ類土器（第42図 304）

Ⅷ類土器は1点であった。304は小型の鉢形土器で，ほぼ完形に復元できた。器壁は小型のわりに厚く，口唇部は平坦につくられる。外面には丁寧なナデ調整の上から斜位の短沈線が施される。

Ⅸ類土器（第42図 305～311）

円筒形条痕文土器と呼ばれるものである。305～311はわずかに外反する口縁部で，端部は丸くつくられる。外面には横位の条痕文が施される。305・306の復元口径は，それぞれ28.6cm，20.8cmを測る。310は胴部である。口縁部に近い部位には，波状の条痕文が施される。311は310と同一個体と思われる底部である。

Ⅹ類土器（第42図 312）

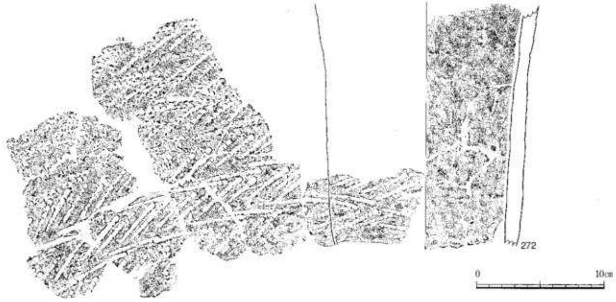
Ⅹ類土器は1点で，底部は欠損しているものの口縁部から胴部まで図上復元することができた。312は口縁部が外反し，胴部は中位でやや膨らむ器形を呈するもので，胴部には楕円押型文が施される。復元口径25.4cmを測る。

Ⅺ類土器（第42図 313・314）

Ⅺ類土器は2点掲載した。313は「ハ」の字状に開く口縁部である。外面には2条の貝殻刺突文で縦位の刺突文を施し，口唇部にも同じ工具を使い，刺突文を斜位に施す。314は頸部から胴部である。頸部の縊れ部には刺突文が，胴部には条痕文が施される。

Ⅻ類土器（第42図　315）

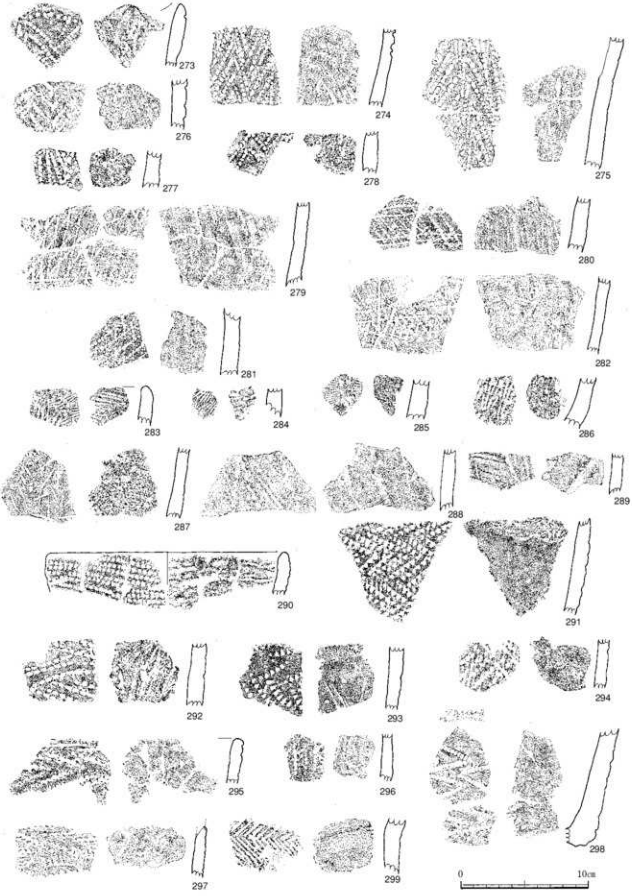
Ⅻ類土器は1点である。315は口縁部はわずかに開き，口唇部は平坦につくられる。外面には貝殻条痕文が横位又は斜位に施される。



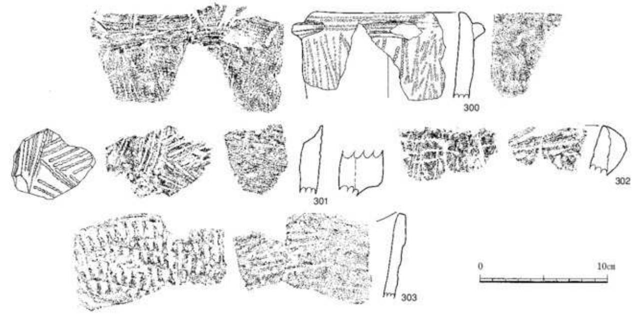
第39図　Ⅶ類土器１

早期土器観察表１

挿図番号	報告番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第27図	89	L−18	Ⅳ	口縁部	明褐	灰黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	90	K−19	Ⅳ	胴部	褐	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	91	K−20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻押引文	ヘラケズリ	
	92	K−19	Ⅳ	胴部	赤褐	橙	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	93	−	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	94	L−18,K−19	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙		○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	95	J−18	Ⅶ	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	96	K−20	Ⅳ	底部	明黄褐	黄灰	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	97	K−20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	98	K−19	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	99	M−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・くさび形貼付文	ヘラケズリ	
	100	L･M−18,J−19	Ⅳ	胴部	褐	明褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	101	L−19	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・くさび形貼付文	ヘラケズリ後ナデ	
	102	K−19	Ⅳ	胴部	暗灰黄	灰黄褐		○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	103	K−19	Ⅴ	胴部	明赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	104	K−19	Ⅳ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	105	K−19	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	106	K−19	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	明褐	○	○			良	押型文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
第28図	107	J−19･20	Ⅳ	口縁部	褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	108	J−19,L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	109	L−19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	110	L−18	Ⅳ	口縁部	褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	111	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	112	K−18	Ⅳ	口縁部	オリーブ褐	にぶい褐	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	113	J−19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	114	J−20	Ⅶ	口縁部	にぶい黄褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	115	K−19	Ⅳ	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	116	K−20	Ⅶ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	117	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	118	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	119	J−20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	120	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	121	J−20	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	明褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	


273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
0
10cm

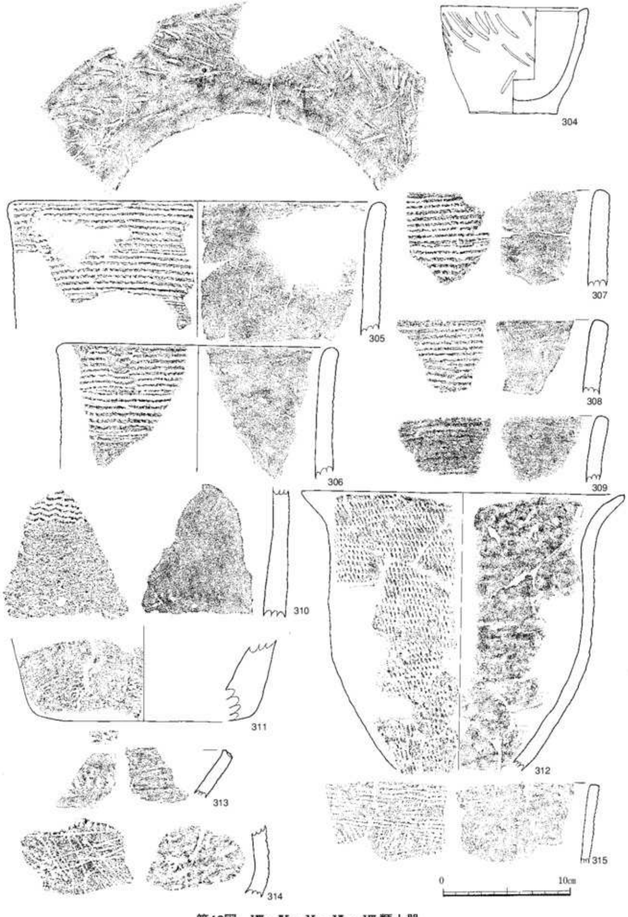
第40図　Ⅶ類土器 2



第41図　Ⅶ類土器 3

早期土器観察表 2

挿図番号	報告番号	出土区	層位	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第29図	122	L−18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	123	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	124	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○		○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	125	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	126	J−20	Ⅳ	口縁部	褐	暗褐		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラミガキ	補修孔あり
	127	K−20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	128	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	129	K−18	Ⅳ	口縁部	褐	灰黄褐	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	130	J−19	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	131	J−19	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	132	J−17	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい黄褐	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	133	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	黄灰	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	134	J−20	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	135	K−18	Ⅳ	口縁部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	136	J−20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	137	L−18	Ⅳ	口縁部	赤褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	138	L−18	Ⅳ	口縁部	明褐	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	139	K−18	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	140	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	スス
	141	J−19	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	142	L−18	Ⅳ	口縁部	褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
第30図	143	J−20	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	144	J−20	Ⅳ	口縁部	明褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	145	L−18	Ⅳ	口縁部	明褐	明赤褐	○		○		良	貝殻刺突文・刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	146	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	浅黄	○				良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	147	L−18	Ⅳ	口縁部	橙	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	148	K−18	Ⅳ	口縁部	明褐	明赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	149	K−18	Ⅳ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	150	J−20	Ⅳ	口縁部	赤褐	灰褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	151	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	152	−	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○				良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	153	L−18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○				良	貝殻刺突文・刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	154	K−18	Ⅳ	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	155	J−19	Ⅳ	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	156	L−18	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	157	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	158	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	明褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	159	J−20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	160	L−18	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	暗灰黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	161	L−18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	162	M−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・刺突文	ヘラケズリ後ナデ	



第42図　Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ類土器

早期土器観察表 3

挿図番号	報告番号	出土区	層位	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第31図	163	J−20	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	164	K−18	Ⅳ	口縁部	赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	165	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	166	L−18	Ⅳ	口縁部	明赤褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	167	J−20	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	168	J−20	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	169	L−18	Ⅳ	口縁部	黄褐	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	170	L−18	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	171	K−19	Ⅶ	口縁部	褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	172	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	173	L−18	Ⅴ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	174	L−18	Ⅳ	口縁部	明黄褐	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	175	L−18	Ⅲ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	176	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	177	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
第32図	178	K−18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	179	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	180	L−18	Ⅳ	口縁部	黒褐	明褐	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	181	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	182	−	Ⅳ	底部	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	183	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	184	K−18	Ⅴ	口縁部	黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	185	L−18	Ⅳ	口縁部	暗灰黄	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	186	L−18	Ⅳ	胴部	橙	浅黄	○				良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	187	K−19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	188	L−18	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	189	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	190	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	191	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	192	K−18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	193	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
第33図	194	L−18	Ⅳ	口縁〜胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○				刺突文・格子状条痕文	ヘラケズリ	
	195	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○				貝殻刺突文・格子状条痕文	ヘラケズリ	
	196	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	橙	○	○				刺突文・格子状条痕文	ナデ	
	197	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	縦・横条痕文	ヘラケズリ	
	198	L−18	Ⅳ	底部	にぶい黄橙	暗灰黄	○	○				格子状条痕文	ヘラケズリ	
	199	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○				貝殻刺突文・格子状条痕文	?	
	200	K−19	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○				貝殻刺突文・横位条痕文	ヘラケズリ	
第34図	201	J−19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		良	貝殻押引文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	補修孔
	202	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	
	203	−		口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	204	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	205	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	206	L−18	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	207	J−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	208	L−18	Ⅳ	口縁部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	209	−	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	210	K−19	Ⅴ	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	211	J−20	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	明褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	212	K・L−18	Ⅳ・Ⅴ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	213	L−18	Ⅳ	口縁部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	214	K・L−18	Ⅳ	口縁部	暗褐	灰黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	215	M−18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	216	K−18	Ⅴ	口縁部	黒褐	オリーブ褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	217	K−20	Ⅳ	口縁部	橙	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	218	M−18	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	スス
	219	−	Ⅳ	口縁部	橙	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	220	L−18	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	221	K−18	Ⅳ	口縁部	黒褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	222	−	Ⅶ	口縁部	にぶい黄	明黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	223	L−18	Ⅳ	口縁部	明黄褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
第35図	224	K−18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	225	L−18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	226	J−18	Ⅳ	胴部	明赤褐	明黄褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	227	J−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	228	K−18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	明赤褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	229	K−19	Ⅳ	胴部	黄褐	明黄褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	230	J−20	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	ヘラ刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	231	K−19	Ⅳ	胴部	褐	明褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	232	K−20	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	233	J−20	Ⅳ	胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	234	L−18	Ⅳ	胴部	明褐	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	235	J−20	Ⅳ	胴部	橙	明褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	236	L−18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
第36図	237	M・L−18	Ⅳ	胴部	暗灰黄	明黄褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	238	J−20	Ⅳ	胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	239	K−18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	240	K−19	Ⅳ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	241	K−18	Ⅲ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	242	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	243	L−18	Ⅳ	胴部	明褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文・貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	

早期土器観察表 4

挿図番号	報告番号	出土区	層位	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第36図	244	K−19	Ⅳ	胴部	暗灰黄	灰オリーブ	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	245	L−18	Ⅳ	胴部	浅黄	にぶい黄橙	○		○		良	斜格子貝殻条痕文・貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	スス
	246	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	247	J−18	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○		○		良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	248	K−19	Ⅳ	胴部	黄褐	明褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ	
第37図	249	K−18	Ⅳ	胴部	褐	褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	250	J−20	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	251	K−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	252	K−18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	253	K−19	Ⅳ	胴部	明黄褐	明黄褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	254	L−18	Ⅳ	胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	条痕・ヘラケズリ後ナデ	
	255	J−18	Ⅳ	胴部	黄褐	明褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	256	L−18	Ⅳ	胴部	黒褐	赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	257	J−19	Ⅳ	胴部	にぶい褐	明褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	258	K−19	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	条痕文	ヘラケズリ	
第38図	259	K−19	Ⅶ	底部	橙	橙	○				良	条痕文・指圧痕	ヘラケズリ後ナデ	
	260	L−18	Ⅳ	底部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ	
	261	J−20	Ⅳ	底部	橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ	
	262	J−20	Ⅳ	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	刻目	ヘラケズリ後ナデ	
	263	J−20	Ⅳ	底部	橙	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ後ナデ	
	264	K−20	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	刻目	ヘラケズリ後ナデ	
	265	K−18	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	刻目	ヘラケズリ	
	266	K−18	Ⅳ	底部	明赤褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	267	K・L−18	Ⅳ	底部	黄褐	橙	○	○			良	斜格子貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ	
	268	J−19	Ⅳ	底部	暗灰黄	にぶい褐	○	○			良	条痕文	ヘラケズリ	
	269	K−20	Ⅳ	底部	にぶい赤褐	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ	
	270	J−18	Ⅶ	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	271	K−18	Ⅳ	底部	暗黄褐	暗黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
第39図	272	L−18	Ⅳ	胴部	褐灰	明褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
第40図	273	K−18	Ⅳ	口縁部	黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	274	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					刺突文	ヘラケズリ	
	275	K・M−18	Ⅳ	胴部	暗黄褐	橙	○					刺突文	ヘラケズリ	
	276	−	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい橙		○				刺突文	ヘラケズリ	
	277	K−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					刺突文	ヘラケズリ	
	278	K−18	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい橙	○					刺突文	ヘラケズリ	
	279	K−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○			良	貝殻刺突文・刺突文	ヘラケズリ	
	280	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	281	K−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○				貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	282	M−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	283	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	284	L−18	Ⅳ	胴部	灰褐	にぶい黄褐	○					貝殻押型文	ヘラケズリ後ナデ	
	285	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○					貝殻押型文	ヘラケズリ後ナデ	
	286	K−18	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい黄橙	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	287	L−18	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○				板状工具による刺突文	?	
	288	K−19	Ⅴ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○					貝殻刺突文	ナデ	
	289	K−18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	290	K−18	Ⅳ	口縁部	明褐	にぶい黄橙	○		○			貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	291	K−18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○				貝殻刺突文	ナデ?	
	292	−	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○		○			貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	293	L−18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○				貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	294	J−19	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○					貝殻刺突文	ナデ	
	295	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	296	L−18	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	297	L−18	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい橙		○				貝殻刺突文	ナデ	
	298	M−18	Ⅳ	胴〜底部	褐灰	褐灰	○	○				貝殻刺突文	ナデ	
	299	K−18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	灰褐	○	○				羽状文	?	
第41図	300	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい橙		○				貝殻刺突文	ヘラケズリ	瘤状突起
	301	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙		○				貝殻刺突文	ナデ	瘤状突起
	302	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐		○				貝殻刺突文	ナデ	瘤状突起
	303	−	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	褐灰	○	○				貝殻押し引き文	ヘラケズリ後ナデ	
第42図	304	L−18	Ⅳ	完形	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	沈線	ヘラケズリ後ナデ	
	305	K−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	306	M−18	Ⅳ	口縁部	黄褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	307	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	308	J−18	Ⅳ	口縁部	黒褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	309	J−18	Ⅳ	口縁部	浅黄	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	310	K−20	Ⅳ・Ⅴ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			波状文	ナデ	
	311	K−20	Ⅳ	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	波状文	ナデ	
	312	L・K−18	Ⅳ	口縁〜胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	楕円型押型文	ヘラケズリ後ナデ	
	313	K−19	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	314	J−18	Ⅳ	胴部	明黄褐	浅黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	
	315	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	

（３）遺物（石器）

縄文時代早期の石器は，石鏃，石槍，石斧，礫器，磨石，石皿等が出土した。

石鏃（第43図・44図）

石鏃は，遺跡の西側調査区のＪ－18～20区から16点，Ｋ－18～20区から13点，Ｌ－18区から２点，Ｍ－18区から３点その他１点の合計35点が出土している。

素材は黒曜石，安山岩，頁岩，チャート等である。その内，黒曜石は肉眼観察によると三船産に類似するものが３点，上牛鼻産に類似するものが２点，合計５点が出土している。

分類は，本報告書Ｐ21の農業開発総合センター遺跡群内の石鏃分類図によって分類した。Aab７点，Abb８点，Abc３点，Aca２点，Acb４点，Acc１点，Baa１点，Caa１点，Cba１点，Ccb１点，不明なものが４点である。石鏃は打製でほとんどが入念な交互剥離により調整されている。35点中22点が破損しており，先端部が破損しているものは５点，先端部と基端の両方破損しているのは７点，基端が破損しているのは10点で片方のみ欠損が５点，両方とも欠損しているのが５点である。

その内，珪質岩製の349は大久保型石鏃と考えられ，近隣の諏訪脇遺跡でも出土している。

石槍（第44図）

351はホルンフェルスを素材とする。縦長剥片を素材にし，丁寧な両面剥離加工が施される。下部は欠損している。

スクレイパー・剥片（第45図）

352～355はスクレイパーである。352の石材は頁岩で，両面に剥離を施される。353は横長剥片を使用し，下部に刃部を施している。354は自然面を多く残した横長剥片の下部を刃部としている。355は上部，下部，側縁に刃部を有している。356・357は剥片である。357は自然面を多く残した剥片で使用痕は認められない。石斧の一部である可能性もある。

磨製石斧（第45図）

358～360は磨製石斧である。358は縦長剥片を利用したもので，刃部は丁寧に研磨している。359は，二次加工を施したものである。360は自然面を利用し，刃部を丁寧に研磨加工している。

打製石斧（第46図）

361～363は打製石斧である。361は敲打による整形痕が明瞭に観察され，刃部は剥離による上位の両側縁に抉りが見られる。362・363は有肩打製石斧で362は基部，363は刃部が欠損している。

礫器（第46図）

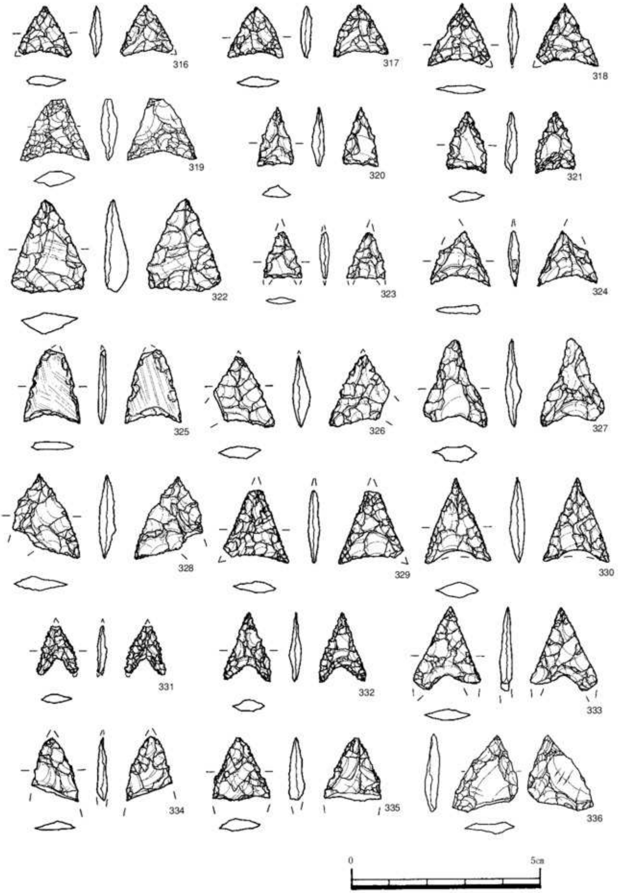
364～367は礫器である。364は自然面を多く残し，全体に剥離痕がある。365～367は自然面を多く残し，下部に刃部形成を行っている。

磨石・敲石・凹石（第47図～55図）

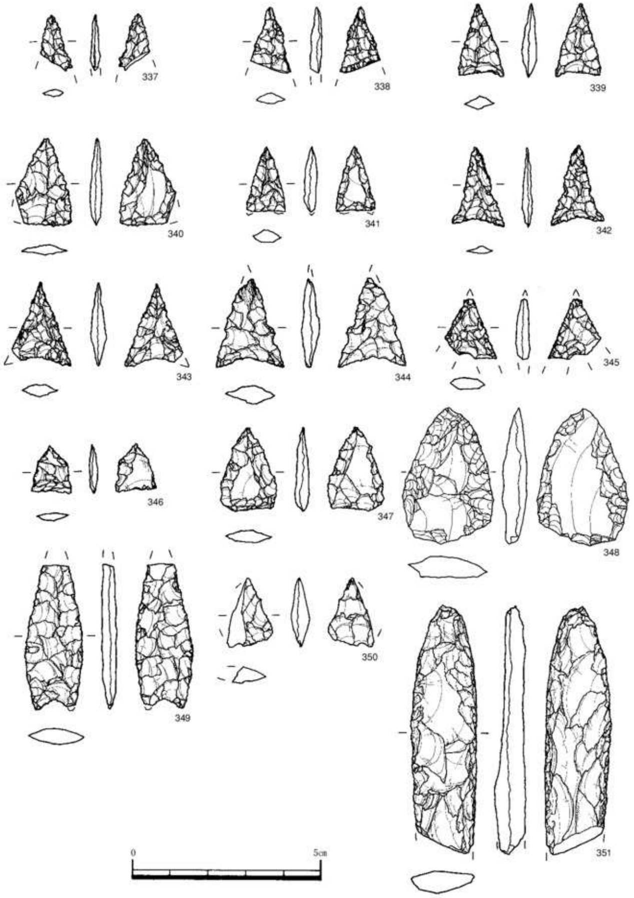
円礫を用いた磨石が多く，石材は砂岩が多い。368～371は片面のみに磨石の機能のあるもの。372～394は両面に磨石の機能のあるもの。395～398は両面と側縁部に磨石の機能のあるものである。399～422は磨石と敲石の機能を持つものである。399は片面に磨石と敲石の機能を持つもの。400～404は両面に磨石の機能を持ち，片面に敲石の機能を持つもの。405～422は両面と側面に磨石の機能を持ち，敲石の機能も持ったもの。423～434は磨石，敲石と凹石の機能を持つものである。

石皿（第56図）

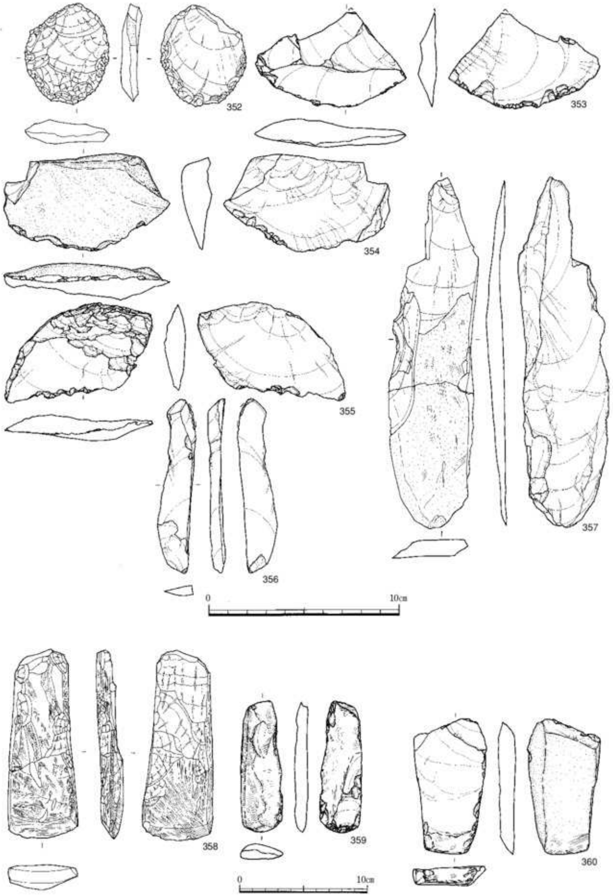
５点を図化した。石材は砂岩のものが多い。435・437は両面とも作業面があるものである。436・438・439は片面のみの作業面である。５点とも敲打痕などは見られなかった。



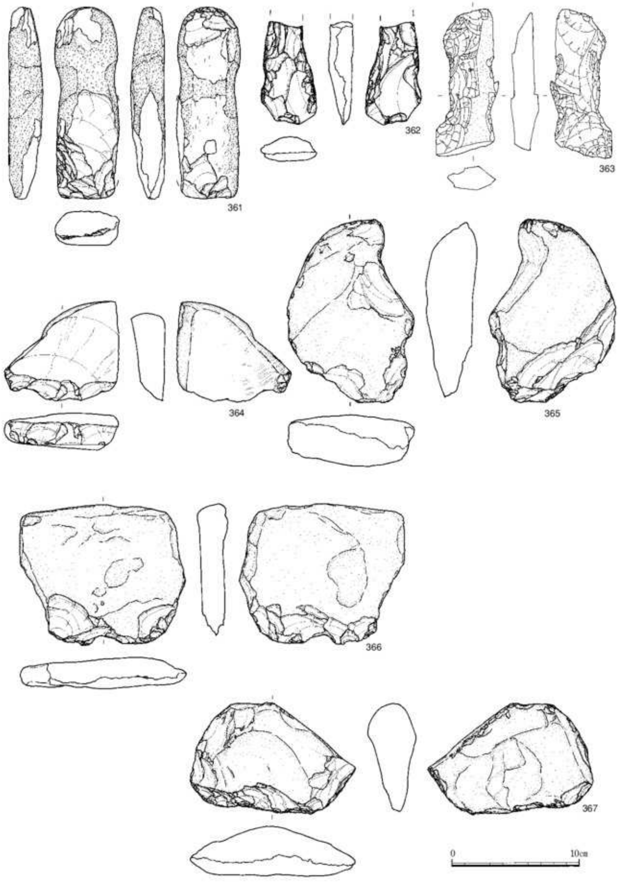
第43図　縄文時代早期石器 1



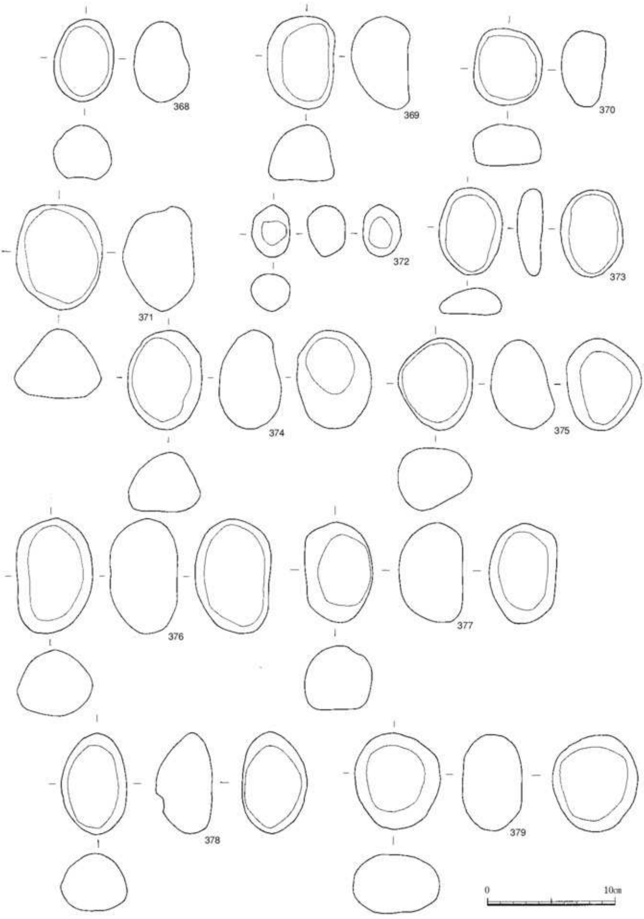
第44図　縄文時代早期石器 2



第45図　縄文時代早期石器 3

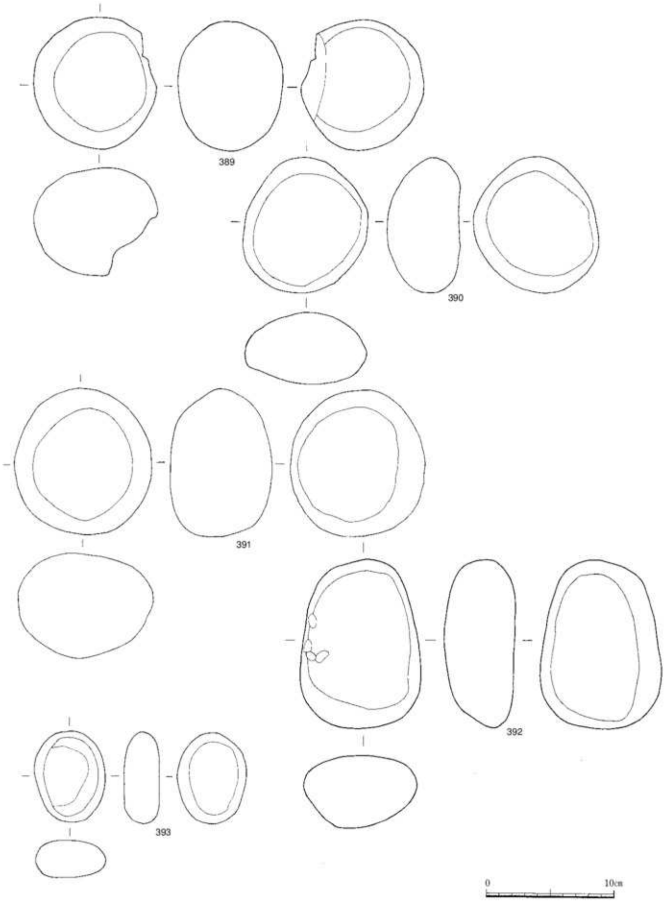


第46図　縄文時代早期石器 4

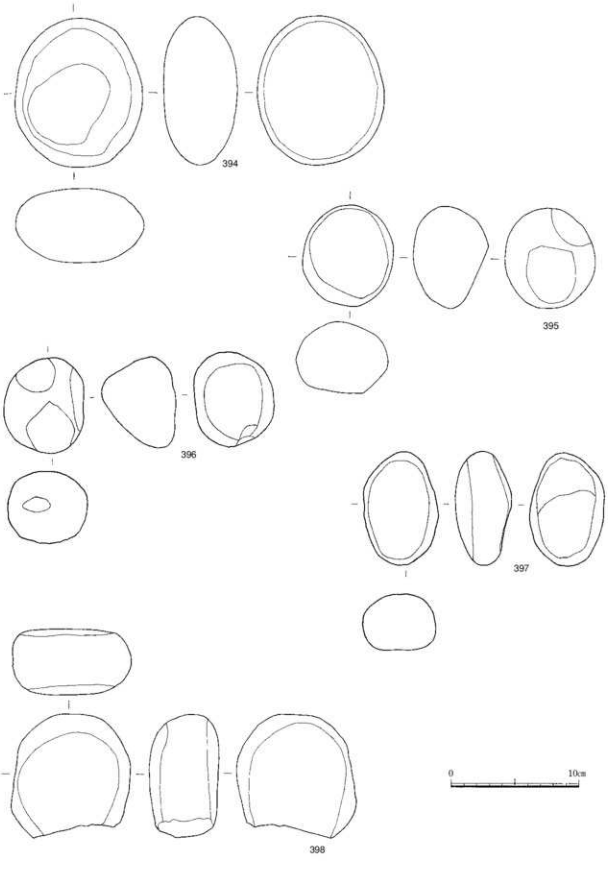


第47図　縄文時代早期石器５

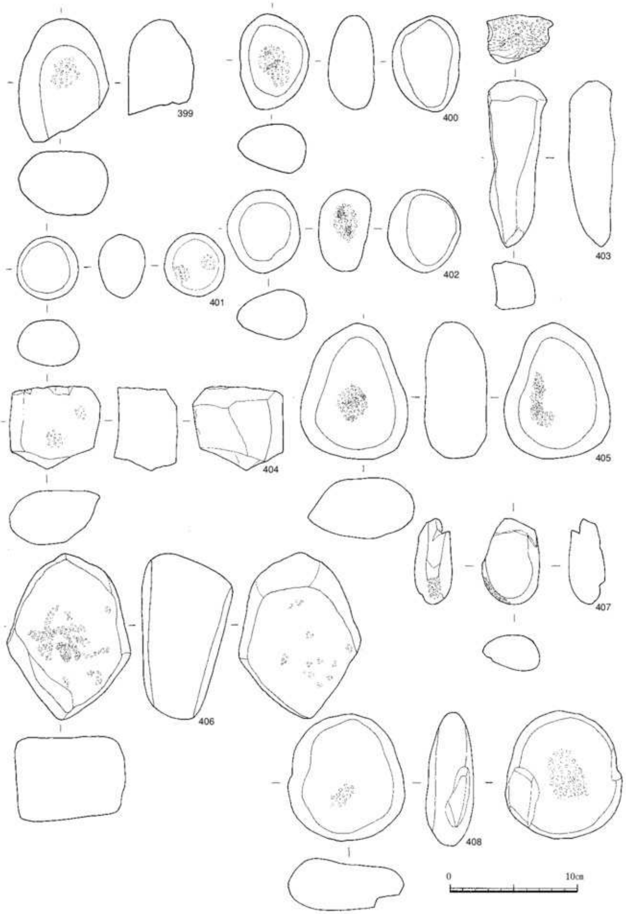
第48図　縄文時代早期石器 6



第49図　縄文時代早期石器 7

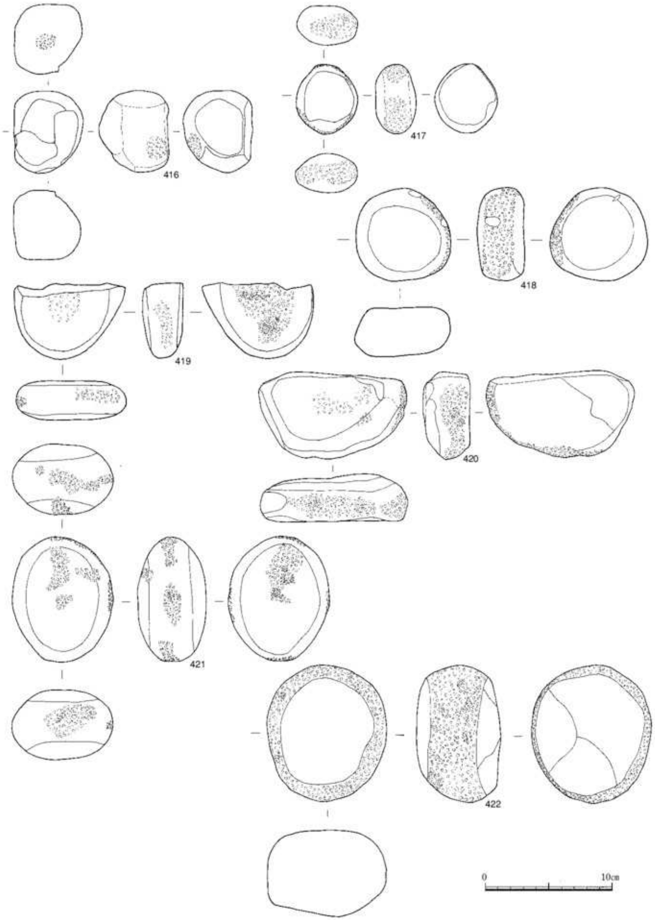


第50図　縄文時代早期石器 8

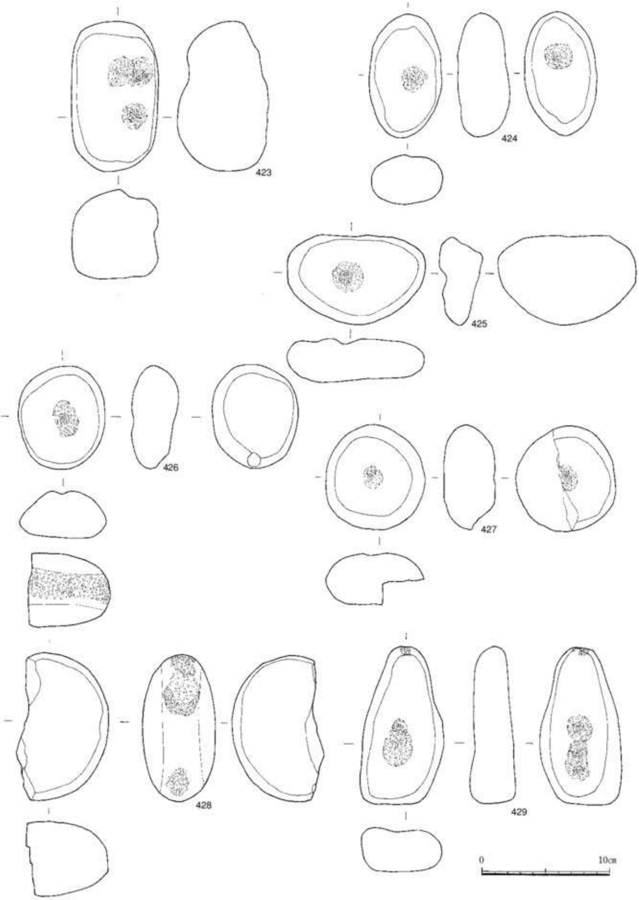


第51図　縄文時代早期石器 9

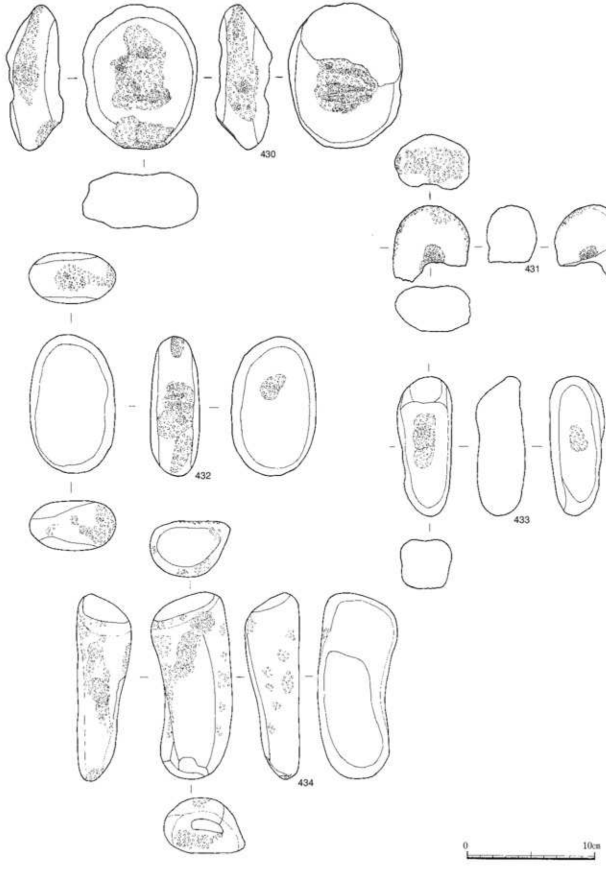
第52図　縄文時代早期石器10



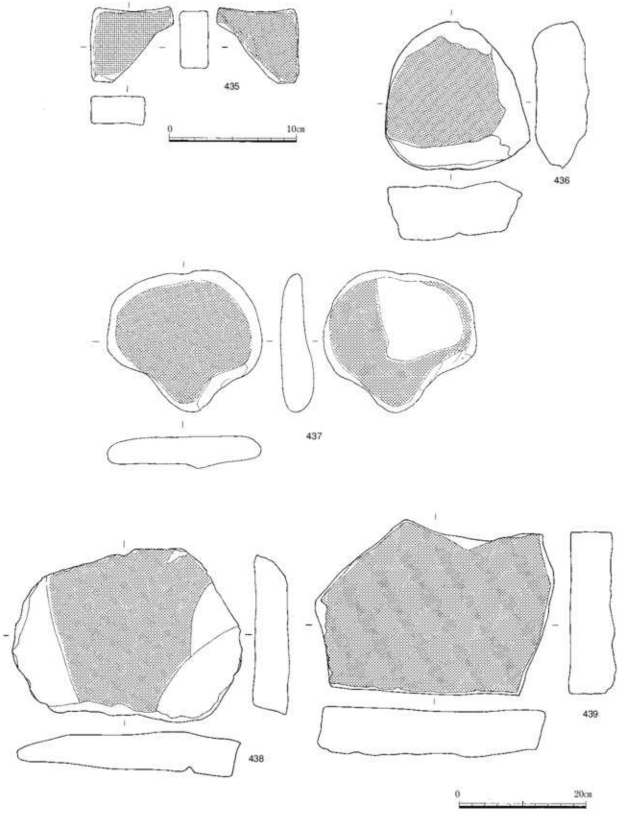
第53図　縄文時代早期石器11



第54図　縄文時代早期石器12



第55図　縄文時代早期石器13



第56図　縄文時代早期石器14

縄文時代早期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	分類
第43図	316	石鏃	J−18	Ⅶ	黒色安山岩	1.3	1.4	0.4	0.4	A−a−b
	317	石鏃	K−18	Ⅶ	チャート	1.4	1.5	0.3	0.4	A−a−b
	318	石鏃	J−18	Ⅶ	頁岩	1.7	1.7	0.3	0.5	A−a−b
	319	石鏃	J−18	Ⅶ	頁岩	1.5	1.8	0.4	0.73	A−a−b
	320	石鏃	K−19	Ⅶ	頁岩	1.6	1	0.3	0.4	A−a−b
	321	石鏃	K−18	Ⅳ	頁岩	1.6	1.1	0.3	0.6	A−a−b
	322	石鏃	J−18	Ⅶ	シルト質頁岩	2.4	2	0.6	2.3	A−a−b
	323	石鏃	K−18	Ⅳ	黒色安山岩	(1.2)	1	0.3	0.3	A−b−b
	324	石鏃	J−18	Ⅳ	ホルンフェルス	(1.5)	1.3	0.3	0.5	A−b−b
	325	石鏃	K−20	Ⅳ	安山岩	(2)	1.5	0.2	0.7	A−b−b
	326	石鏃	J−18	Ⅶ	黒色安山岩	(1.9)	1.6	0.5	1	A−b−b
	327	石鏃	J−18	Ⅳ	安山岩	2.3	1.7	0.4	1	A−b−b
	328	石鏃	J−18	Ⅶ	安山岩	2.2	1.8	0.5	1.2	A−b−b
	329	石鏃	J−18	Ⅶ	シルト質頁岩	(1.9)	1.7	0.3	0.7	A−b−b
	330	石鏃	K−18	Ⅶ	シルト質頁岩	2.2	1.8	0.4	1	A−b−b
	331	石鏃	L−18	Ⅶ	黒曜石（三船）	(1.3)	1.1	0.3	0.2	A−b−c
	332	石鏃	M−18	Ⅳ	黒曜石（上牛鼻）	1.8	1.3	0.3	0.4	A−b−c
	333	石鏃	K−18	Ⅳ	チャート	(2.2)	1.8	0.4	0.9	A−b−c
	334	石鏃	J−20	Ⅳ	チャート	(1.7)	1.2	0.3	0.5	A−b−?
	335	石鏃	K−19	Ⅳ	チャート	(1.7)	1.5	0.4	0.8	A−b−?
	336	石鏃	J−18	Ⅶ	頁岩	2.1	1.2	0.2	0.75	A−b−?
第44図	337	石鏃	L−18	Ⅳ	頁岩	(1.5)	0.8	0.3	0.2	A−b−?
	338	石鏃	K−18	Ⅳ	チャート	(1.7)	1.1	0.3	0.5	A−b−?
	339	石鏃	K−19	Ⅶ	黒色安山岩	1.9	1.2	0.4	0.6	A−c−a
	340	石鏃	J−18	Ⅶ	シルト質頁岩	2.3	1.5	0.3	1	A−c−a
	341	石鏃	K−19	Ⅶ	頁岩	(1.7)	1	0.4	0.6	A−c−b
	342	石鏃	K−20	Ⅳ	黒曜石（三船）	2.1	1.4	0.3	0.6	A−c−b
	343	石鏃	J−18	Ⅶ	シルト質頁岩	2.2	1.6	0.4	0.8	A−c−b
	344	石鏃	−	Ⅳ	安山岩	(2.4)	1.8	0.5	1.4	A−c−b
	345	石鏃	M−18	Ⅳ	黒曜石（三船）	(1.6)	1.4	0.4	0.7	A−c−c
	346	石鏃	K−19	Ⅳ	黒曜石（上牛鼻）	1.3	1.1	0.2	0.3	B−a−a
	347	石鏃	J−18	Ⅶ	安山岩	2.2	1.5	0.4	1.4	C−a−a
	348	石鏃	J−18	Ⅶ	シルト質頁岩	3.6	2.4	0.6	5.31	C−b−a
	349	石鏃	M−18	Ⅳ	珪質岩	(3.8)	1.5	0.4	2.8	C−c−b
	350	石鏃	J−18	Ⅶ	頁岩	1.9	(1.2)	0.5	0.7	?
	351	石槍	L−18	Ⅳ	ホルンフェルス	6.6	1.8	0.85	10.3	
第45図	352	スクレイパー	K−19	Ⅶ	頁岩	5.3	4.4	1.3	29.02	
	353	スクレイパー	K−18	Ⅳ	ホルンフェルス	5.1	8	1.5	39.5	
	354	スクレイパー	K−18	Ⅳ	ホルンフェルス	5.2	8.75	1.95	77.5	
	355	スクレイパー	K−18	Ⅳ	ホルンフェルス	5.25	7.85	1.4	40.8	
	356	剥片	K−19	Ⅳ	頁岩	9.2	2.1	0.95	12.9	
	357	剥片	J−18	Ⅳ	頁岩	18.55	4.8	1.1	88.3	
	358	磨製石斧	J−19	Ⅶ	頁岩	17.2	9.9	3.4	188.52	
	359	磨製石斧	K−18	Ⅳ	ホルンフェルス	10.46	3.35	1.25	58.9	
	360	磨製石斧	K−20	Ⅳ	安山岩	10.8	5.8	1.55	139.5	
第46図	361	打製石斧	K−18	Ⅳ	安山岩	15.2	5.15	2.75	343	
	362	打製石斧	J−19	Ⅶ	ホルンフェルス	8.2	4.45	2	71.9	
	363	打製石斧	L−19	Ⅳ	頁岩	10.85	3.8	1.85	107.91	
	364	礫器	K−18	Ⅳ	頁岩	7.9	9.05	2.95	245	
	365	礫器	J−19	Ⅳ	ホルンフェルス	14.5	10.05	4.15	650	
	366	礫器	K−18	Ⅳ	頁岩	11.15	13.3	2.55	465	
	367	礫器	K−18	Ⅳ	ホルンフェルス	8.85	13	3.95	490	
第47図	368	磨石	J−18	Ⅳ	砂岩	6.4	4.7	4.3	160.2	
	369	磨石	K−19	Ⅶ	砂岩	7.2	5.2	4.4	250.39	
	370	磨石	K−18	Ⅶ	砂岩	5.9	5.3	3.3	165	
	371	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	8.3	6.7	5.5	412	
	372	磨石	K−19	Ⅳ	砂岩	4.1	3.1	2.9	54.5	
	373	磨石	J−20	Ⅳ	砂岩	6.9	4.9	2	85.71	
	374	磨石	J−19	Ⅳ	砂岩	7.7	5.7	4.7	263.46	
	375	磨石	J−19	Ⅶ	砂岩	7.2	5.7	5	253	
	376	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	8.9	5.8	5.2	400	
	377	磨石	L−18	Ⅳ	砂岩	7.9	5	5.3	269.26	
	378	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	8	5.1	4.4	199.63	
	379	磨石	K−18	Ⅳ	安山岩	7.6	6.8	4.7	316.04	

縄文時代早期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	分類
第48図	380	磨石	K−19	Ⅳ	砂岩	8.6	6.2	4.3	319.54	
	381	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	7.2	6.3	4.7	282.37	
	382	磨石	K−18	Ⅶ	砂岩	6.1	6.1	3.7	190	
	383	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	10	6.6	4.3	395	
	384	磨石	L−18	Ⅳ	砂岩	8.1	9.1	3.1	355	
	385	磨石	L−18	Ⅳ	砂岩	11.3	5	4	320	
	386	磨石	−	Ⅳ	砂岩	10.6	5.1	3.2	278.49	
	387	磨石	L−18	Ⅳ	砂岩	9.3	2.9	2	75	
	388	磨石	J−17	Ⅳ	安山岩	12.8	10	5	1070	
第49図	389	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	10.2	9.6	8.3	1160	
	390	磨石	L−18	Ⅳ	安山岩	10.7	9.7	5.6	760	
	391	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	11.4	10.7	8.1	1300	
	392	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	13.2	9.5	5.7	1070	
	393	磨石	L−18	Ⅳ	砂岩	7.3	5.5	2.9	171.97	
第50図	394	磨石	K−18	Ⅳ	安山岩	11.6	10	5.7	990	
	395	磨石	K−18	Ⅶ	砂岩	8	7.1	5.3	369	
	396	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	7.5	6.2	5.6	317.47	
	397	磨石	J−18	Ⅶ	砂岩	9	5.7	4.4	276.31	
	398	磨石	K−18	Ⅳ	砂岩	(9.8)	9	5.2	665	
第51図	399	磨石・敲石	J−18	Ⅶ	砂岩	(8.9)	6.9	5	390	
	400	磨石・敲石	K−18	Ⅳ	砂岩	7.3	5.3	3.8	197.38	
	401	磨石・敲石	J−18	Ⅳ	砂岩	5	4.8	3.6	130	
	402	磨石・敲石	K−18	Ⅶ	砂岩	6.6	5.9	3.9	160	
	403	磨石・敲石	K−18	Ⅳ	頁岩	13.1	4.7	3.1	302.64	
	404	磨石・敲石	J−19	Ⅶ	砂岩	6.4	7	4.6	322.03	
	405	磨石・敲石	K−18	Ⅳ	砂岩	10.8	8.3	4.7	590	
	406	磨石・敲石	K−19	Ⅳ	安山岩	12.9	8.7	7.2	1130	
	407	磨石・敲石	J−18	Ⅶ	砂岩	6.7	4.5	2.8	112.57	
	408	磨石・敲石	L−18	Ⅳ	砂岩	10	9.1	4	490	
第52図	409	磨石・敲石	K−18	Ⅳ	砂岩	6.5	4.4	3.9	143.46	
	410	磨石・敲石	L−18	Ⅳ	砂岩	12.6	8.2	5.9	650	
	411	磨石・敲石	−	Ⅳ	砂岩	10.4	7	3.8	460	
	412	磨石・敲石	J−19	Ⅶ	砂岩	7.9	5.5	3.7	190.7	
	413	磨石・敲石	K−18	Ⅳ	砂岩	7.5	7.7	3.8	192.84	
	414	磨石・敲石	J−18	Ⅶ	砂岩	12.6	6.7	5	620	
	415	磨石・敲石	K−20	Ⅳ	砂岩	(8.9)	7.7	3.7	355	
第53図	416	磨石・敲石	K−19	Ⅶ	砂岩	6.4	(5.4)	5.4	256.81	
	417	磨石・敲石	K−19	Ⅶ	砂岩	5.4	4.8	3.1	110	
	418	磨石・敲石	J−20	Ⅳ	砂岩	7.3	7.5	3.6	316.37	
	419	磨石・敲石	J−20	Ⅳ	砂岩	(5.9)	8.7	3.1	205	
	420	磨石・敲石	J−19	Ⅳ	砂岩	6.7	11.6	3.7	420	
	421	磨石・敲石	J−18	Ⅳ	砂岩	9.7	8	5.3	550	
	422	磨石・敲石	J−19	Ⅶ	砂岩	10.7	9.2	6.6	990	
第54図	423	磨石・敲石・凹石	K−19	Ⅳ	砂岩	11.7	6.8	7	890	
	424	磨石・敲石・凹石	K−19	Ⅶ	砂岩	9.7	5.7	3.9	292.27	
	425	磨石・敲石・凹石	L−19	Ⅶ	砂岩	6.9	10.7	2.9	330	
	426	磨石・敲石・凹石	K−18	Ⅶ	砂岩	8.1	6.8	3.7	277.78	
	427	磨石・敲石・凹石	K−18	Ⅶ	砂岩	8.1	7.7	4	313.58	
	428	磨石・敲石・凹石	K−20	Ⅳ	安山岩	11.7	(6.9)	5.8	700	
	429	磨石・敲石・凹石	K−18	Ⅳ	砂岩	12.3	6.4	3.5	420	
第55図	430	磨石・敲石・凹石	L−19	Ⅳ	砂岩	11.3	8.8	4.2	615	
	431	磨石・敲石・凹石	K−18	Ⅳ	砂岩	(6.0)	5.9	3.8	155	
	432	磨石・敲石・凹石	K−19	Ⅳ	砂岩	10.9	6.6	3.9	430	
	433	磨石・敲石・凹石	L−18	Ⅳ	砂岩	11	4.2	3.8	282.08	
	434	磨石・敲石・凹石	J−19	Ⅳ	砂岩	15	6	4.4	505	
第56図	435	石皿	K−20	Ⅳ	砂岩	8.6	9.4	3.6	390	
	436	石皿	J−18	Ⅶ	安山岩	23.1	22.7	8.6	1170	
	437	石皿	K−18	Ⅳ	砂岩	22	24	5	3700	
	438	石皿	K−18	Ⅳ	砂岩	27.3	36	5.3	7800	
	439	石皿	J−17	Ⅳ	砂岩	27	36.6	7.4	5100	

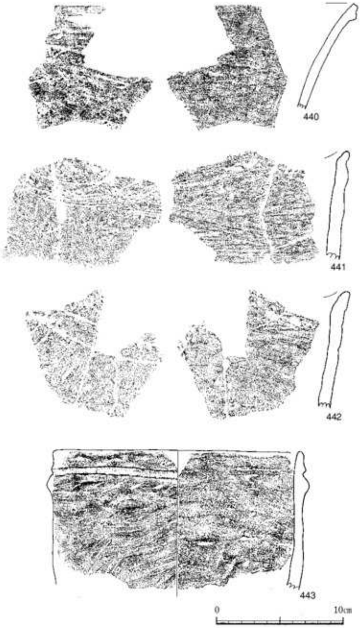
2　縄文時代中期・後期

縄文時代中期・後期については，遺構は検出されず，遺物のみが出土した。遺物は土器で，点数も４点と少ない。

（１）土器（第57図 440～443）

XIII類～XV類土器に分類した。

440はXIII類土器に分類したものである。胎土に滑石を含み，口縁部は外側を肥厚させて突帯をつくる。441・442は同一個体と思われるもので，XIV類に分類した。口縁部は波状口縁を呈し，外面には沈線が施される。443はXV類土器に分類したものである。口縁部は外側に肥厚し，凹線が廻る。胴部は無文で，ナデ調整が施される。



第57図　XIII・XIV・XV類土器

3　縄文晩期

縄文時代晩期は，西側調査区から土坑が１基，東側調査区から柱穴列が６基検出された。遺物は土器と石器が出土したが，出土量は非常に少ない。

（１）遺構

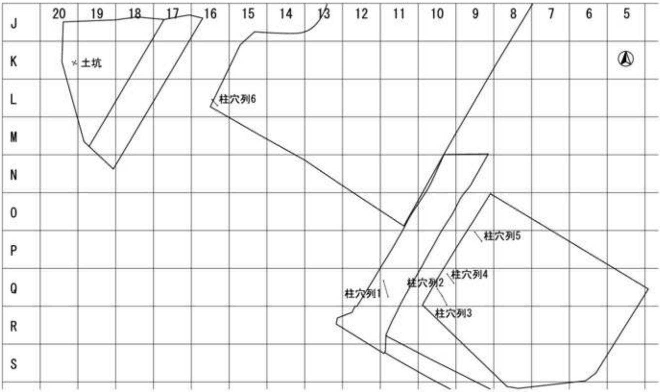
①土坑（第58図～第62図）

西側調査区Ｋ―20区，IV層上面で検出された。平面プランはほぼ円形で直径約１ｍを測り，掘り込みは約15cm程度である。

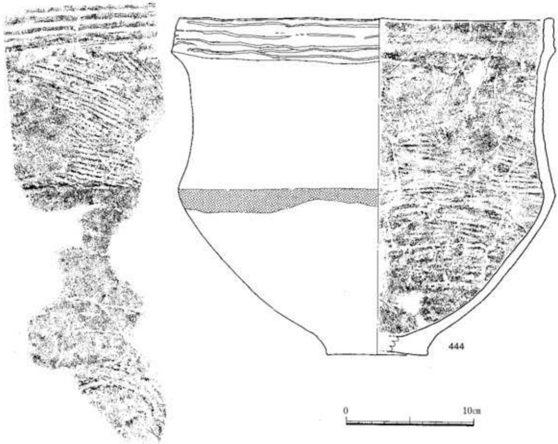
土坑内からはXVI類に分類される土器片が多く出土し，そのうち３個体についてはほぼ完形に復元することができた。またその他に石器２点と管玉2点も出土した。444・445・447は，XVI類土器に分類されるものである。そのうち444・445はほぼ完形に復元できた資料である。胴部最大径が器高を二分する位置にあり，口縁部とほぼ同じ大きさを呈する。444は深鉢形土器で，口縁部幅が狭くやや内側に内湾する。また凹線が先端の丸い工具を使用して３条廻る。底部はわずかに上げ底となる。器面調整は，内外面とも条痕を施した後ナデ調整を行っているが，一部条痕が残る部分も見られる。445は深鉢形土器と浅鉢形土器の中間的な形状のものである。胴部は最大径部分で「く」の字状に屈曲し，頸部で外反した後口縁部でもわずかに開く。口縁部幅は狭く，１条の凹線が廻る。また，ゆるやかな山状突起を４か所有し，凹点を施す。底部は高台風に作り出している。器面調整は内外面とも丁寧なミガキが施される。447は，445と同様の器形を呈する深鉢形土器の口縁部である。446はXVI類土器に分類される深鉢形土器

の口縁部である。448は小型の深鉢形土器である。Ⅻ類土器に相当するものと思われる。底部から胴部下半に欠けて「ハ」の字状に開き，そこから上方へ延びる。口縁部はやや内傾し，斜位の沈線が格子状に施される。底部は平底で厚い。449はⅫ類土器に分類される深鉢形土器の胴部である。胴部最大径部で「く」の字状に屈曲し，わずかに湾曲しながら頸部へと延びる。450は，Ⅻ類に分類される鉢形の土器である。内外面とも丁寧なナデ調整が施され，煤が付着する。451～454はⅫ類土器に分類される浅鉢形土器である。肩部と頸部の間が短く，頸部で「く」の字状に外側へ屈曲し，短い口縁部をもつ。肩部の屈曲もシャープなため，稜が明瞭である。内外面ともミガキ調整が施される。455はⅫもしくはⅩⅢ類に相当すると思われる深鉢形土器の底部である。456は頁岩製の磨製石斧の刃部である。457は黒

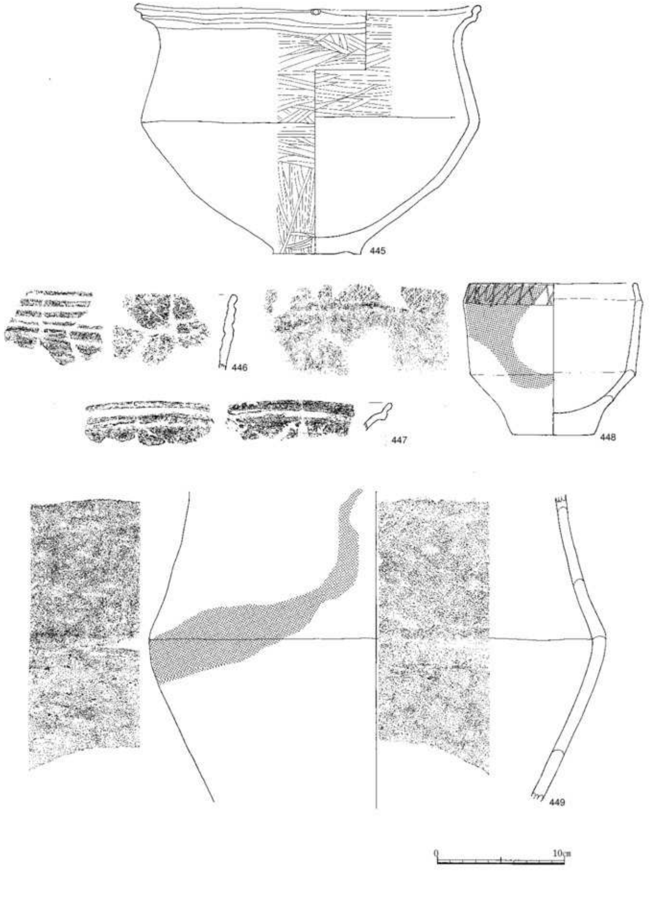
第58図　土抗



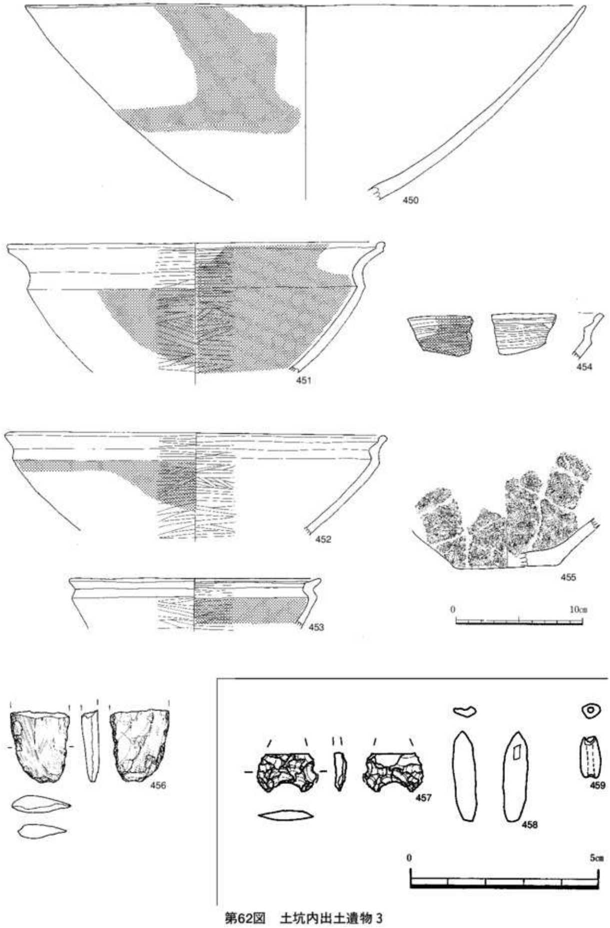
第59図　縄文時代晩期遺構配置図（1/2000）



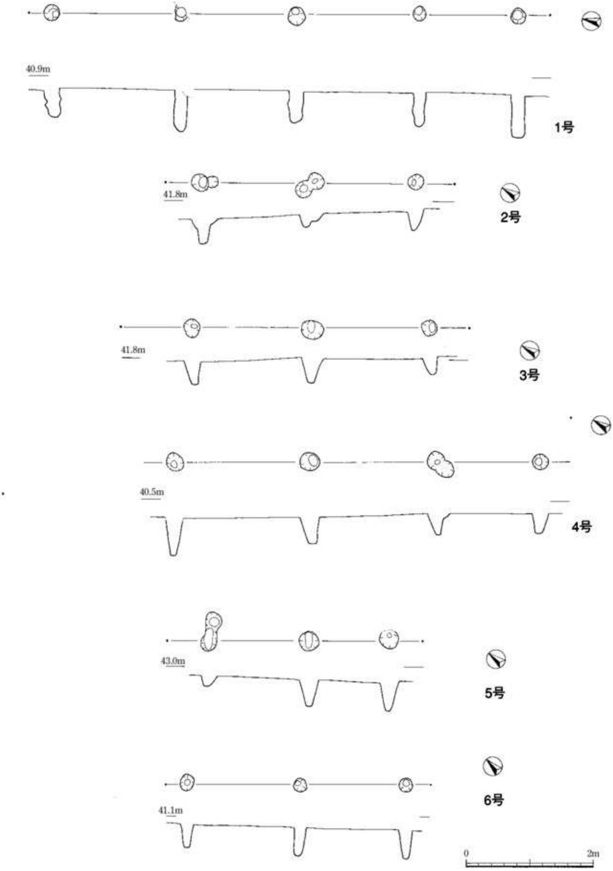
第60図　土坑内出土遺物１



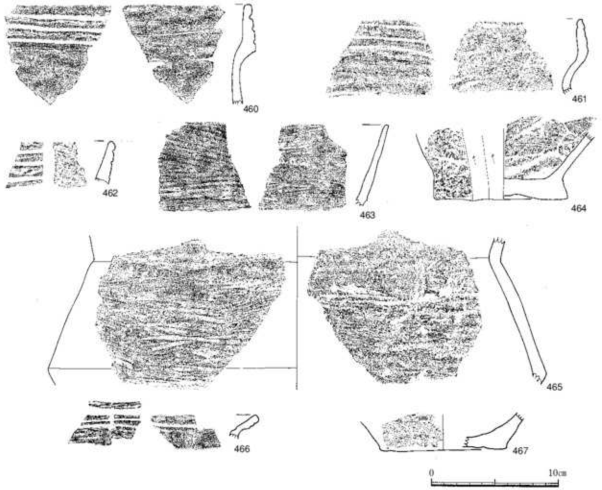
第61図　土坑内出土遺物２



第62図　土坑内出土遺物 3



第63図　柱穴列



第64図　XVI・XVII類土器

曜石製の石鏃であるが，先端部は欠損している。458・459は管玉である。石材は結晶片岩様緑色岩を使用している。

柱穴列（第63図）

柱穴列は，東側調査区においてⅣ層上面で6基検出された。軸方向は6基ともおよそ北北西―南南東である。そのうち5基はP・Q―9～11区に集中している。柱穴は5つ並ぶものが1基，4つが1基で，他は全て3つである。柱穴列の性格については不明である。

（2）遺物（第64図・第65図　460～471）

縄文時代晩期の遺物は西側調査区において土器と石器が出土したが，その出土量は少ない。

①土器（第64図　460～467）

図化できたのは8点であった。460～462はXVI類土器に分類される深鉢形土器である。やや内傾した口縁部には3条の凹線が廻る。461は器面が摩耗しており調整痕が不明であるが，460・462はミガキ調整が施される。463・465はXVII類土器に分類される深鉢形土器の口縁部と胴部である。どちらも器面調整は外面が条痕，内面はナデである。465は肩部と頸部で強く屈曲する。464・467はXVIもしくはXVII類土器に相当する底部である。若干の凹凸は見られるが，平底である。466はXVI類土器に分類される浅鉢形土器である。頸部は「く」の字状に外側へ屈曲し，短い口縁部には2条の沈線が廻る。内外面ともミガキ調整が施される。

中期・後期土器観察表

挿図番号	報告番号	出土区	層位	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第57図	440	L−18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○	滑石	良	ナデ	ヘラケズリ	口縁部突帯
	441	J−19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黄橙(スス付着)	○				良	ナデ 沈線	ヘラケズリ後ナデ	
	442	J−19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黄橙(スス付着)	○				良	ナデ 沈線	ヘラケズリ後ナデ	
	443	SK2	Ⅳ	口縁部	明黄褐	明黄褐	○				良	ケズリ・沈線・貝殻刺突文	ヘラケズリ	

縄文時代晩期　土坑内出土遺物観察表

挿図番号	報告番号	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第60図	444	深鉢完形	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	沈線 ナデ	ナデ	
第61図	445	深鉢完形	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	沈線 ナデ	ナデ	
	446	小形深鉢口縁〜底部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○				良	細沈線	ヘラケズリ	
	447	深鉢口縁部	にぶい灰褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	沈線	ヘラケズリ	
	448	深鉢底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ?	
	449	深鉢胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	
第62図	450	浅鉢口縁〜胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	ナデ	ナデ	
	451	浅鉢口縁〜胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	452	浅鉢口縁〜胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	453	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	454	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	455	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○						

挿図番号	報告番号	種別	石材	産地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第62図	456	磨製石斧	頁岩		5.8	4.7	1.4	39.6	
	457	打製石鏃	黒曜石	三船?	1.0	0.6	0.3	0.6	
	458	管玉	結晶片岩様緑色岩		2.4	0.7	0.2	4.8	
	459	管玉	結晶片岩様緑色岩		1.0	0.4	0.3	3.4	

柱穴列1号(Q−11区)

Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
1	54	28	24	
2	66	24	16	
3	50	40	34	
4	54	24	20	
5	70	26	22	

柱間距離(cm)		全長(cm)
P1-P2	204	724
P2-P3	182	
P3-P4	184	
P4-P5	154	

柱穴列2号(Q−10区)

Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
1	40	42	27	
2	22	48	26	
3	35	25	25	

柱間距離(cm)		全長(cm)
P1-P2	161	326
P2-P3	165	

柱穴列3号(Q−10区)

Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
1	36	28	25	
2	39	34	30	
3	29	24	24	

柱間距離(cm)		全長(cm)
P1-P2	188	370
P2-P3	182	

柱穴列4号(Q−10区)

Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
1	55	30	26	
2	41	32	29	
3	38	48	28	
4	31	25	24	

柱間距離(cm)		全長(cm)
P1-P2	210	640
P2-P3	270	
P3-P4	160	

柱穴列5号(P−9区)

Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
1	48	29	29	
2	40	31	30	
3	17	60	24	

柱間距離(cm)		全長(cm)
P1-P2	125	280
P2-P3	155	

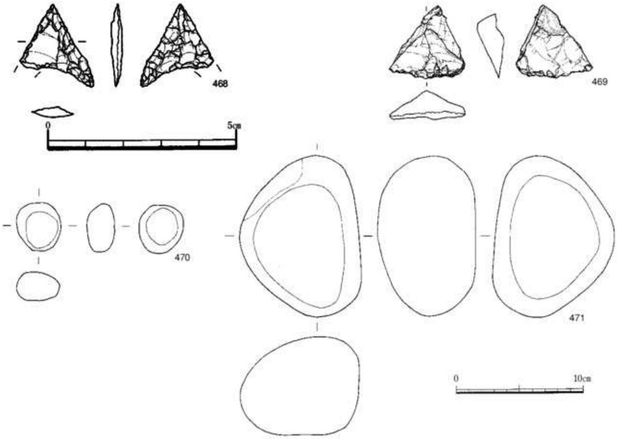
柱穴列6号(L−16区)

Pit	深さ(cm)	長径(cm)	短径(cm)	掘り方
1	39	26	23	
2	45	22	20	
3	45	23	22	

柱間距離(cm)		全長(cm)
P1-P2	178	346
P2-P3	168	

縄文時代晩期土器観察表

挿図番号	報告番号	出土区	層位	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第64図	460	K−20	Ⅲ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○			良	沈線	ミガキ	
	461	J−19	Ⅲ	口縁部	浅黄	浅黄橙	○		○		良	沈線	ナデ	
	462	L−18	Ⅲ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	沈線	ミガキ	
	463	L−18	Ⅳ	口縁部	浅黄	にぶい黄橙	○	○			良	沈線	板ナデ	
	464	M−18	Ⅲ	底部	橙	にぶい黄橙	○				良	ナデ	板ナデ?	
	465	M−18	Ⅲ	胴部	浅黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	沈線	板ナデ	
	466	K−15	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	沈線	ミガキ	
	467	L−15	Ⅲ	底部	浅黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	



第65図　縄文時代晩期石器

縄文時代晩期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	分類
第65図	468	石鏃	K-15	Ⅲ	頁岩	2.2	2	0.3	0.7	A−b−c
	469	スクレイパー	−	表	黒曜石	3.9	4.05	1.5	14.6	
	470	磨石	−	Ⅱ	砂岩	3.9	3.4	2.2	35	
	471	磨石	L-15	Ⅲ	砂岩	12.6	9.4	7.7	1290	

②石器（第65図　468〜471）

縄文時代晩期の石器は，石鏃，スクレイパー，磨石が出土した。

石鏃

468は入念な剥離が施された打製石鏃である。石材は頁岩で基部の一部が欠損している。P21にある農業開発総合センター遺跡群の石鏃分類図によると，A−b−cに分類される。

スクレイパー

469はスクレイパーである。黒曜石製で，肉眼観察によると上牛鼻産に類似するものと思われる。下部に刃部形成が施されている。

磨石

470・471は砂岩製の磨石である。両面に磨石の作業面が見られる。敲打痕などは見られなかった。

第６節　小結

宗円堀遺跡においては，旧石器時代（細石器文化期・ナイフ形石器文化期），縄文時代早期，中期，後期，晩期，中世の各時代の遺構・遺物が出土している。そのうち中世については溝状遺構が検出されており，他の溝状遺構との関連から諏訪脇遺跡の中で掲載した。

旧石器時代

旧石器時代の遺物は，東側と西側に出土地点を分けることができる。東側は，調査範囲全面に200点近い遺物が点在している。西側は，層の区分が難しく，Ⅷ層とⅣ層の一部を旧石器時代の遺物と設定し，集中区・石材の分布状況から３つのブロックを設定した。

東側調整区（１～39）で，出土が顕著なものはナイフ形石器である。点数が18点と多く，東側出土量の1割弱を占める。石材別にみると，黄褐色に白い筋が混ざる玉髄を利用しているものが多い。同一母岩から剥ぎ取ったものもあると思われる。また，シルト質頁岩製のものも多い。石器製作所だった可能性も考えられる。

西側調整区（40～88）は，石材と器種の分布から３つのブロックとそれ以外の地点からの出土と設定した。各ブロックから，細石刃核・細石刃が出土している。また，細石刃核は比較的小さなものが多い。

縄文時代早期

縄文時代早期の遺構は，西側調査区Ｊ－19区において，集石が３基集中して検出された。

縄文時代早期の土器は，Ⅰ類土器～Ⅻ類土器の12種類に分類した。それぞれの類に比定する土器型式は以下のとおりである。

Ⅰ類土器　岩本式土器（早期前半）
Ⅱ類土器　志風頭式土器（早期前半）
Ⅲ類土器　加栗山式土器（早期前半）
Ⅳ類土器　小牧３Ａ段階（早期前半）
Ⅴ類土器　吉田式土器（早期前半）
Ⅵ類土器　石坂式土器（早期中半）
Ⅶ類土器　下剥峯式土器（早期中半）
Ⅷ類土器　桑ノ丸式土器（早期中半）
Ⅸ類土器　中原式土器（早期中半）
Ⅹ類土器　押形文土器（早期中半）
Ⅺ類土器　塞ノ神式土器（早期後半）
Ⅻ類土器　右京西タイプ（早期後半）

これらのうち出土量が最も多いものはⅥ類土器の石坂式土器である。口縁部が外反もしくはやや外反するものと直行するものの２タイプがあり，前者をⅥa類土器，後者をⅥｂ類土器とした。宗円堀遺跡の石坂式土器は，Ⅵa類土器が中心で，これは前迫亮一氏の分類におけるⅠ式（古段階）に相当する。口唇部は丸みを帯び，口縁部は外反し，胴部はやや膨らむ形状を呈する。文様は口唇部と体部に浅い刻目を有し，胴部は綾杉状の貝殻条痕文や格子目の条痕文が施されるものである。また，Ⅵb類土器はⅡ式（新段階）に相当するものであるが，口縁部が外傾もしくは直行するものの他にやや内湾する資料もありバリエーションに富んでいる。

縄文時代早期の石器は，他の農業開発総合センター遺跡群の出土状況とさほど変わりはない。
石鏃は打製石鏃がほとんどであった。入念な交互剥離で調整されている。石鏃の平均長は1.82㎝で，その中で，最長だったＣ－ｃ－ｂ型に分類した石器は，大久保型石鏃といわれるもので，近隣の遺跡でも数点検出されている。

出土数が最も多かった石器は磨石であった。掲載数は67点であった。磨石のみの機能を持つものが31点。磨石と敲石の機能を持つものが24点，磨石・敲石・凹石の機能を持つものが12点であった。石材は砂岩が61点で他の７点は安山岩であった。

石皿は５点とも敲打痕はみられなかった。

縄文時代中期・後期

遺物はⅩⅢ類土器からⅩⅤ類土器で４点と非常に少なく，遺構も検出されなかった。ⅩⅢ類土器は大きく外傾した口縁部先端を外側に肥厚させ突帯をつくるもので，胎土には滑石を含む。中期後半の中尾田Ⅲ類の範疇ではないかと考えたいが，類例がなく今後の資料の増加を待ちたい。ⅩⅣ類土器は外面口縁部付近に先端の鋭い工具により沈線を施すもので，口縁部は波状口縁を呈する。指宿式土器の範疇ではないかと考えたい。ⅩⅤ類土器は市来式土器に比定されるものである。

縄文時代晩期

縄文時代晩期は土坑１基，柱穴列６基が検出された。特に土坑内からはⅫ類に分類される上加世田式土器が多く出土し，そのうち３個体（444・445・448）についてはほぼ完形に復元することができた。これらの土坑内出土土器は，上加世田式土器におけるセット関係を知る上で貴重な資料である。

またその他に石器２点と結晶片岩様緑色岩製の管玉２点も出土した。結晶片岩様緑色岩製の玉類については，農業センター遺跡群で本遺跡のほか，尾ヶ原遺跡で勾玉１点，諏訪脇遺跡で管玉１点，勾玉１点，小玉２点，南原内堀遺跡で小玉１点，諏訪脇遺跡で管玉１点の計４遺跡で７点が出土している。いずれも縄文時代晩期の包含層から出土しており，上加世田式土器段階から入佐式土器段階にかけてのものと思われる。これら玉類の石材の原産地については不明であるが，諏訪前遺跡から有溝砥石が出土していることから，農業センター遺跡群の玉類は諏訪前遺跡で製作されたものと思われる。

柱穴列については，詳細な用途等はっきりしないが，６基中５基がＰ・Ｑ―９～11区に集中して検出されており，軸方向もほぼ同じであることから，同時期に何らかの施設があったものと思われる。

遺物については，出土量は少ない。Ⅻ類土器の上加世田式土器，ⅩⅢ類土器の入佐式土器が出土している。なお近年の研究において，これまで晩期前半としていた土器を後期後葉とする見方があり，大坪遺跡（鹿児島県出水市）の報告書で東和幸氏は，上加世田式土器を後期後半，入佐式土器古段階を後期終末，入佐式土器新段階を晩期初頭，黒川式土器を晩期前半から中半に位置づけているが，農業センター遺跡群では従来の編年に従って述べた。

縄文時代晩期の石器は，石鏃，スクレイパー，磨石が出土している。しかし出土量が少量であるため詳しいことは断定できなかった。

参考文献

清田純一1998「縄文後・晩期土器考―中九州の縄文後・晩期土器とその並行形式について―」『肥後考古』第11号　肥後考古学会
高橋信武・安藤英治1983「大分県官地前遺跡の採集資料―大分県の晩期前半を中心とした土器編年―」『赤れんが』第２号　熊本大学考古学研究会
前迫亮一　2003「石坂式土器再考」　『縄文の森から』創刊号　鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（69）『大原野遺跡』2004
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）『大坪遺跡』2005
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98）『尾ヶ原遺跡』2006
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（112）『諏訪牟田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡』2007

神　原　遺　跡

第Ⅵ章　神原遺跡の発掘調査成果

第１節　調査の経過と層位

神原遺跡は，平成13年10月10日～10月18日までと，平成14年10月15日～平成15年1月17日まで本調査を実施した。本調査は，13年度に支線道路建設部分，14年度に農業センターの病中付帯施設建設地に相当する範囲を対象とした。また，範囲内に工事が行なわれないため未調査とした部分があり，今後，掘削等を行なう場合には発掘調査の必要がある。なお，一部遺物で，調査期間中の大雨により流出し，出土地点不明となったものがある。

１　日誌抄

13年度

10月　調査開始

Ⅱ層掘り下げ。溝状遺構精査。写真撮影。Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ。溝状遺構精査。

12月

遺構内遺物実測。遺物取り上げ。遺構実測。

14年度

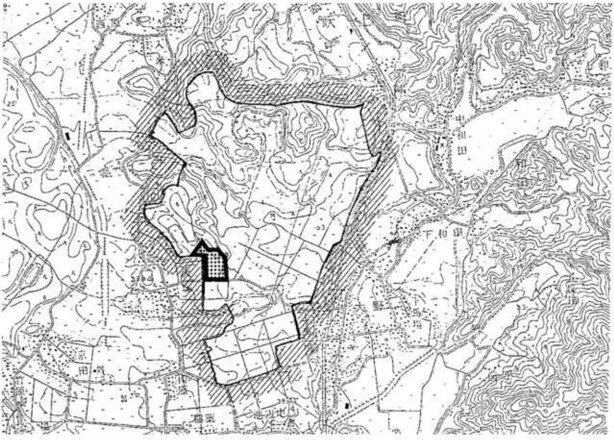
10月　調査再開

表土剥ぎ。K～L－8区，O－5区，トレンチ掘り下げ。L－7，M－6，N－6，O－6区Ⅳ層掘り下げ。I・J－9区古道検出，写真撮影。Ⅳ層遺物取り上げ。K－8区礫群写真撮影。

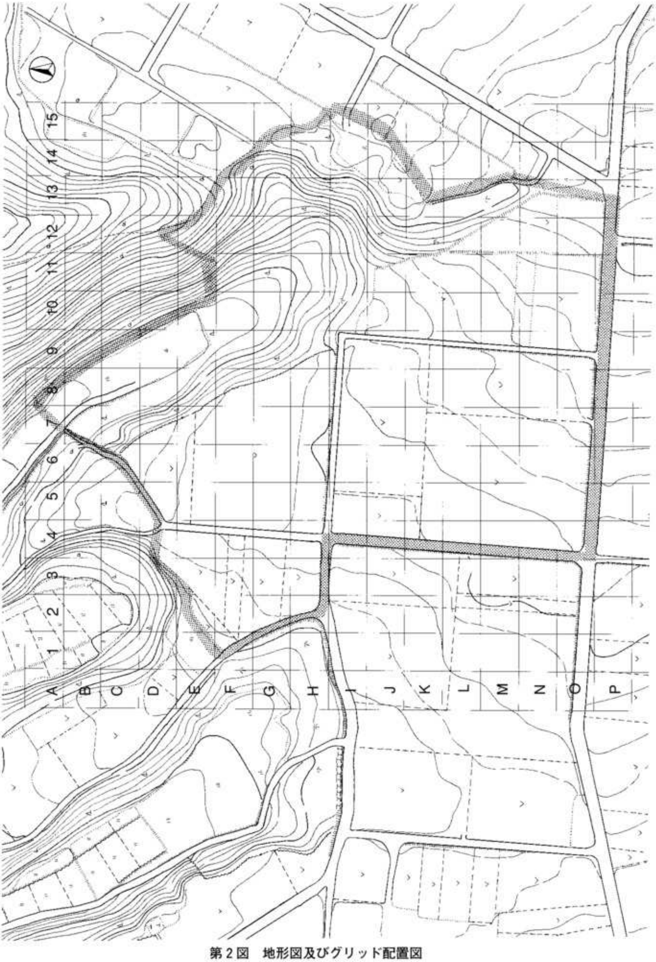
11月　O・M－8区，M・N－6区，トレンチ掘り下げ。I・J・K－8・9区，Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ。土層断面図作成，写真撮影。中世・晩期遺構実測。柱穴・土坑検出。半裁・写真撮影。柱穴列・礫群写真撮影。

12月　I・J・K－8・9区Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ。M・K－7区柱穴列完掘写真撮影。グリッド杭打ち。掘立柱建物完掘写真撮影。L－7区晩期土坑掘り下げ。礫群写真撮影，実測。遺物取り上げ。

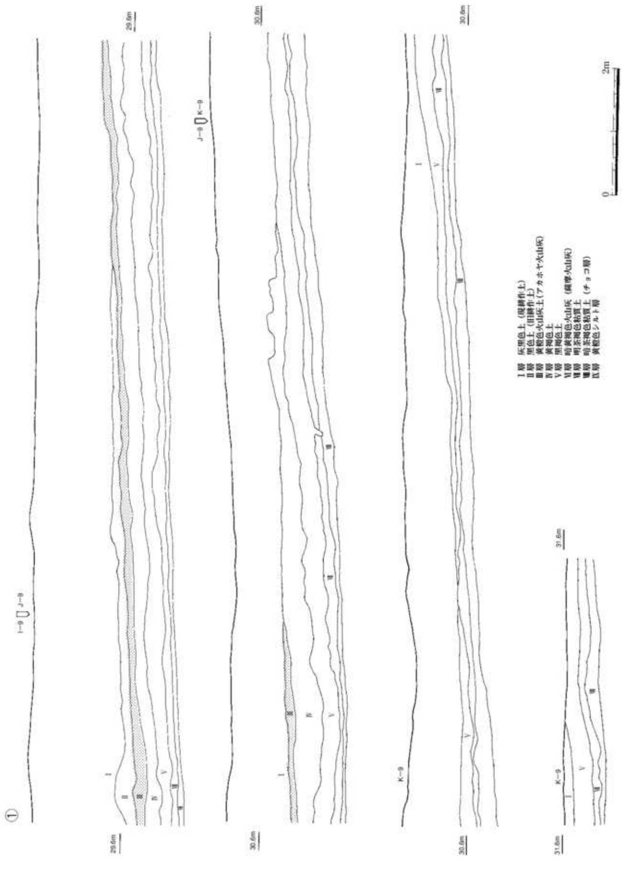
1月　遺物取り上げ。集石実測。J－9区掘り下げ。I～K―9区土層断面図作成。旧石器礫群実測，取り上げ。



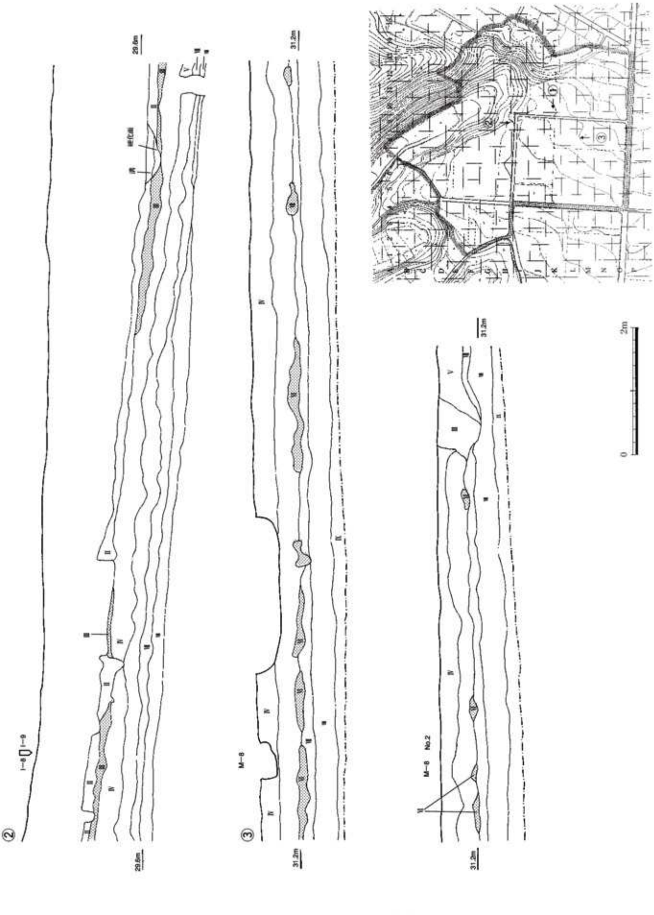
第１図　神原遺跡位置図



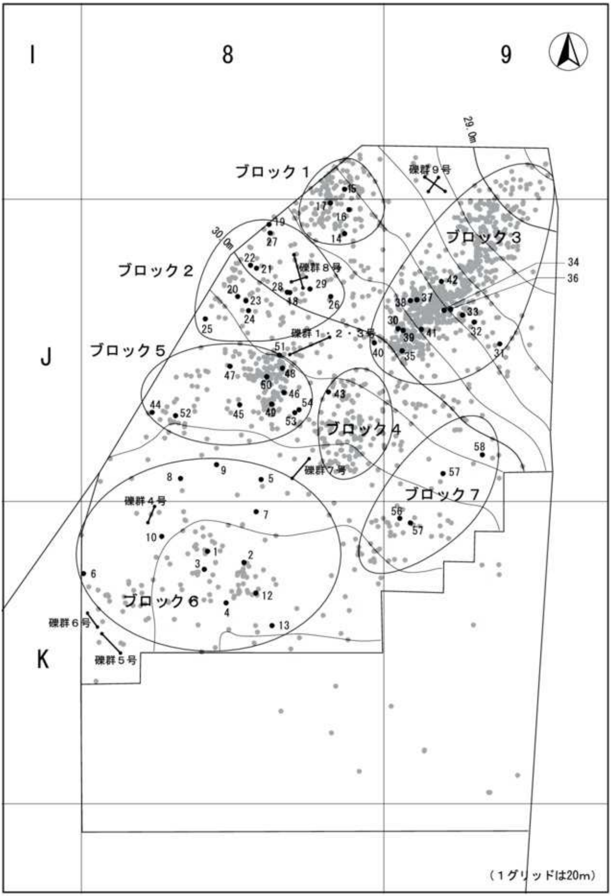
第２図　地形図及びグリッド配置図


①
I－9 J－9
J－9 K－9
K－9
29.6m
30.6m
31.6m
0
2m
Ⅰ層 灰黒色土（現耕作土）
Ⅱ層 黒色土（旧耕作土）
Ⅲ層 黄橙色火山灰土（アカホヤ火山灰）
Ⅳ層 黄褐色土
Ⅴ層 黒褐色土
Ⅵ層 暗黄褐色火山灰（薩摩火山灰）
Ⅶ層 明茶褐色粘質土
Ⅷ層 暗茶褐色粘質土（チョコ層）
Ⅸ層 黄橙色シルト層

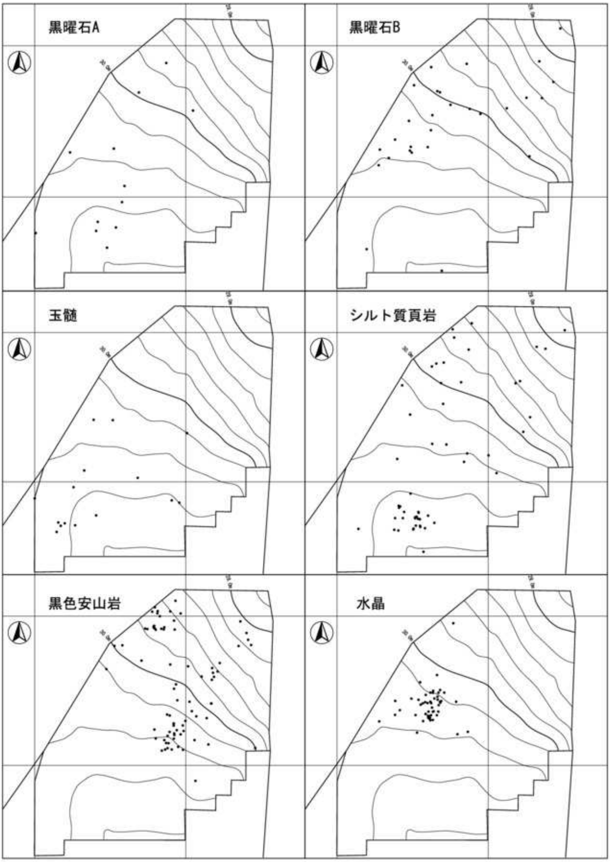
第３図　土層断面（１）



第４図　土層断面（２）

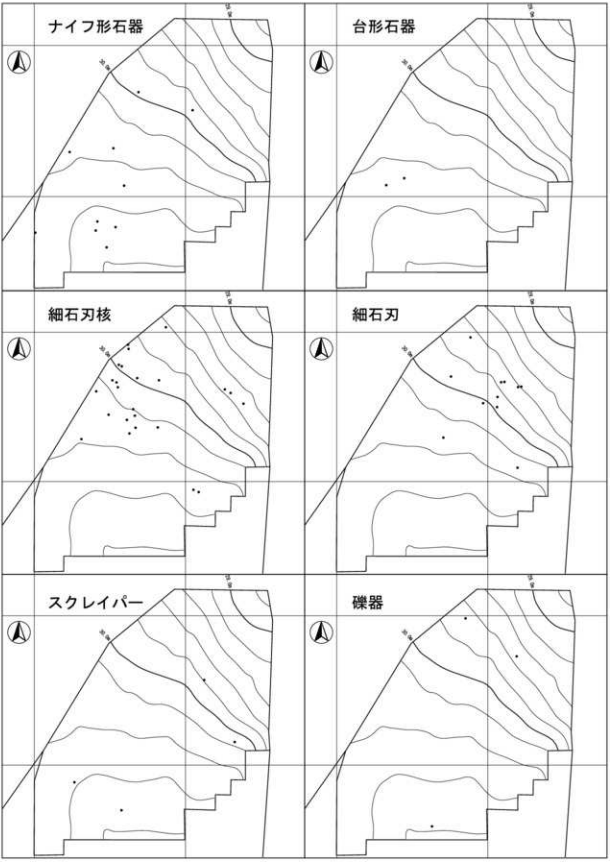


第５図　旧石器時代遺構配置図及び遺物出土状況

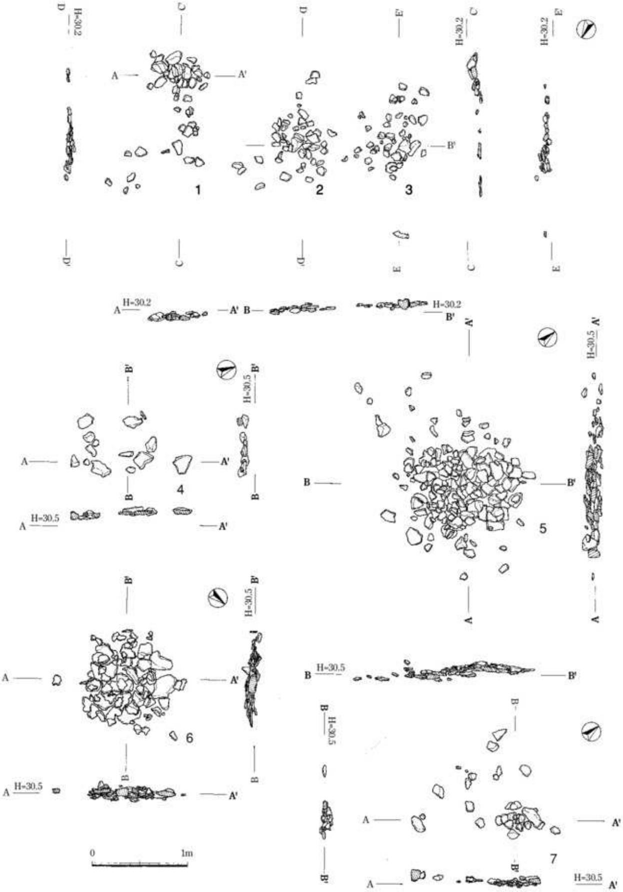


（1グリッド20m）

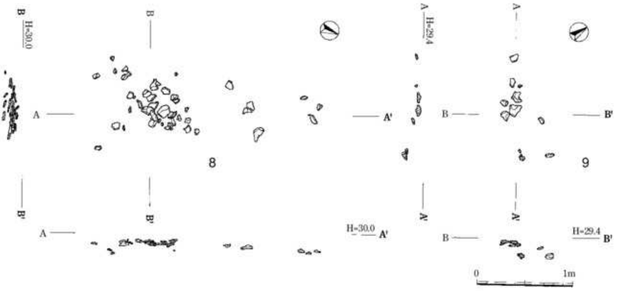
第6図　旧石器時代石材別分布図



第７図　旧石器時代石器別分布図



第８図　旧石器時代礫群１



第9図　旧石器時代礫群2

第2節　遺跡の層序

主な時代と包含層，遺物・遺構は以下のとおりである。

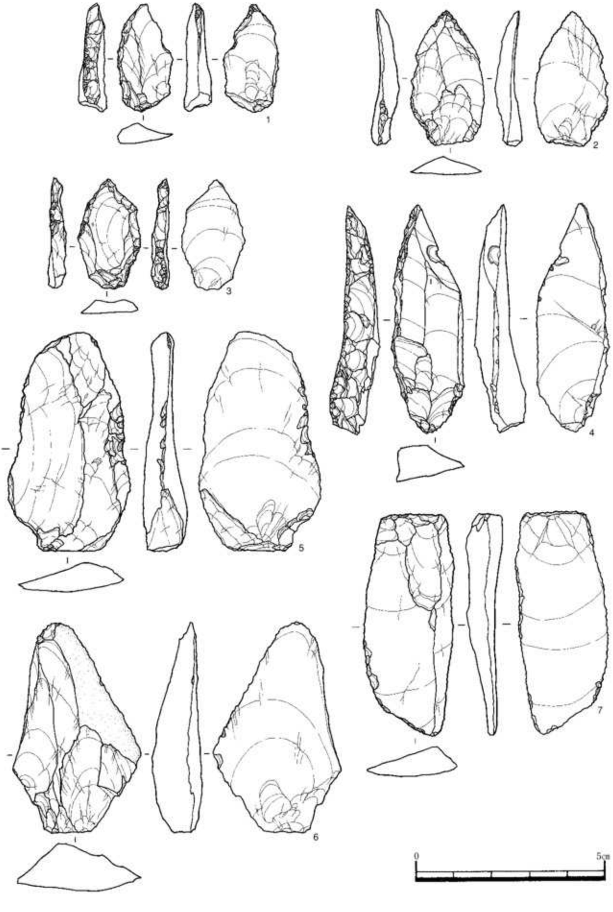
- 平安時代～中世（Ⅱ層）
  溝状遺構・古道・土師器・須恵器・青磁
- 弥生時代～古墳時代初期（Ⅱ層）
  土器
- 縄文時代晩期（Ⅱ～Ⅲ層）
  掘立柱建物跡・柱穴列・土坑・土器・石器
- 縄文時代早期（Ⅳ～Ⅴ層）
  土器・石器
- 縄文時代草創期（Ⅶ層）
  集石
- 旧石器（Ⅷ層）
  礫群・石器・剥片

第3節　発掘調査の方法及び概要

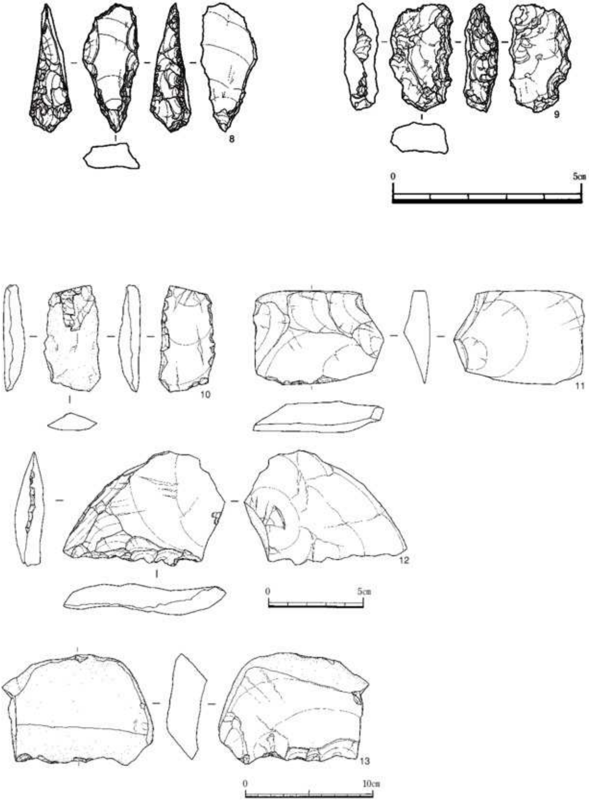
神原遺跡は，八ツ手状に開析された台地の南東部に位置し，北東側に比高差15mの谷が位置している。調査のためのグリッドを20m×20mで設定し，調査面積は7600㎡である。

13年度は，支線道路建設部分の調査を実施した（L－12区～P－13区）。発掘調査区の標高の高い面に3本のトレンチを設定して掘り下げたが，表土下はシラス層であった。トレンチ結果をふまえて，発掘調査は平坦地のみ実施した。平坦面の部分は表土を除去した段階では，Ⅲ層（アカホヤ層）下面以下が存在していた。しかし，現道に近い部分においてはシラス層まで攪乱を受けていた。調査はⅢ層面の精査及び掘り下げから行なった。遺物の出土量は多くはなかったが，Ⅲ層を掘り込んでいくと，黒色土を埋土とする溝が2条検出された。1条の溝は，掘り込みが浅く，遺物の出土もなかった。もう1条の溝は，深いところで1m以上の深さがあった。溝からは古代の須恵器・土師器が出土した。Ⅳ層面からは，縄文時代早期の土器が数点出土した。

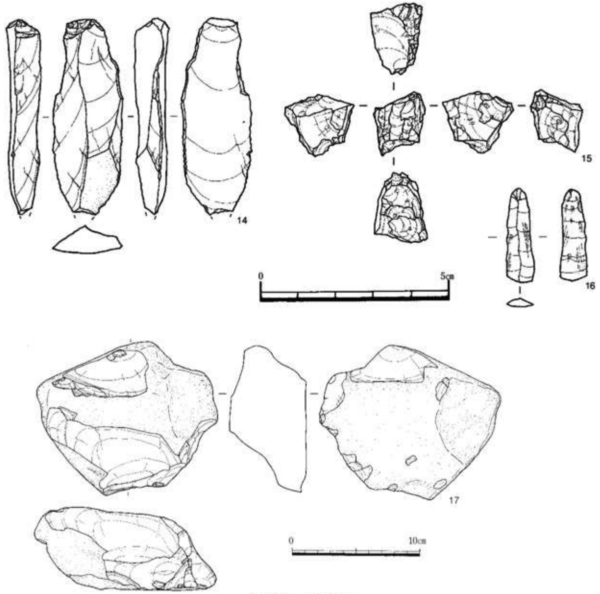
14年度は，農業開発総合センター病中付帯施設部分の調査を実施した（I－9区～O－4区）。Ⅲ層から，縄文時代晩期の掘立柱建物跡3棟，土坑2基，柱穴列2基が検出された。北東側の谷に向かって傾斜する地点で，旧石器時代，縄文時代草創期の遺構・遺物が多数発見された。Ⅶ層から，縄文時代草創期の集石，Ⅷ層からは旧石器時代の遺構として礫群9基，同じく旧石器時代の遺物として，ナイフ形石器，細石刃等が出土した。旧石器時代の遺物・遺構はナイフ形石器を伴う時期と細石刃を伴う時期のものに大きく二分できると考えられる。



第10図　旧石器１



第11図　旧石器 2



第12図　旧石器3

第４節　旧石器時代の調査

旧石器時代の遺物の総数は，黒曜石，頁岩，玉髄等を中心に約1800点を数える。出土区は，Ｉ～Ｋ―８～９区である。石材ごとに出土地点を分類したところ，７つのブロックに分けることができた（第５図)。また，ブロックで主に出土する器種が，ナイフ形石器（６ブロック)，細石刃核（１～５，７ブロック）と異なるため，ブロックごとに時期差があるものと考えられる。

石材については，全面的に黒曜石が多くを占めるが，ブロックによって玉髄や水晶が多く出土している。なお，黒曜石は肉眼により観察した特徴をもとに，下記のように分類を行なった。

黒曜石Ａ・・・黒色で炭化している。不純物が少なく光を通さない。樋脇町上牛鼻産に類似する。

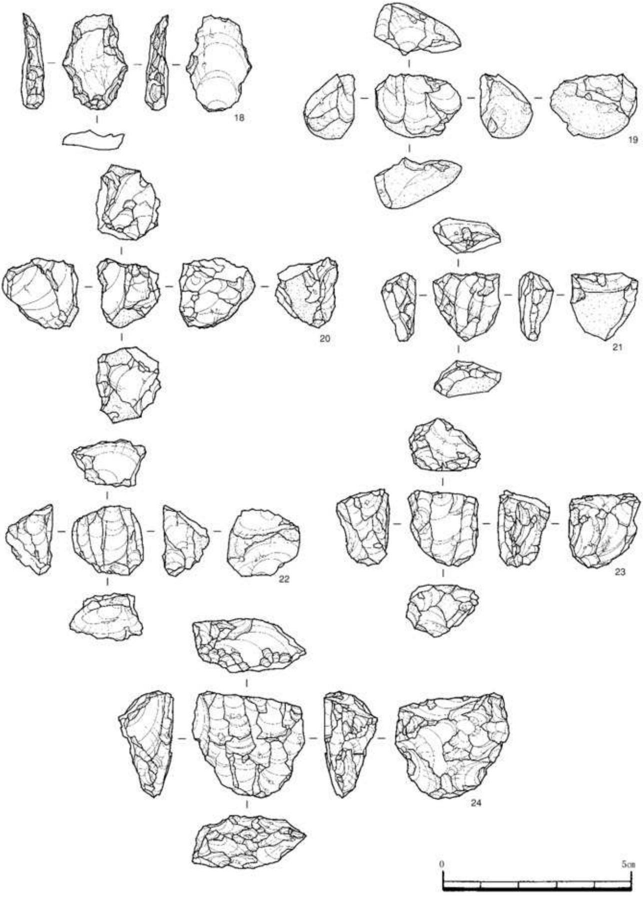
黒曜石Ｂ・・・黒色，アメ色で不純物を含む。鹿児島市三船産に類似する。

黒曜石Ｃ・・・黒色，ガラス質で小粒の不純物が多く含まれる。大口市日東産に類似する。

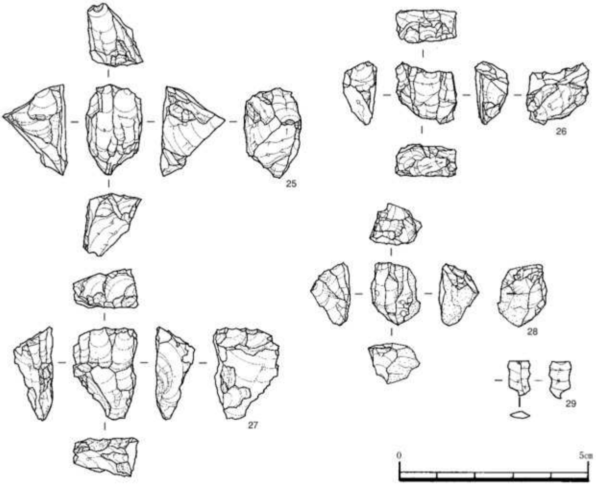
（１）遺構

礫群１・２・３（第８図）

Ｊ－８区で検出された。礫が近接して検出されたが，集中部が３つ存在するため，3ヶ所存在すると



第13図　旧石器 4



第14図　旧石器５

判断した。１は，礫数53，平均重量87.84ｇである。南側に10cm大の礫が集中している。２は，礫数47，平均重量73.40ｇである。10cm大の角礫で構成されている。３は，礫数47，平均重量64.04ｇである。集中区は存在するが，全体的にまとまりに欠ける。

礫群４（第８図）

Ｋ－８区で検出された。礫数14，平均重量406.43ｇである。礫は約15cmの大きなものが多いが，散在している。

礫群５（第８図）

Ｋ―８区で検出された。礫数173，平均重量162.20ｇである。上部は10cmほどの礫だが，その下部に20cmほどの大きな礫が多数使用されており，密集度も高い。

礫群６（第８図）

Ｋ－８区で検出された。礫群５と隣接している。礫数97，平均重量179.87ｇである。20cm以上の大きな礫を多数使用し，中心部にそのほとんどが集中している。

礫群７（第８図）

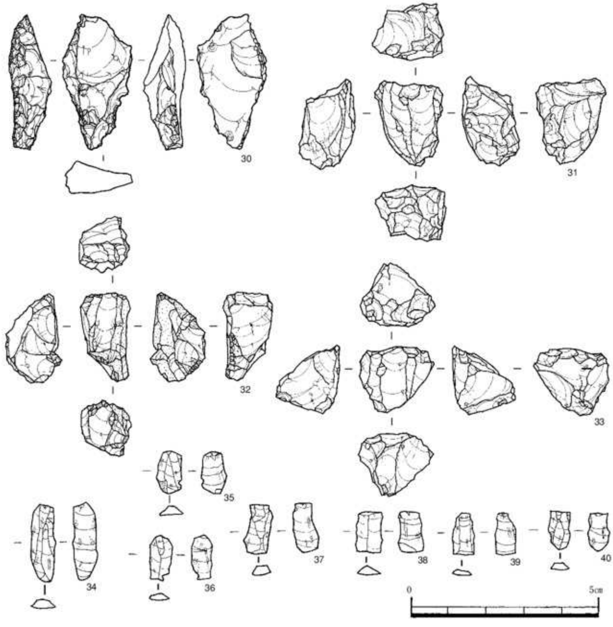
Ｊ―８区で検出された。礫数33，平均重量159.55ｇである。周辺でナイフ形石器が出土している。10cm大の礫で構成されているが，全体的にまばらで，20cm大の礫に数点集中している。

礫群８（第９図）

Ｊ―８区で検出された。礫数49である。10cm大の礫と5cm大の礫で構成され，中心部はあるが，まとまりはみられない。周辺で細石刃核が多数出土しおてり，関連性があると思われる。

礫群９（第９図）

Ｉ－９区で検出された。礫数12で，集中区もない。



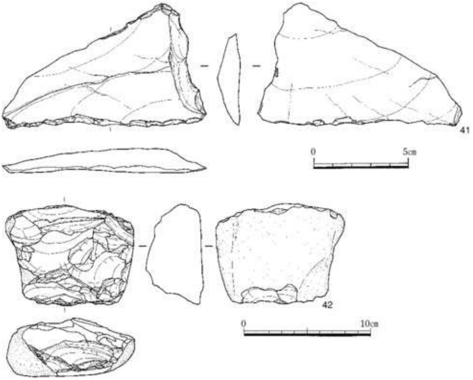
第15図　旧石器６

（２）遺物

ブロック６（第10〜11図１〜13）

J・K－８区にわたる，径約15ｍ×12ｍの範囲に分布するブロックである。頁岩およびシルト質頁岩を主体とし，黒曜石Ａ・黒曜石Ｂ，玉髄が点在し，東側を中心としてナイフ形石器が多く出土している。

１〜６はナイフ形石器である。１は黒色安山岩製。縦長剥片の左側縁に剥離を施している。２は頁岩製。縦長剥片を素材とし，先端部に使用痕が確認できる。３は玉髄製。基部側からの打撃で縦長の剥片を取り出し，その後，細かな加工を右側面下部・左側面上部に施している。４は，頁岩製。左側面部を加工して刃部を形成した後，さらに細かな加工を施している。５は縦長の薄い剥片を加工したもの。右側縁に正面から加工を施している。６は自然面を残すもので，先端部に使用痕が確認できる。７は使用痕剥片である。上部に二次加工を，左側縁部に使用痕を観察できるが，表面の風化が激しい。８・9は，台形石器である。８は玉髄製の縦長剥片の両側縁部に急角



第16図　旧石器7

度の二次加工を施している。９はやや厚みのある黒曜石Ｂ製。右側面部は先端部から基部にかけて二次加工が施される。10～12はスクレイパーである。10は自然面を残す縦長剥片で，裏面から両側縁部に二次加工を施し，刃部を形成している。11は，横長の剥片を加工し，下部に刃部を形成している。12も下部に刃部を形成している。また，左側縁上部に細かな二次加工が施されている。13は礫器である。正面全体に自然面を残すもので，下部に鋸歯状の刃部を形成している。

ブロック１（第12図14～17）

Ｉ・Ｋ－８区にわたる，径約6ｍ×6ｍの範囲に分布するブロックである。分布の様子から，調査区外にも範囲が広がっていると考えられる。黒色安山岩，頁岩が集中して出土している。

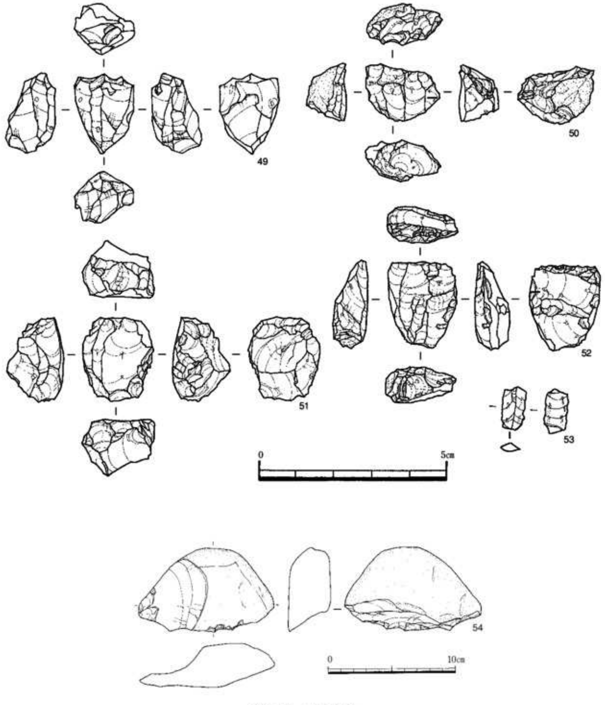
14は使用痕剥片である。縦長剥片を素材とし，上部に二次加工を施している。15は細石刃核である。平坦な面を打面として設定し，小口面から細石刃を取り出している。16は黒曜石Ａの細石刃（スポール）である。17は頁岩製の礫器である。正面・背面に自然面を残す，手のひら大の角礫を素材としている。

ブロック２（第13・14図18～29）

Ｊ－８区の径約9ｍ×6ｍと東西にわたるブロックである。石材別出土状況は，黒曜石Ａを主体とし，黒曜石Ｂ，シルト質頁岩が出土している。また，細石刃核が集中して出土している。

18はナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし，両側縁部に細かな加工を施している。上部に自然面を残す。１9～28は細石刃核である。19は自然面をのこすもので，左側縁部を作業面としている。21は横長の薄い剥片を素材としている。22は正面に作業面を有する。23は自然面を裏面に残す角礫を素材とし，正面に作業面を有する。24は幅広の礫を利用したもので，打面は後方に傾斜する。25も打面は後方に傾斜している。26は横長の剥片を加工しており，正面に作業面を有する。27は打面が平坦で後方に傾斜している。作業面は正面で，左側縁部にいくに従って薄くなっている。下部が窄まり，全体が楔形を呈する。28は黒曜石Ｂで，裏面・右側面に自然面を残すものである。左側面上部に細かな調整がある。29は細石刃である。右側縁部に使用痕が確認できる。

第17図　旧石器 8

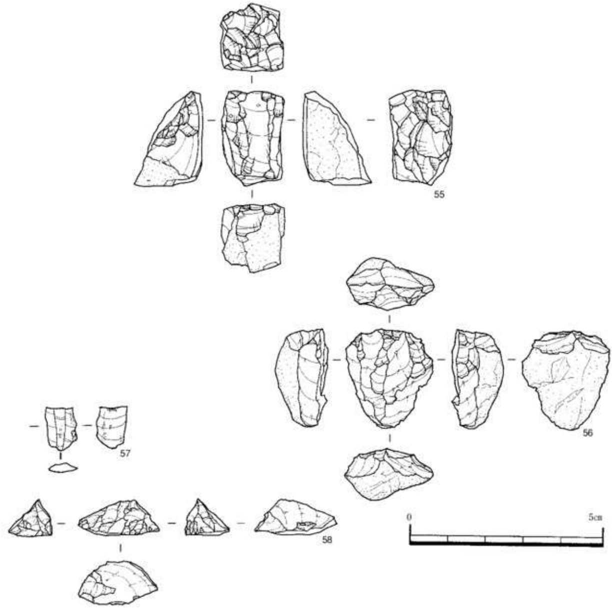


第18図　旧石器９

ブロック３（第15・16図30〜42）

Ⅰ－９区の北東から南西に細長く分布する，径約15ｍ×９ｍのブロックである。全面にわたり黒曜石Ａが多く出土している。特に南東側に密集区が存在し，細石刃核，細石刃が出土しており，石器製作所だった可能性がある。ほかには，頁岩，黒曜石Ｂが点在している。

30は黒曜石Ａのナイフ形石器である。先端部から打撃を加えた縦長剥片を素材とし，左側縁部に急角度のブランディングを施している。31〜33は細石刃核である。31は黒曜石Ａ。角礫を素材としている。正面を作業面としているが，裏面にも細かな調整が施されている。32は右側面部に自然面を残すものである。平坦部を打面とし，後方に長く傾斜している。



第19図　旧石器10

33も平坦部が後方に傾斜している。正面が作業面であるが，両側面が裏面に向かって窄まり，上面から見ると三角形になる。34〜40は細石刃である。石材はすべて黒曜石Aである。34はスポールで，断面が台形を呈する。37は左側縁部にわずかながら使用痕が観察できる。41は頁岩製のスクレイパーである。薄い横長剥片を素材として，下部に正面から加工を施し刃部を形成している。右側面，上面にも加工が確認できる。42は礫器である。自然面の残る拳大の角礫を素材としている。正面と左上部に加工による凹みがあり，握り部分としたと思われる。

ブロック４（第17図43）

Ｊ－８区の径約６ｍ×７ｍのブロックである。黒曜石Ａが集中して出土している。
43は細石刃核である。平坦面を打面としているが，正面の作業面が狭い。

ブロック５（第17・18図44〜54）

Ｊ—８区の径約６ｍ×６ｍのブロックである。中心部に黒曜石Ａが集中して出土している。また，このブロックでのみ，水晶製の石器が多く出土しているのが特徴である。

44・45はナイフ形石器である。44は右側面に急角

旧石器時代石器観察表

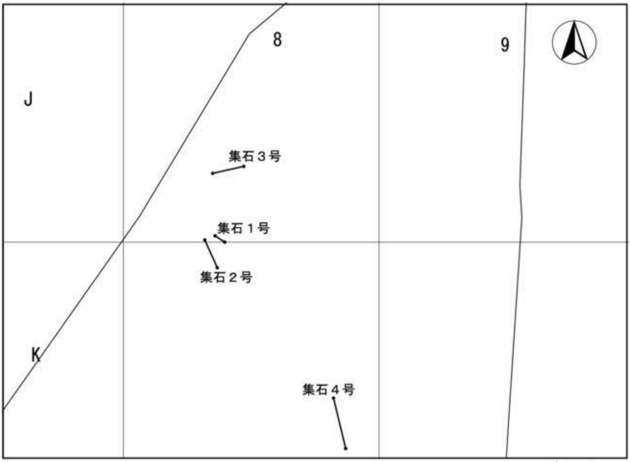
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第10図	1	K−8	Ⅶ	ナイフ	黒色安山岩	2.85	1.5	0.75	2.54	
	2	K−8	Ⅶ	ナイフ	頁岩	3.55	1.8	0.5	3.13	
	3	K−8	Ⅶ	ナイフ	玉髄	2.9	1.6	0.45	2.04	
	4	K−8	Ⅶ	ナイフ	頁岩	6	1.8	1	10.78	
	5	J−8	Ⅶ	ナイフ	頁岩	5.75	2.8	1.15	16.3	
	6	K−8	Ⅶ	ナイフ	頁岩	5.65	3.3	1.3	18.58	
	7	K−8	Ⅶ	使用痕剥片	頁岩	5.95	2.35	0.95	10.9	
第11図	8	J−8	Ⅶ	台形石器	玉髄	3.4	1.5	1.05	3.88	
	9	J−8	Ⅶ	台形石器	黒曜石C	2.8	1.5	0.85	4.06	
	10	K−8	Ⅶ	スクレイパー	頁岩	5.6	3	0.9	20	
	11	K−8	Ⅶ	スクレイパー	頁岩	4.9	6.8	1.65	60	
	12	K−8	Ⅵ	スクレイパー	頁岩	6.05	6.95	1.55	60	
	13	K−8	Ⅶ	楔器	頁岩	8.3	11.8	2.6	400	
第12図	14	J−8	Ⅶ	使用痕剥片	シルト質頁岩	5.2	1.8	0.8	7.6	
	15	I−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.65	1.4	1.8	3.42	
	16	J−8	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	2	0.8	0.25	0.33	
	17	J−8	Ⅶ	楔器	頁岩	12.1	14.2	6.4	1158	
第13図	18	J−8	Ⅶ	ナイフ	黒曜石A	2.55	1.7	0.6	2.52	
	19	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.7	2.3	1.4	4.72	
	20	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.85	1.65	2	5.63	
	21	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.85	1.8	0.9	2.36	
	22	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.8	1.9	1.25	3.91	
	23	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2	1.9	1.4	5.65	
	24	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.8	3	1.4	10.72	
第14図	25	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.4	1.5	1.7	4.24	
	26	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.65	1.6	0.9	1.83	
	27	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.45	1.75	1	3.54	
	28	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石B	1.65	1.35	1.1	2.06	
	29	J−8	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	0.95	0.6	0.2	0.08	
第15図	30	J−9	Ⅶ	ナイフ	黒曜石A	3.5	1.75	1.05	5.13	
	31	J−9	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.3	1.85	1.4	5.23	
	32	J−9	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.35	1.3	1.5	3.57	
	33	J−9	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.8	2	1.7	4.23	
	34	J−9	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.4	0.7	0.2	0.34	
	35	J−9	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.15	0.7	0.3	0.17	
	36	J−9	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.2	0.6	0.2	0.09	
	37	J−9	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.35	0.65	0.3	0.21	
	38	J−9	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.1	0.65	0.25	0.26	
	39	J−9	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.15	0.6	0.15	0.12	
	40	J−8	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1	0.6	0.2	0.1	
第16図	41	J−9	Ⅶ	スクレイパー	頁岩	6.5	10.8	1.3	70	
	42	J−9	Ⅶ	楔器	頁岩	12.45	4.7	1.4	465	
第17図	43	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.45	1.8	1.85	4.47	
	44	J−8	Ⅶ	ナイフ	シルト質頁岩	3.5	1.35	0.9	3.6	
	45	J−8	Ⅶ	ナイフ	頁岩	5.05	1.7	0.6	5.5	
	46	J−8	Ⅶ	細石刃核	水晶	1.75	1.9	1.4	4.24	
	47	J−8	Ⅶ	細石刃核	水晶	1.45	1.1	1.6	2.43	
	48	J−8	Ⅶ	細石刃核	水晶	1.8	1.9	0.9	3.24	
第18図	49	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.1	1.65	1.3	3.24	
	50	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.5	2	1.1	2.96	
	51	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.2	1.9	1.5	6.03	
	52	J−8	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.3	1.85	0.95	4.25	
	53	J−8	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.1	0.6	0.25	0.11	
	54	J−8	Ⅶ	楔器	頁岩	6.1	10.6	3.4	270	
第19図	55	K−9	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.55	1.65	1.6	8.4	
	56	K−9	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	2.6	2.3	1.4	7.43	
	57	J−9	Ⅶ	細石刃	黒曜石A	1.2	0.8	0.25	0.17	
	58	J−9	Ⅶ	スクレイパー	黒曜石A	1.2	2.1	0.9	1.68	

度のブランディングを施す。45は両側縁先端部に細かなブランディングを施すものである。46～52は細石刃核で，46～48は水晶製である。46は底面と裏面に自然面を残すもので，上部が側面から見るとV字状になる。47は平坦面を打面とし，正面の作業面と垂直になる。48は平坦面を打面とし後方に傾斜する。正面の作業面と，ほぼ平行する裏面を有する。49は薄手の剥片で打面が狭い。50は左側面と裏面に自然面を残すものである。51は右側面に細かな調整が観察できる。打面が狭く裏面上部を欠損する。52は上部から下部にかけて逆V字状を呈するもので，打面は薄く残っている。作業面は正面であるが，背面にも剥離が観察できる。53は黒曜石Aの細石刃である。両側縁に使用痕を観察できる。54は礫器である。自然面を残す円礫を加工したもので，主に裏面より剥離を形成している。

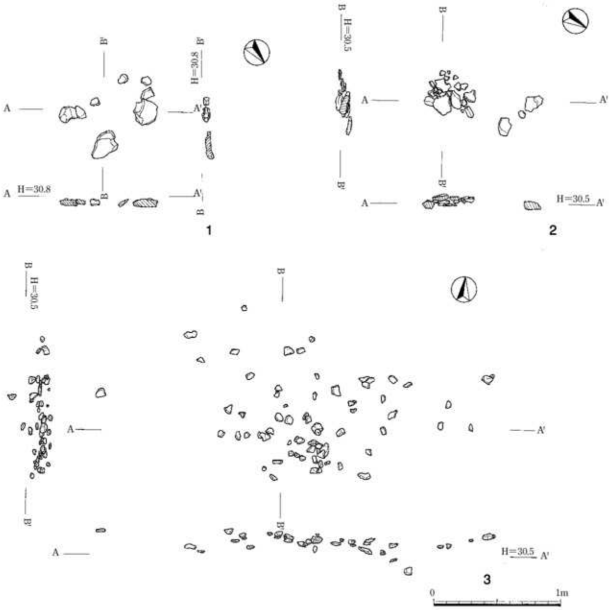
ブロック７（第19図55～58）

Ｊ－９，Ｋ－８～９区に北東から南西方向にわたる径約12ｍ×７ｍに分布するブロックである。石材は黒曜石Ａがほとんどである。

55・56は細石刃核である。55は底面・右側面に自然面を残すもので，打面は底部まで後方に傾斜する。作業面は平坦で，２cmほどの長さを有する。56は裏面から両側面にかけて自然面を残すもので，調整があまり見られない。57は細石刃である。やや幅広で，断面が台形状になる。58は黒曜石Aのスクレイパーである。三角錐状の形状を呈し，下面は平坦になる。正面下部に細かな剥離を観察できる。



第20図　縄文時代草創期遺構配置図



第21図　縄文時代草創期集石遺構 1

第５節　縄文時代の調査

1　縄文時代草創期の調査

草創期では，Ⅶ層より集石が４基検出された。礫数には差がある。

集石１（第21図）

Ｊ－８区で検出した。礫数８，平均重量627.5ｇである。20cm大の大きな礫が使われている。礫数が少なく，まばらに散在する。

集石２（第21図）

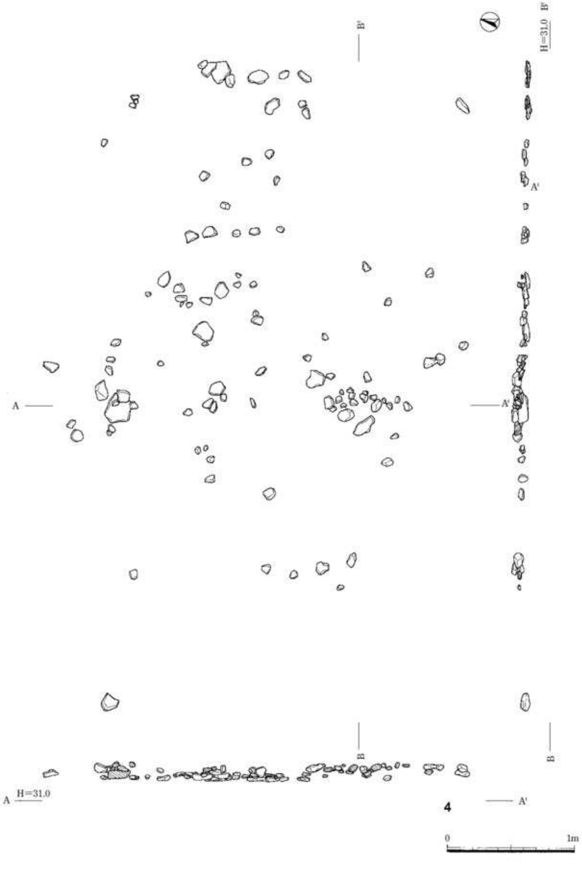
Ｋ－８区で検出した。礫数23，平均重量245.2gである。南側に集中部分があり，20cm大の礫が重なり合っている。

集石３（第21図）

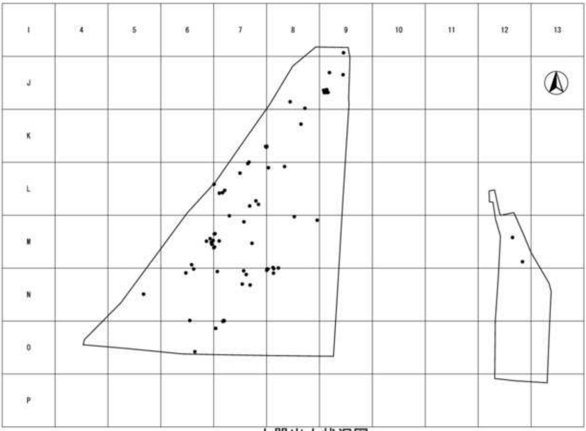
Ｊ－８区で検出した。礫数70，平均重量90.43ｇである。10cm大の礫が全面に散在した状態である。集中区はあるが，数は少ない。

集石４（第22図）

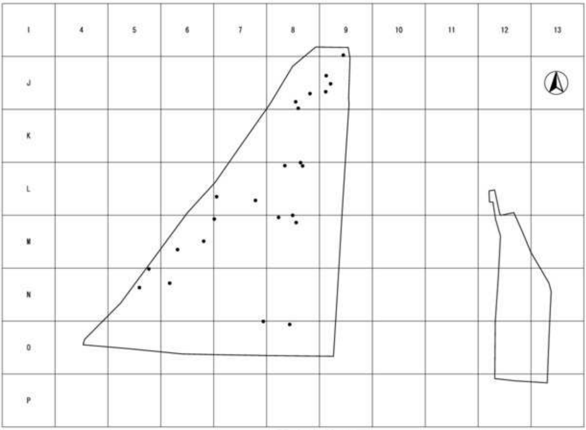
Ｋ－８区で検出した。礫数104，平均重量189.95ｇである。径約５ｍ×３．５ｍと広範囲に礫が散在しており，明確な集中区は見られない。



第22図　縄文時代草創期集石遺構 2

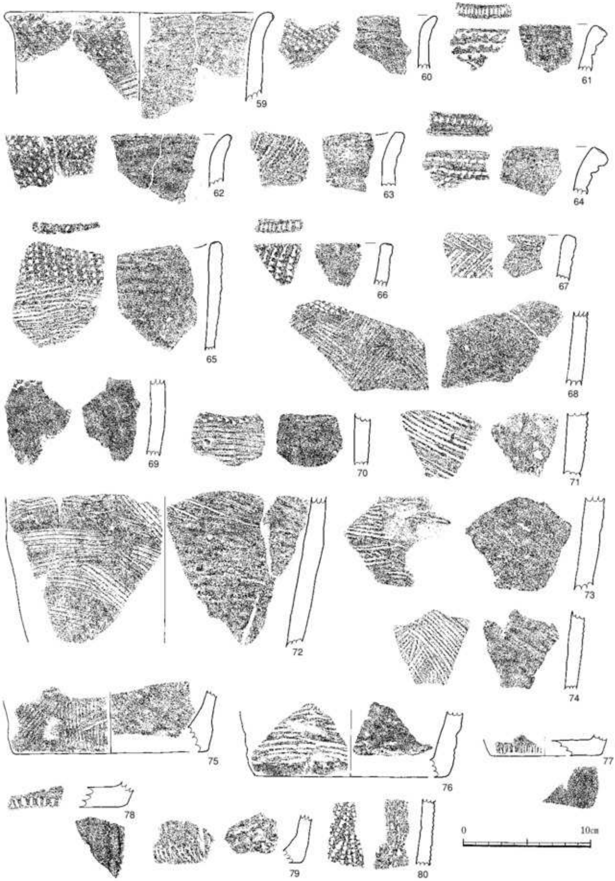


土器出土状況図　（1グリッド20m）



石器出土状況図　（1グリッド20m）

第23図　縄文時代早期遺物出土状況図



第24図　Ⅰ類・Ⅱ類土器

2 縄文時代早期の調査

早期では遺構がなく，土器と石器がⅣ層から検出された。土器は数が少なく，早期中葉のものが主体で，Ⅰ～Ⅳ類に分類した。石器も数は少なく，磨製石斧，礫器，磨石，敲石などが出土している。

(1) 土器（第24・25図）

Ⅰ類土器（第24図59～79）

Ⅰ類土器は，口縁部に貝殻刺突文が廻り，胴部には貝殻条痕文が施されている円筒形の土器である。器壁は厚く，口縁部がやや肥厚するものが多い。

59～67は口縁部である。59～64は口縁部がゆるやかに外反し，65～67は口縁部が直行する。59は，口縁部に貝殻刺突文を羽状に施し，口唇部外側に刻みを施すものである。60は，斜位の刺突文が口縁部に施されている。61は，口縁部に横位の刺突文が3条廻る。64は，横位の刺突文と斜位の刺突文の組み合わせである。口唇部に刻み目がある。65は，口唇部が波状になるものである。67は，口縁部の刺突文が羽状に施され，口唇部は平坦である。68～74は胴部である。胴部には貝殻条痕文が横位や斜位に施されている。68は，条痕文が綾杉状に施されている。69は，口縁部の刺突文は確認できるが，胴部の施文は風化により確認できない。72は，外面の条痕文がまばらに施されている。内面は，ヘラケズリで横方向に調整されており，木目が確認できる。75～79は，底部である。残存部が少なく，胴部の文様が判別しにくいため，一括してⅠ類土器の底部で扱うことにした。75は縦位に，76は横位に貝殻条痕文が外面に施されている。77～79は，外面下部に刻み目が施されている。

Ⅱ類土器（第24図80）

Ⅱ類土器は，80のみである。円筒の胴部で，外面は貝殻刺突文を縦位と斜位に施すものである。内面は縦方向にヘラケズリが施されている。

Ⅲ類土器（第25図81～83）

Ⅲ類土器は，器形は円筒で，口縁は直行する。口縁部から貝殻条痕文が横位に施されている。81は，口縁部である。横位の条痕文が約1.5㎜間隔で施されている。82・83は，胴部である。横位の条痕文が廻らされているが，83は，間隔が空く。

Ⅳ類土器（84・85）

Ⅳ類土器は2点である。円筒形で，浅い条痕文が施されている。84・85ともに口縁部で，外面に条痕文が斜位に施される。85は，口唇部がやや肥厚する。

(2) 石器（第26～30図）

石鏃（86～88）

86は，両面から細かな剥離が施されて，先端が鋭く伸びている。87は，先端部分が欠損している。88は，小型で抉りが施されていない。

石斧（89）

89は，磨製の石斧である。表面を縦方向に磨いている。刃部・裏面が欠損・剥落している。

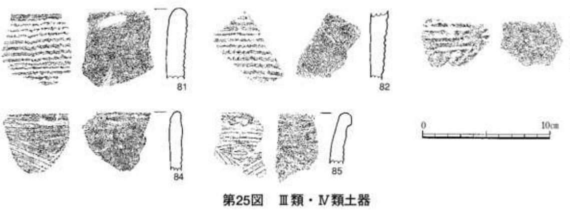
礫器（90）

90は，頁岩製の礫器である。拳大の礫の下部に剥離を形成している。また，上部の細かな剥離は，握りやすくするためのものだと思われる。

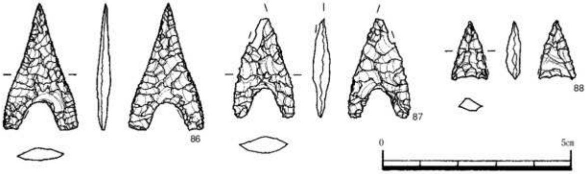
スクレイパー（91）

91は，頁岩製のスクレイパーである。自然面を残す横長剥片を加工している。

磨石・敲石（92～103）



第25図　Ⅲ類・Ⅳ類土器



第26図　縄文時代早期石器１

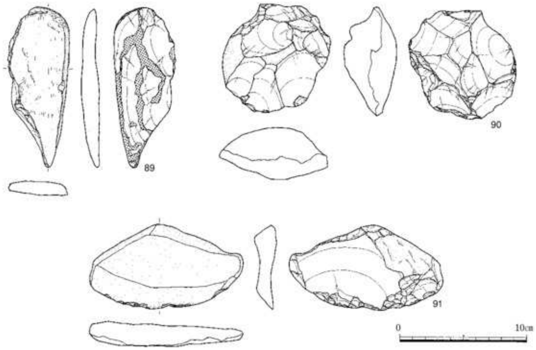
92～103は，磨石・敲石である。93は全面に敲打痕が多数見られる。94は，上部のみ敲打痕がある。95～103は，ほぼ円形となるものである。

石皿（104）

104は，安山岩製の石皿。正面全体に使用痕が残る。裏面は大きな加工が見られず，不安定である。

縄文時代早期土器観察表

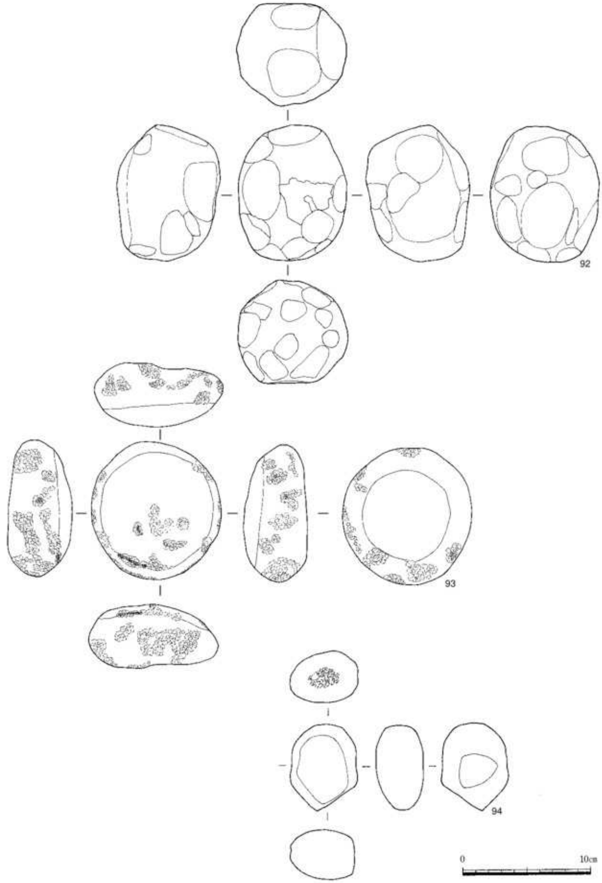
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第24図	59	O−7	Ⅳ	口縁部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ミガキ	
	60	N−6	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	浅黄	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	61	−	−	口縁部	橙	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	62	M−6	Ⅳ	口縁部	橙	明黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	63	J−9	Ⅳ	口縁部	橙	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	64	−	−	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	65	−	−	口縁部	にぶい赤褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	
	66	M−12	Ⅲ	口縁部	橙	明赤褐		○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	67	−	−	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ナデ	
	68	−	−	胴部	橙	橙（スス付着）	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ナデ	
	69	−	−	胴部	黄褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	70	−	−	胴部	にぶい赤褐	にぶい褐（スス付着）	○	○			良	条痕・刺突文	ナデ	
	71	J−9	Ⅳ	胴部	黒	赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	72	K−7	Ⅳ	胴部	黄灰	明黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	条痕後ナデ	
	73	N−7	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	74	−	−	胴部	橙	明黄褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	75	−	−	底部	橙	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文		
	76	J−9	Ⅳ	底部	暗灰	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ハケ目・ナデ	
	77	−	−	底部	明赤褐	橙	○	○	○		良	刻目		
	78	−	−	底部	明赤褐	橙	○	○			良	刻目		
	79	−	−	底部	橙	にぶい橙	○	○			良	刻目	指圧痕	
	80	M−12	Ⅲ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			良	刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
第25図	81	−	−	口縁部	にぶい黄橙	オリーブ黒	○	○	○		良	貝殻条痕文	ミガキ	
	82	−	−	胴部	浅黄	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ミガキ	
	83	L−8	Ⅳ	胴部	明赤褐	褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	
	84	K−7	Ⅳ	口縁部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	条痕文	ナデ	
	85	M−12	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条痕文	ナデ	



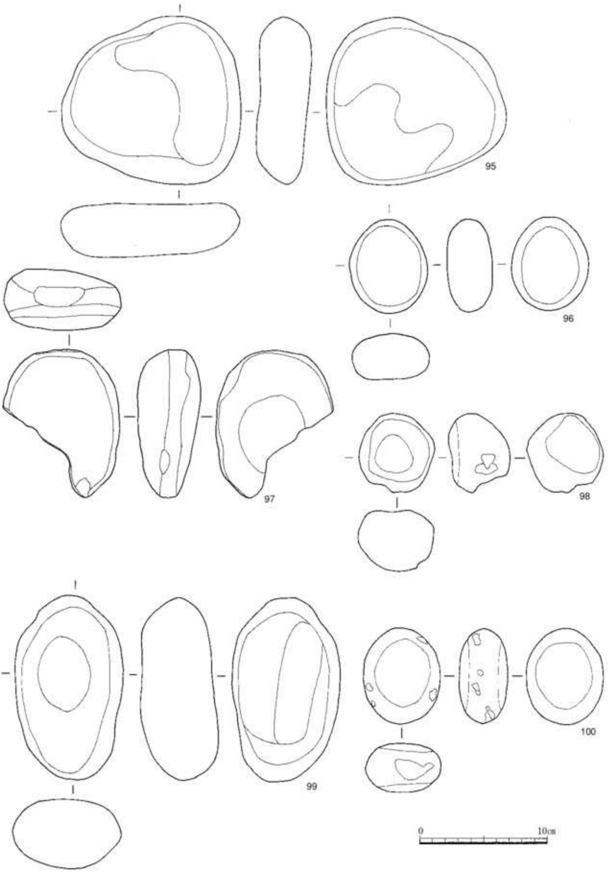
第27図　縄文時代早期石器 2

縄文時代早期石器観察表

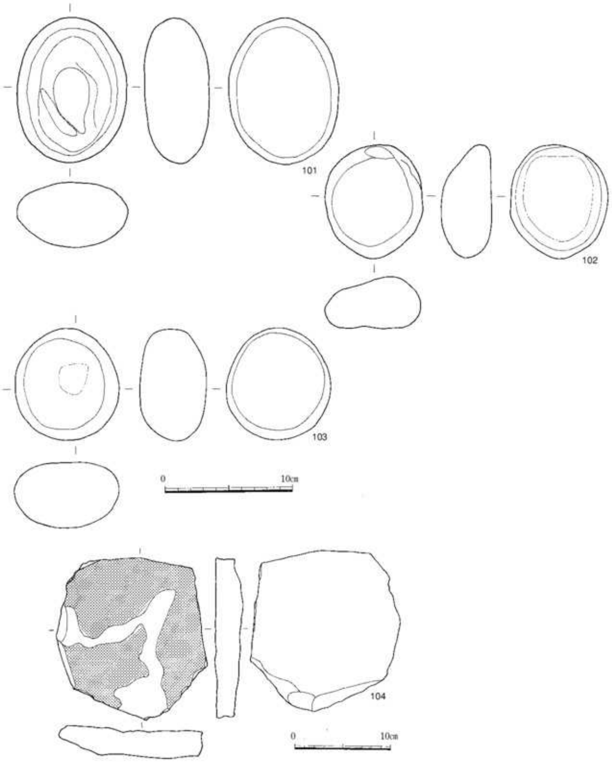
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考 (分類)
第26図	86	N−5	Ⅳ	打製石鏃	チャート	3.4	2	0.4	1.4	A−c−c
	87	M−8	Ⅳ	打製石鏃	黒曜石A	2.7	1.7	0.5	1.3	A−c−c
	88	K−9	Ⅶ	打製石鏃	黒色安山岩	1.6	1	0.4	0.4	A−b−b
第27図	89	J−8	Ⅷ	石斧	頁岩	7.9	11	4.6	118	
	90	O−8	Ⅳ	礫器	頁岩	8.55	8.5	4.1	260	
	91	O−7	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	6.6	12.1	1.7	165	
第28図	92	J−8	Ⅷ	磨石	砂岩	10.7	8.6	8.1	1030	
	93	−	−	敲石	砂岩	10.8	10.2	5	730	
	94	J−9	Ⅷ	敲石	砂岩	6.7	5.3	3.8	200	
第29図	95	M−7	Ⅷ	磨石	砂岩	13.1	14.1	4.3	1240	
	96	J−9	Ⅷ	磨石	砂岩	7.4	6.1	3.6	210	
	97	K−8	Ⅷ	磨石	砂岩	11.6	9.1	5	600	
	98	J−9	Ⅷ	磨石	砂岩	6.25	5.85	4.6	200	
	99	K−8	Ⅷ	磨石	砂岩	14.5	8.5	5.9	910	
	100	J−9	Ⅷ	磨石	砂岩	7.5	6	3.8	240	
第30図	101	M−8	Ⅳ	磨石	砂岩	11.4	8.7	5.1	720	
	102	M−6	Ⅳ	磨石	砂岩	8.9	7.6	4	360	
	103	M−6	Ⅳ	磨石	砂岩	8.8	8.2	5.3	520	
	104	J−9	Ⅳ	石皿	安山岩	25	22.8	4.5	2930	



第28図　縄文時代早期石器 3



第29図　縄文時代早期石器 4



第30図　縄文時代早期石器 5

3　縄文時代中期・後期の調査

縄文時代中期・後期については，遺物の量が非常に少なく，遺構も検出されなかった。

遺物（第31図）

Ⅴ類土器

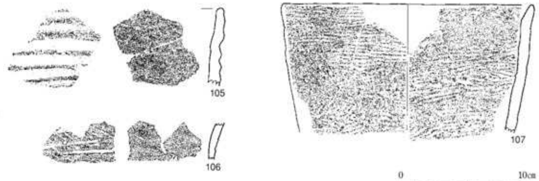
105の1点だけである。外面は約１㎝幅の凹線文，内面はナデで器面調整が施されている。

Ⅵ類土器

106の１点だけである。外面は浅い条痕文，内面はナデで器面調整が施されている。

Ⅶ類土器

107の１点だけである。口縁径19.8㎝を測る円筒形の土器である。外面は条痕文，内面は条痕文後ナデが施されている。口縁がやや開き，厚さが一定ではないため，指でおさえて形成したものと思われる。



第31図　Ⅴ類・Ⅵ類・Ⅶ類土器

縄文時代中後期土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第31図	105	O−6	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	凹線文	ナデ	
	106	L−7	Ⅲ	胴部	暗灰黄	黒褐	○	○			良	条痕文	ナデ	
	107	L−7	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○	○			良	条痕文	条痕後ナデ	スス付着

4　縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期の調査では，土坑２基，掘立柱建物跡３棟，柱穴列２列が検出された。（第32図）

（１）遺構

①土坑（第33図）

土坑は２基検出された。形状はほぼ円形で，土坑内から遺物も出土している。いずれの土坑も用途等詳細については不明である。

土坑１号

Ｍ－７区，Ⅲ層上面で検出された。平面プランは不整形で，イモ穴により南西側が一部削平をうけていた。深さ約10㎝。埋土は暗灰色土で，２㎜大の炭化物が多く含まれていた。土坑内からは，土器108～110が出土している。

108は，円筒形土器の口縁部。外面はヘラケズリで調整されている。109は，精製の深鉢形土器の口縁部である。頸部からの立ち上がりが内湾気味に外反する。内外面ともに，ていねいなヘラケズリを施されている。110は，深鉢の胴部である。外面はヘラケズリによる器面調整を施す。内面は風化により剥落している。

土坑２号

Ｍ－７区，Ⅲ層上面で検出された。平面プランは楕円で，長軸約90㎝，短軸約82㎝，深さ約20㎝。埋土は暗茶褐色土で，炭化物がまばらに含まれていた。土坑内からは土器片が３点出土しているが，いずれも小片で掲載していない。

②掘立柱建物跡（第34図）

掘立柱建物跡と考えられる遺構が３棟検出された。いずれも１間×１間の建物で，農業開発総合センター遺跡群の各遺跡の晩期で多くみられる。柱穴等からの遺物は出土していない。

掘立柱建物跡１号

Ｋ－７区で検出された。いずれの柱穴にも，Ⅱ層の土が入っていた。

掘立柱建物跡２号

Ｌ－７区で検出した。Ｐ２・Ｐ３内は，明茶色のブロックを含む灰色の土が壁際で検出され，内側にⅡ層の土が入っていた。

掘立柱建物跡３号

Ｌ－７区で検出した。Ｐ１内は明茶色土，Ｐ２・Ｐ４内からはⅡ層の土，Ｐ３内には黄橙色のパミスを含む灰色の土が入っていた。

③柱穴列

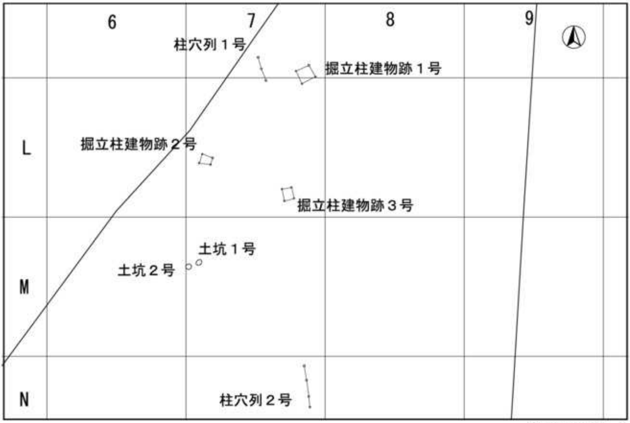
柱穴列は農業開発総合センター遺跡群においてはよく見られる遺構である。調査区内で柱穴と思われるものが20近く検出したが，３個以上の柱穴が直線上に並んでいるものを人為的な遺構としてとらえた。

柱穴列１号

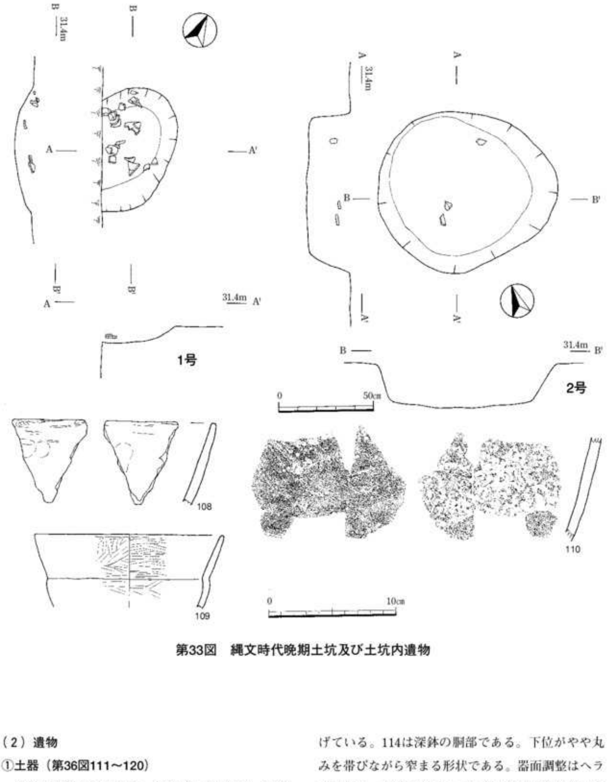
Ｋ～Ｌ－７区で検出した。ほぼ南北方向に並んでいる。Ｐ１内は，茶黄色のブロックが混入する灰色の土が入っていた。Ｐ２・Ｐ３は，同じく灰色の土の内側に，Ⅱ層の土が入っていた。

柱穴列２号

Ｎ－７区で検出した。ほぼ南北方向に並ぶ。いずれの柱穴も，掘り込みが浅く，底部は断面で円形に近い。Ｐ１～Ｐ３内は，外側に明茶色の土が混入した黒色土，内側にⅡ層の土が入っていた。Ｐ４内は，明茶色のさらさらした土とⅡ層の土が入っていた。



第32図　縄文時代晩期遺構配置図



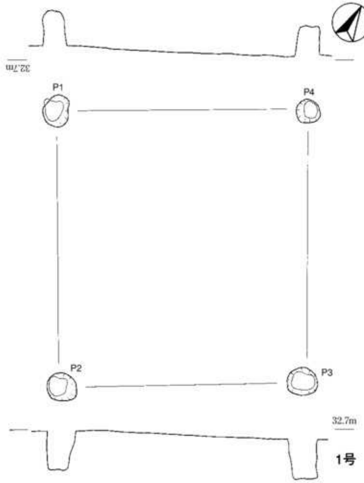
第33図　縄文時代晩期土坑及び土坑内遺物

（2）遺物

①土器（第36図111〜120）

縄文時代晩期の土器は，深鉢形土器（111〜116）と浅鉢形土器（117〜120）に形態分類できる。概して深鉢形土器は粗製，浅鉢形土器は精製である。

111は，口縁部である。横位の沈線文を施す。上部の沈線は口縁に向かってあがっており，三叉文を形成している。112は，口唇部をヘラで平坦に仕上げている。114は深鉢の胴部である。下位がやや丸みを帯びながら窄まる形状である。器面調整はヘラケズリで，下位で風化によると思われる剥落が見られる。115・116は底部である。117は，口縁部が外反し，肩部が「く」の字に内側に屈曲する精製土器である。口縁径45cmを測り，ていねいなミガキで器面調整が施されている。口縁部に沈線を廻らす。118も同じく精製土器の口縁部である。口唇部が丸



掘立柱建物跡柱穴・柱穴芯芯間距離計測表

1号

柱穴番号	柱穴径（単位：cm）		
	長径	短径	深さ（細部）
1	28	20	28
2	24	22	31
3	24	22	31
4	20	18	24

柱穴番号	柱間（単位：cm）
1～2	217
2～3	192
3～4	213
1～4	199

2号

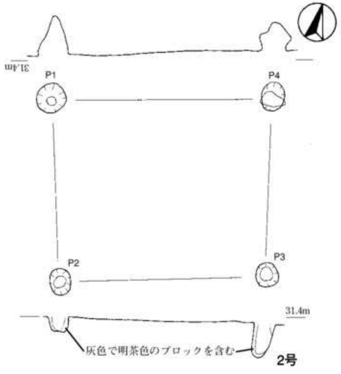
柱穴番号	柱穴径（単位：cm）		
	長径	短径	深さ（細部）
1	24	23	31
2	24	10	12
3	22	20	28
4	26	19	22

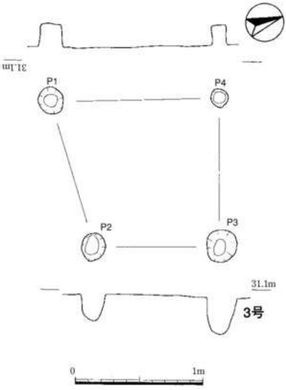
柱穴番号	柱間（単位：cm）
1～2	146
2～3	160
3～4	143
1～4	173

3号

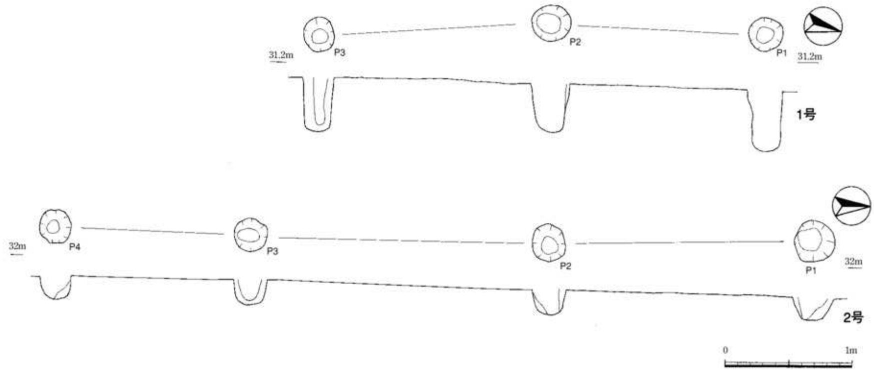
柱穴番号	柱穴径（単位：cm）		
	長径	短径	深さ（細部）
1	23	20	20
2	22	20	21
3	30	25	30
4	15	14	16

柱穴番号	柱間（単位：cm）
1～2	117
2～3	104
3～4	120
1～4	135





第34図　縄文時代晩期掘立柱建物跡



柱穴列柱穴計測・柱穴芯芯間距離計測表

1号

柱穴番号	柱穴痕(単位:cm)		
	長径	短径	深さ(細部)
1	28	25	49
2	30	22	37
3	30	25	41

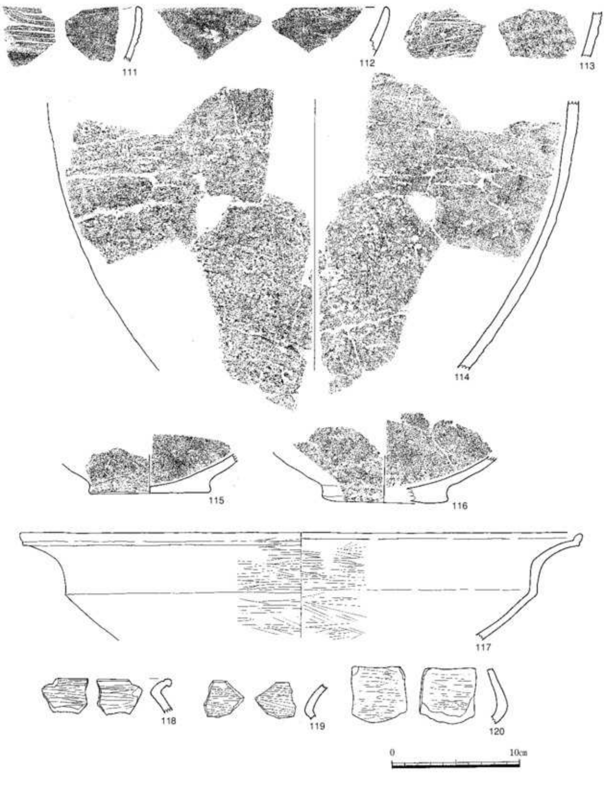
柱穴番号	柱間(単位:cm)
1~2	175
2~3	185
1~3	360

2号

柱穴番号	柱穴痕(単位:cm)		
	長径	短径	深さ(細部)
1	32	27	18
2	23	20	21
3	26	25	20
4	27	25	17

柱穴番号	柱間(単位:cm)
1~2	205
2~3	240
3~4	155
1~4	600

第35図　縄文時代晩期柱穴列

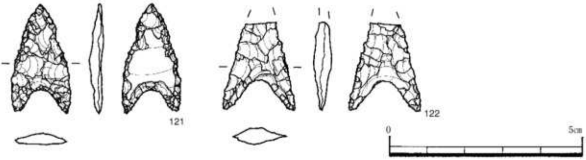


第36図　縄文時代晩期土器

く膨らむ。119は口縁部から内湾している頸部。120は，胴部。胴部中央で内側へ大きく屈曲した後，口縁部へと到るものである。

②石器（第37図121・122）

121は，黒曜石製の石鏃。縦長の剥片を加工しているが，裏面は一次剥離面をほぼ残し，側縁部のみ細かな剥離を施している。122は，チャート製の石鏃。先端部を欠損している。



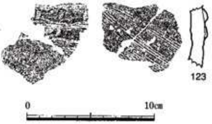
第37図　縄文時代晩期石器

縄文時代晩期土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第33図	108	SK−1	−	口縁部	灰黄褐	黒褐		○			良	ヘラケズリ・指圧痕	ヘラケズリ・指圧痕	
	109	SK−1	−	口縁部	黒褐	赤褐		○			良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	110	SK−1	−	胴部	にぶい黄橙	橙		○			良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
第36図	111	N−12	Ⅲ	口縁部	暗灰黄	暗灰黄		○			良	三叉文	ナデ	
	112	M−12	Ⅲ	口縁部	橙	灰黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	113	N−12	Ⅲ	胴部	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	114	L−7	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙(スス付着)	橙(スス付着)	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	116	−	−	底部	灰黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	117	L−7	Ⅲ	口縁部	浅黄(灰オリーブ)	にぶい黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	118	一括	−	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			良	ミガキ	ミガキ	
	119	一括	−	頸部	明黄褐	明黄褐		○			良	ミガキ	ミガキ	
	120	一括	−	胴部	灰	灰		○			良	ミガキ	ミガキ	

縄文時代晩期石器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	分類
第37図	121	N−13	Ⅲ	打製石鏃	黒曜石B	2.9	1.6	0.4	1.2	A−b−c
	122	N−13	Ⅲ	打製石鏃	チャート	2.3	1.9	0.5	1.5	A−b−c



第38図　古墳時代土器

第6節　古墳時代の調査

遺構は発見されなかった。遺物は123の1点のみである。外面に刻み目突帯が廻る。内外面共にヘラケズリで器面調整が行なわれており，工具は4～5条の木目をもつものと思われる。

古墳時代土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
[illegible]	123	ー	ー	胴部	灰黄褐	暗灰黄		○			良	刻目突帯　ハケ目	ハケ目	

第7節　古代・中世の調査

古代～中世の調査では，溝状遺構，道跡と思われる遺構，少量の遺物を検出できた。

(1) 遺構

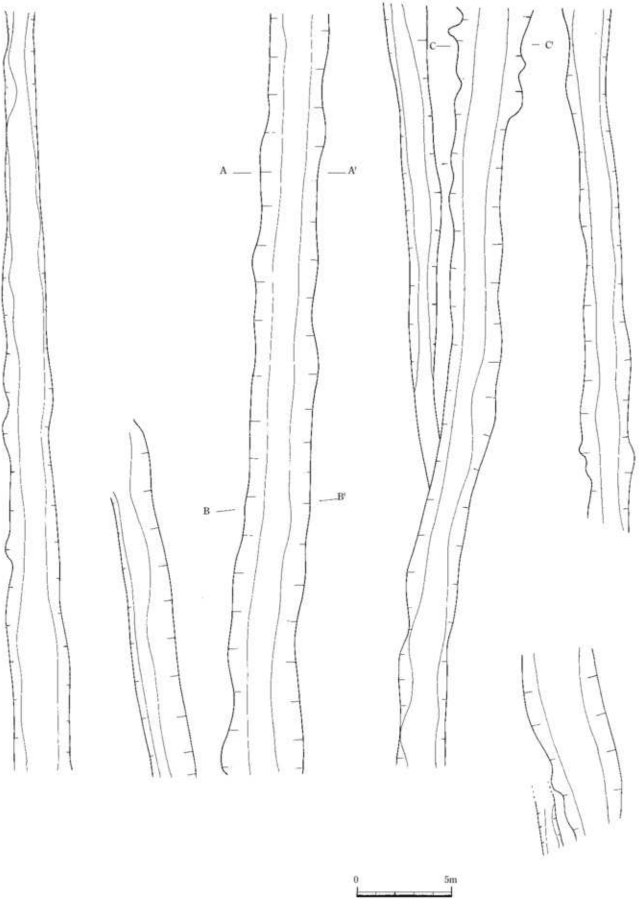
①溝状遺構（第39～第43図）

溝は，神原遺跡と頭無遺跡において検出されているが，両遺跡は道路を隔てて北側に神原遺跡，南側に頭無遺跡が在り（第43図），溝も連続しているものである。そのために，頭無遺跡で検出された溝も神原遺跡の項で取り扱うこととした。

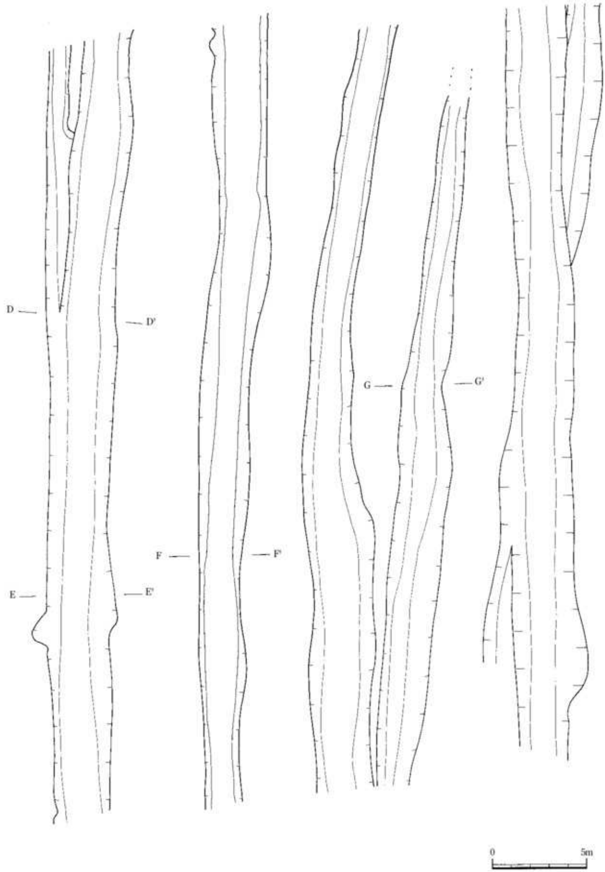
溝は，西の吹上砂丘側から延びてきている狭小な谷（水田）と，西北側にある桜谷遺跡と荒田遺跡の間を延びてきている狭小な谷により野首状になった一番幅の狭い部分に，両方の谷を繋ぐような状況で検出されている。全長は約160ｍで，最大幅は約3.6ｍ，最小幅は約0.5ｍである。南側から北側にかけて傾斜している。

古代～中世遺構内遺物観察表

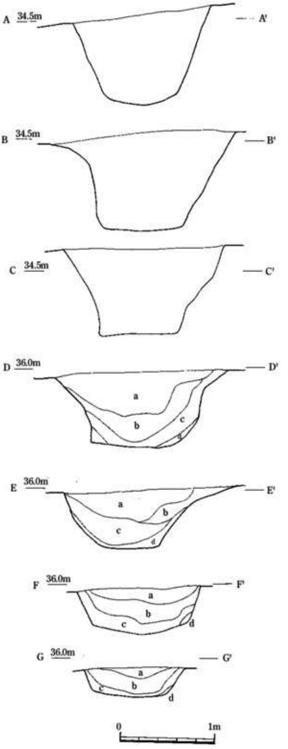
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調 内	色調 外	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	焼成	外面	内面	備考
第44図	124	溝状遺構	ー	完形	灰白	灰白		○			良	ナデ・ヘラ切り	ミガキ	底部（ヘラ切り）
	125	溝状遺構	ー	口縁部	明褐	明赤褐					良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	126	溝状遺構	ー	完形	灰褐	明赤褐					良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	127	溝状遺構	ー	口縁部	灰褐	明赤褐					良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	128	溝状遺構	ー	胴部	黄橙	黄橙					良	格子目タタキ	平行タタキ	
	129	溝状遺構	ー	胴部	黄橙	黄橙					良	格子目タタキ	同心円タタキ・平行タタキ	
第45図	130	溝状遺構	ー	口縁部	灰	にぶい褐					良	平行タタキ	同心円タタキ	
	131	溝状遺構	ー	胴部	灰	にぶい褐					良	平行タタキ	平行タタキ	
	132	溝状遺構	ー	完形	にぶい黄褐	にぶい黄褐					良	長格子目タタキ後ナデ	横ナデ	
	133	溝状遺構	ー	口縁部	灰白	灰白					良	長格子目タタキ後ナデ	横ナデ	ヘラ記号
[illegible]	134	古道	ー	口縁部	明緑灰	明緑灰					良			



第39図　古代溝状遺構１



第40図　古代溝状遺構 2



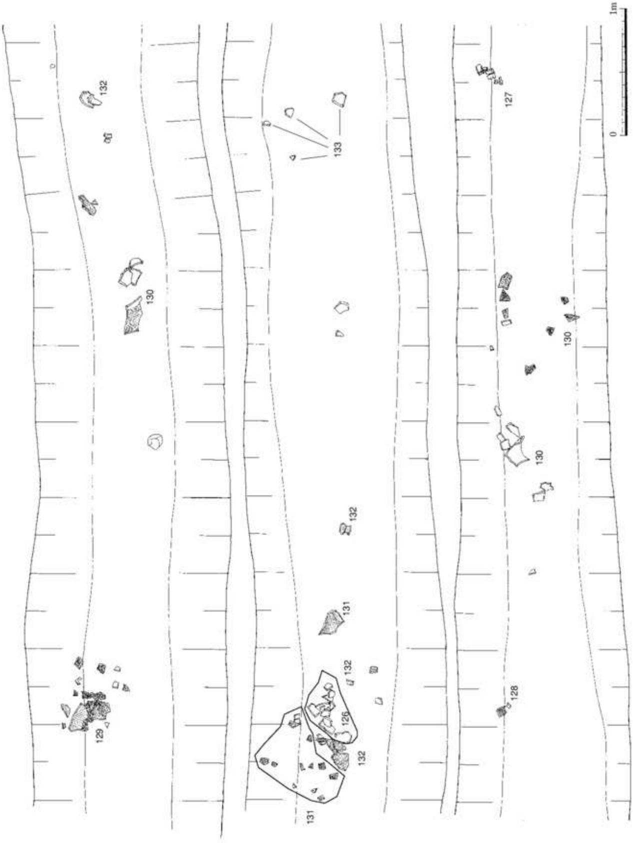
a	黒色土。きめ細かく，混ざりがほとんどない。
b	黒灰色土。しまりがある。
c	黒褐色土。黒褐色にＶ層の土が混ざる。
d	Ｖ層の土。

第41図　古代溝状遺構３（断面図）

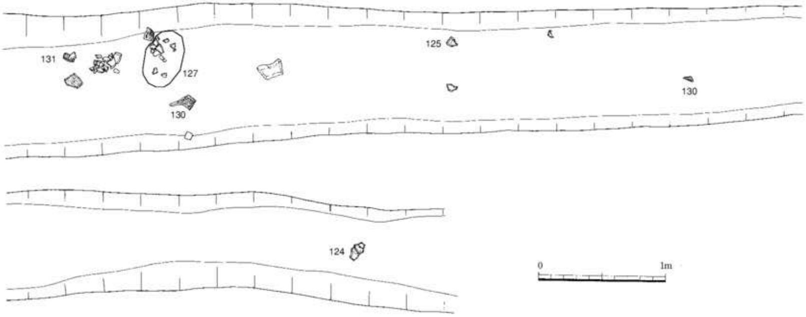
遺物（第44・45図124〜133）

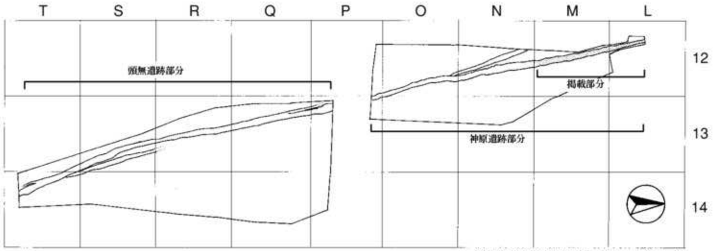
溝内からは，土師器と須恵器が出土しているが，神原遺跡の北側を中心に集中して出土しており，頭無遺跡ではほとんど出土していない。また，溝の底面及び底面に近い深さで出土している。

124〜127は土師器。124は杯で，口縁部径12cm，器高4.2cmを測る。平底の底部から外方へ立ち上がり，端部は丸くおさめる。125〜127は，甕形土器。いずれも胴部はあまり膨らまず，口縁部は「く」の字状に外反する。底部は欠損しているが，丸底と思われる。器面調整はヘラケズリが見られる。124は口縁部径16cmを測る小型のものである。128〜133は須恵器。128〜131は甕，132・133は壺である。128・129は外面が格子目タタキで，内面は，下部は平行タタキ，肩部は同心円タタキである。130・131は同一個体と思われるもので，口縁部径22cmを測る。くびれた頸部から口縁部は外反し，胴部は膨らむものである。外面は平行タタキ，内面は下部は平行タタキ，胴部最大径の部分から肩部へかけては同心円タタキである。132・133は肩部が張り，最大径が肩部にある特徴をもつものである。132は口縁部を欠損するが，ほぼ完形に復元できたものである。底部は径12cmの安定した平底であるが，わずかに上げ底になる。胴部はほぼ直線的に肩部へ到る。肩部はあまり丸みを帯びずに張っている。頸部は径4.5cmと細くしまり，口縁部は外反する。器面調整は，外面は長格子目タタキの跡でナデが施され，底部付近ではタタキの痕跡も残っていない。内面は横ナデである。また，輪積みの痕跡も明瞭に認められる。133は132とほぼ同様の形状である。焼が甘いためか白っぽく仕上がっている。外面は長格子目タタキの後でナデが施されている。肩部に「×」のヘラ記号が認められる。内面は横ナデで，輪積みの痕跡が明瞭である。また，132・133共に内面の肩部付近に小石を布で包んだと思われる当て具の痕跡が認められる。



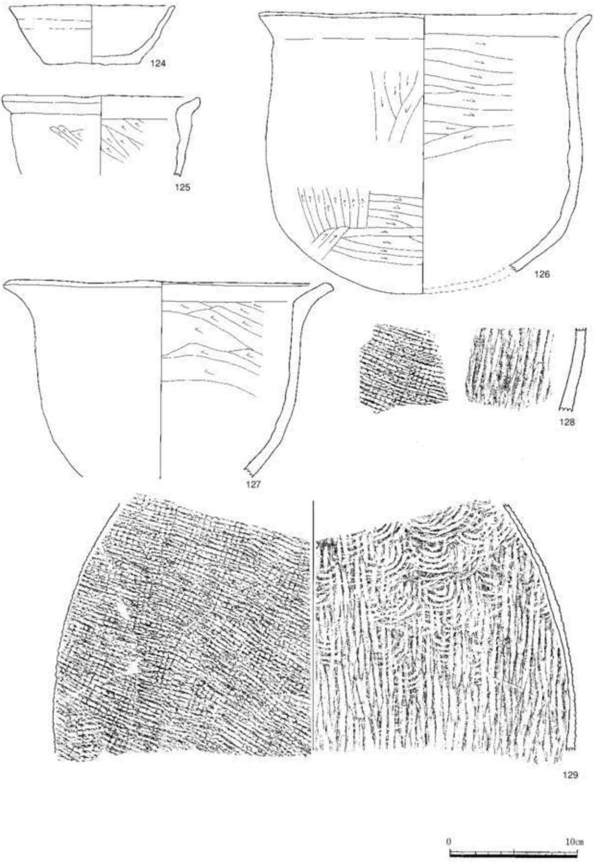
第42図　古代溝状遺構内遺物出土状況図 1



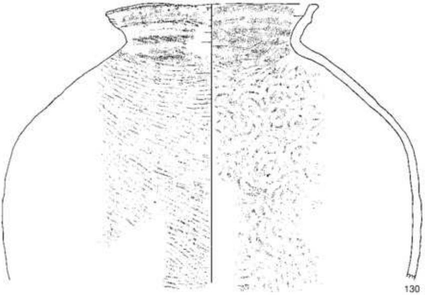


溝状遺構全体図（1グリッド20m）

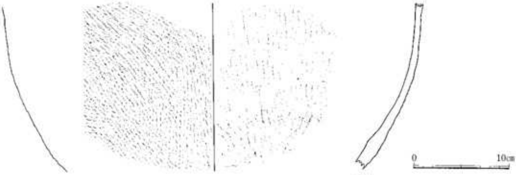
第43図　古代溝状遺構内遺物出土状況図 2



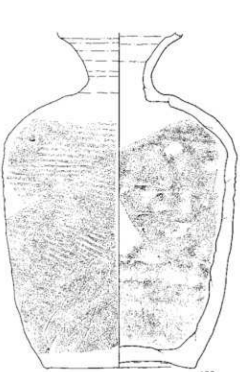
第44図　古代溝状遺構内出土遺物１



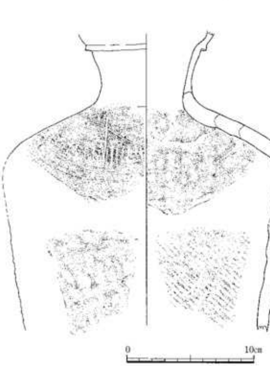
130



131

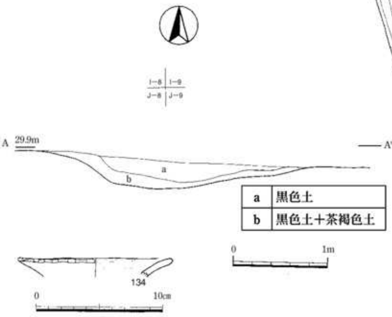


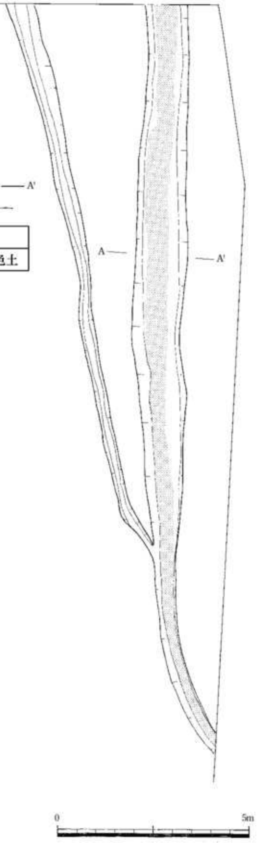
132



133

第45図　古代溝状遺構内出土遺物２





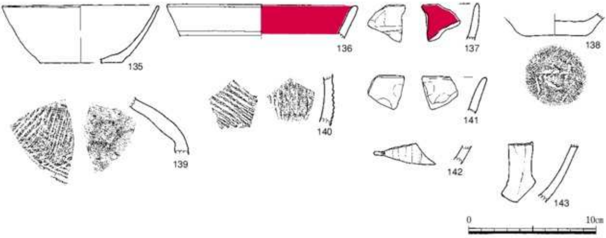
第46図　古道及び古道内出土遺物

②古道（第46図）

Ｉ－９・Ｊ－９区で道跡と思われる遺構を２条検出した。東側の道跡は，ほぼ南北方向にのびており，長さは約20ｍ，最大幅約1.5ｍ，最小幅0.5ｍである。道跡の中央部に，黒色土の硬化面が約１ｍ幅で続いている（スクリーントーン部分）。北側では高低差10cmの上場・下場をとらえることができたが，南側にいくに従って，その差はほとんど無く，確認ができなかった。西側の溝は，同じく南北方向にのびており，南端で東側と切り合う。長さ約15ｍ，最大幅約0.5ｍ，最小幅約0.3ｍと小さいもので，道跡とは考えにくい。134は，口縁径13cmをはかる青磁の稜花皿である。

（2）遺物（第47図135～143）

135は，口縁径12㎝の土師器の椀である。136・137も土師器の口縁部で，内外面ともにヘラケズリで調整され，内面は朱が塗られている。138は，土師器の底部である。底部は糸切りである。139は，須恵器の壺の肩部である。外面調整は格子目タタキ，内面は小石を布で包んだと思われる当て具の痕跡が認められる。140は，須恵器の甕の胴部で，内外面共に平行タタキで器面調整がなされている。141～143は青磁である。141は口縁部で，灰色味がかかる。142・143は胴部で，連弁文が観察できる。



第47図　古代・中世遺物

古代～中世出土遺物

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第47図	135	一括	―	完形	淡黄	淡黄		○			良	ナデ	ナデ	
	136	一括	―	口縁部	にぶい褐	浅黄					良	ミガキ	ミガキ	内赤
	137	一括	―	口縁部	にぶい褐	浅黄					良	ミガキ	ミガキ	内赤
	138	一括	―	底部	淡黄	淡黄		○			良	糸切り	ミガキ	
	139	一括	―	胴部	暗灰黄	黄褐		○			良	格子目タタキ	指圧痕（布）	
	140	一括	―	胴部	灰黄	暗灰黄					良	平行タタキ	平行タタキ	
	141	一括	―	口縁部	灰オリーブ	灰オリーブ					良	連弁文		
	142	一括	―	胴部	緑灰	緑灰					良	連弁文		
	143	一括	―	胴部	緑灰	緑灰					良	連弁文		

第８節　小結

神原遺跡では，旧石器時代から古代・中世までの調査成果を挙げることができた。
なお，平成14年度の調査部分において，大雨のために出土地点が不明になった遺物があり，詳しい出土区・層位を掲載できないものがある。それらについては，土器形式などから時代を設定した。

１　旧石器時代（遺構・遺物）

14年度の調査範囲から，９基の礫群と1600近くの遺物を検出した。

礫群の範囲・礫数は様々で，共通性はあまり見られない。また，１・２・３号，５・６号は近接しているが，それ以外は距離が離れている。

遺物については，出土遺物を石材ごとに分類を行なったところ，集中区が確認できたので，７つのブロックが存在すると判断した。また，ブロックごとに主として出土する遺物が異なるのが大きな特徴といえる。ブロック６は中・大型のナイフ形石器が，それ以外は細石刃核が出土しているため，６とそれ以外のブロックは，形成時期に差があるものと考えられる。また，ブロック３においては，黒曜石Aが全面にわたって出土しており，広範囲にわたる石器製作所だった可能性もある。さらにブロック５では，水晶を素材とする石器・チップが出土しているのが特徴的である。

（石材別出土割合）

石材	割合(%) 石	材	割合(%)
黒曜石A	63.94	シルト質頁岩	3.41
黒曜石B	1.87	水晶	3.28
黒曜石C	0.39	玉髄	0.97
頁岩	9.34	チャート	0.13
黒色安山岩	5.02	その他	11.65

２　縄文時代

縄文時代では，出土量は全体的に少なめであるが，草創期から晩期にわたって，遺構や遺物が出土している。

（１）草創期（遺構）

集石遺構４基をＪ・Ｋ－８区で検出した。明確な集中区を持つものはほとんどない。また，礫数にも差があり，それぞれの関連性については不明である。

（２）早期（遺物）

縄文時代早期では，他時代と比較して，土器・石器が出土している。土器はⅠ類からⅣ類にまで分類でき，Ⅰ類土器がそのほとんどを占める。Ⅰ類土器は，口縁部が肥厚しやや外反する円筒形の土器で，口縁部に貝殻刺突文，胴部に綾杉状条痕文を施すものである。石坂式に比定されるものである。Ⅱ類は1点のみの出土であるが，胴部に刺突文のみ施していることから，下剥峯式土器に類するものであると考えられる。Ⅲ類は条痕が横位に施される円筒形の土器で，中原式土器に比定されるものである。Ⅳ類土器は円筒形条痕文土器である。石器は，磨石・敲石を中心に出土している。

（３）中後期土器（遺物）

中後期では，土器３点が出土しているが，形式の特定が難しい。

（４）晩期（遺構・遺物）

晩期では，土坑２基・掘立柱建物跡３棟・柱穴列２基を検出した。土坑１号と２号は近接しているが，出土遺物が少なく，共通点もないことから，関連性は薄いと考えられる。掘立柱建物跡は，３棟検出された。いずれも１間×１間の建物で，農業センター遺跡群ではよく見られるが，大きさ・方向・柱間形状等に統一性は見られない。柱穴列は２列とも北北西～南南東に並ぶが，穴数が違うことや検出地点が離れていることから関係性はないものと思われる。

遺物は土器・石器が出土している。111は三叉文土器であるが，同形式は1点のみの出土で，他遺物との関連性が確認できなかった。その他の土器については，残存部の形状から入佐式土器に比定されるものである。

３　古墳時代（遺物）

123の１点のみである。層位等不明であるが，刻目突帯を貼り付けていることから，古墳時代の遺物

であると判断した。

4　古代～中世（遺構・遺物）

古代の遺構として溝を検出した。溝は神原遺跡及び頭無遺跡で検出されており，間の道路を隔てて連続しているものである（第43図参照）。溝の底部は，南南東の頭無遺跡から北北西の神原遺跡に向けて下っており，遺物が神原遺跡の溝の最深部（北北西側）でのみ出土していることも，この傾きが関係しているのではないかと思われる。遺物は土師器・須恵器が完形に近い形で出土している。須恵器は器高が60cm以上になる大型のものもある。

また，14年度の調査で，中央部分に硬化面がある道跡と思われる遺構も検出し，遺構内から15世紀代と思われる青磁の稜花皿が出土している。

頭　無　遺　跡

第Ⅶ章　頭無遺跡の発掘調査成果

第１節　調査の経過

頭無遺跡は，平成15年度に本調査を実施した。本調査は研究畑，研究付帯施設（土肥），付帯共同用施設予定地の削平部分１～４地点を対象とした。

平成15年度日誌抄

７月14日（月）～７月18日（金）

調査開始。１地点・２地点・３地点表土剥ぎ，Ⅲ層・Ⅳ層掘り下げ。トレンチ設定及び掘り下げ。グリッド杭打ち。

７月22日（火）～７月24日（木）

Ⅲ層掘り下げ。トレンチ設定，掘り下げ。縄文早期集石写真撮影。

８月４日（月）～８月７日（木）

溝状遺構写真撮影，掘り下げ，遺物取り上げ。Ⅳ層掘り下げ。

８月11日（月）～８月12日（火）

台風後保全，安全点検。Ⅳ層掘り下げ。縄文早期遺物取り上げ。プレハブ移転準備。

８月18日（月）～８月20日（水）

プレハブ移設。Ⅳ層掘り下げ完了。溝状遺構掘り下げ完了。遺物取り上げ。

10月15日（水）～10月17日（金）

溝状遺構埋土断面分層，写真撮影，実測。

10月21日（火）～10月23日（木）

溝状遺構完掘削。溝および周辺の精査。

11月４日（火）～11月７日（金）

清掃。空中写真撮影。

11月18日（火）～11月20日（木）

４地点精査。Ⅲ層掘り下げ。縄文早期集石検出，写真撮影。鹿児島大学本田道輝助教授に縄文時代の遺物指導を受ける。

12月１日（月）～12月５日（金）

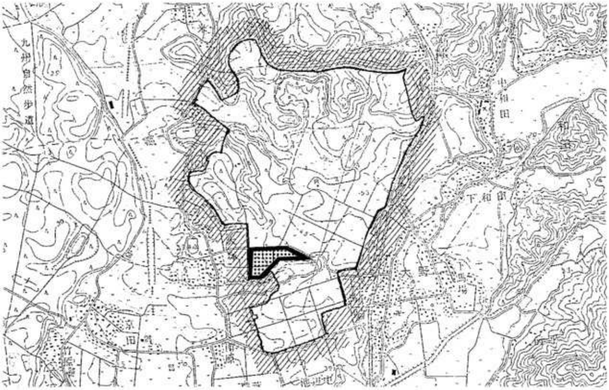
Ⅲ層Ⅳ層掘り下げ。Ⅲ層遺物取り上げ，地形図（20cmコンタ）作成。Ⅳ層遺物取り上げ。ピット実測，写真撮影。

12月８日（月）～12月12日（金）

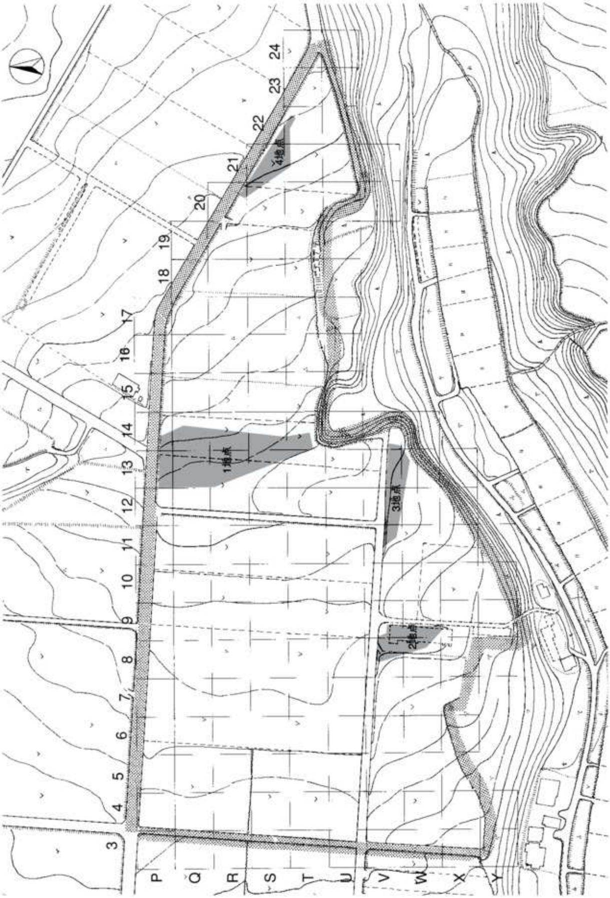
Ⅳ層掘り下げ終了。集石検出，写真撮影。３地点トレンチ設定，掘り下げ。土層断面図実測，写真撮影。

12月15日（月）～12月16日（火）

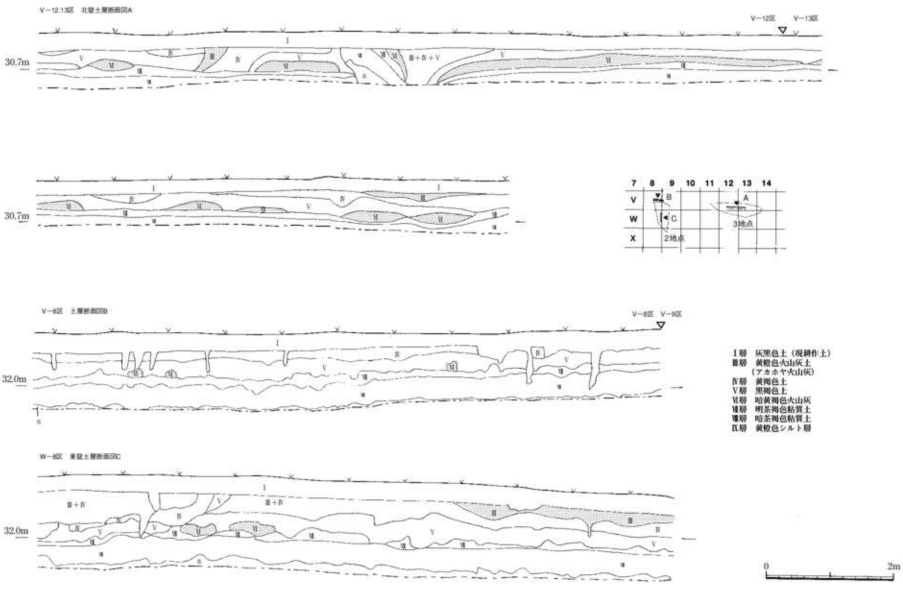
３地点トレンチ土層断面写真撮影，実測。４地点集石検出，写真撮影。遺物取り上げ。引き渡し。



第１図　頭無遺跡位置図（１／25,000）



第２図　地形図及びグリッド配置図


V−12.13区　北壁土層断面図A
V−12区　V−13区
30.7m
30.7m
V−8区　土層断面図B
V−8区　V−9区
32.0m
W−8区　東壁土層断面図C
32.0m
7 8 9 10 11 12 13 14
V
W
X
A
B
C
2地点
3地点
Ⅰ層　灰黒色土（現耕作土）
Ⅲ層　黄橙色火山灰土
（アカホヤ火山灰）
Ⅳ層　黄褐色土
Ⅴ層　黒褐色土
Ⅵ層　暗黄褐色火山灰
Ⅶ層　明茶褐色粘質土
Ⅷ層　暗茶褐色粘質土
Ⅸ層　黄橙色シルト層
0
2m

第３図　土層断面

第２節　遺跡の層序（第３図）

頭無遺跡における層序は，農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同様である。調査を実施した範囲の標高を見ると東側が41ｍ，西側が31ｍと東側から西側へ傾斜している地形である。大半が削平されておりⅡ層は見られず，地点によってはⅢ・Ⅳ層も削平されている。

第３節　発掘調査の方法及び概要

頭無遺跡は，農業開発総合センター内の調整池と迫田の北側にある台地に立地し，北側は神原遺跡と宗円掘遺跡に隣接している。

発掘調査は国土座標に合わせた20ｍ×20ｍの調査範囲（グリッド）を設定して実施し，遺跡内の北側からＡ・Ｂ・Ｃ…，西側から１・２・３…とした。調査面積は3,190㎡である。調査方法は表土を重機で掘り下げ，その後人力での掘削を行った。削平部分は４地点である。

１地点で表土剥ぎを行ったところ一部分はⅤ層が露出し，畑地利用で激しく削平を受けていた。精査したところ，表土直下で，平成13年度に神原遺跡の調査で確認されていた古代の溝状遺構の延長部分を検出した。その後，下層確認トレンチを設定し，Ⅳ層上面までの掘り下げを行った。

２・３地点で表土剥ぎを行ったところⅢ層が残存していた。そのⅢ層上部で縄文時代早期のものと思われる集石を３基検出した。遺物は，土器片が数点出土した。その後，下層確認トレンチを設定し，Ⅳ～Ⅸ層上面までの掘り下げを行った。

４地点で表土剥ぎを行ったところⅢ層が残存していた。そのⅢ層上部で縄文時代晩期のものと思われる集石５基を検出し，Ⅳ層まで調査を行った。遺物は，土器片・磨石・石斧が数点出土した。その後，下層トレンチを設定し，Ⅳ～Ⅸ層上面まで掘り下げを行った。

第４節　縄文時代の調査

１　縄文時代早期の調査

縄文時代早期では，遺物・遺構が限られた地点で出土し，集石遺構も集中している。

（１）遺構（第４図～第５図）

集石遺構８基が検出されている。３基は調査第２地点の南側のＷ－12区とＷ－13区で検出されている。残りの５基は，調査第４地点のＳ－21区とＴ－21区の境界線を中心に検出されている。第４地点に集中する密度が高い。

１号集石遺構（第４図）

Ｗ－13区で検出されたもので，45×40㎝の範囲に広がる。拳大の礫を中心に18個からなる。礫は，集中しているが，ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

２号集石遺構（第４図）

Ｗ－12区で検出されたもので，110×85㎝の範囲に広がる。角張った拳大の礫がほとんどだが，一部，丸みを帯びたものが61個見られる。土器片が３点共伴している。

３号集石遺構（第４図）

Ｗ－13区で検出されたもので，70×145㎝の範囲に広がる。拳大の礫を中心に21個からなる。礫数も少量でまとまりにかけている。掘り込みは見られず，ほぼ平坦である。

４号集石遺構（第４図）

Ｓ－21区の南側，Ｔ－22区との境目近くで検出されたもので，140×90㎝の範囲に広がる。角張った礫を中心に87個からなる。集中して礫は見られるが，掘り込みは見られず，ほぼ平坦である。

５号集石遺構（第４図）

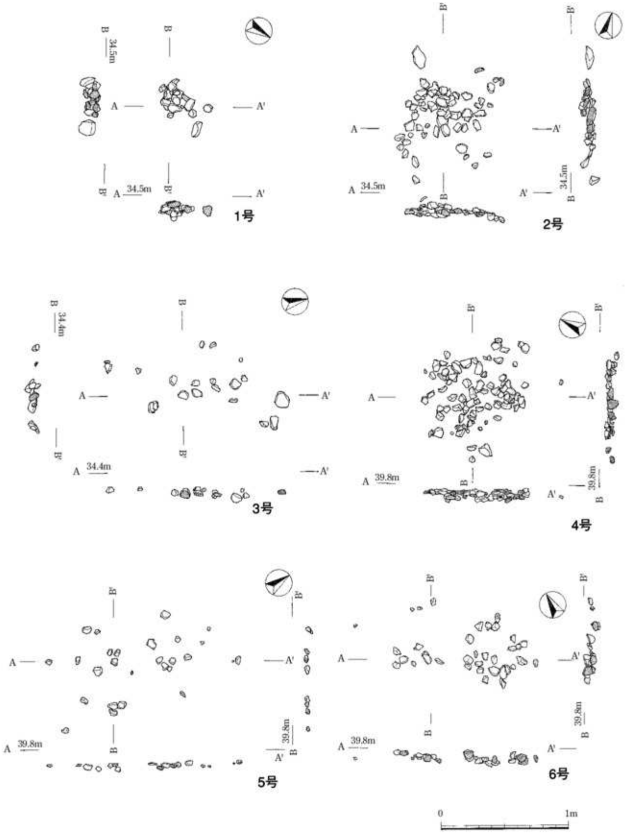
Ｔ－21区で検出されたもので，84×153㎝の範囲に広がる。角張った礫を中心に28個がまばらな状態で見られる。掘り込みは見られず，ほぼ平坦である。

６号集石遺構（第４図）

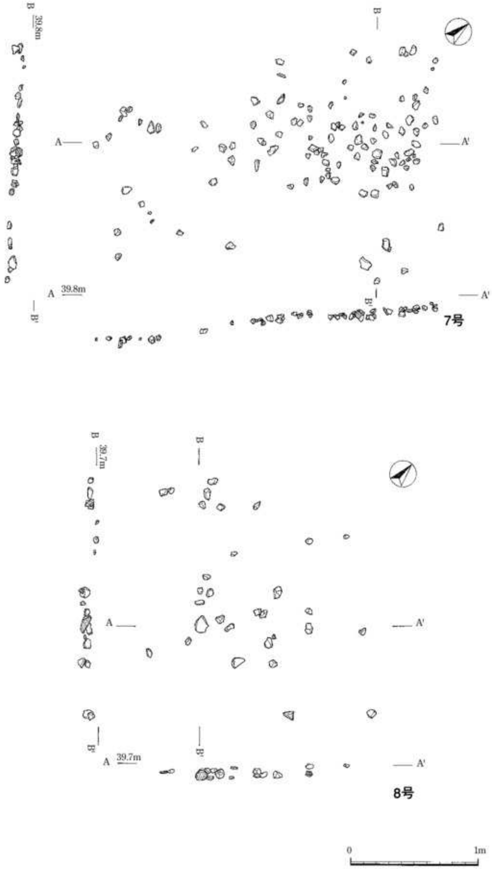
Ｔ－21区で検出されたもので，68×144㎝の範囲に広がる。角張った礫を中心に35個からなる。掘り込みは見られず，ほぼ平坦である。

７号集石遺構（第５図）

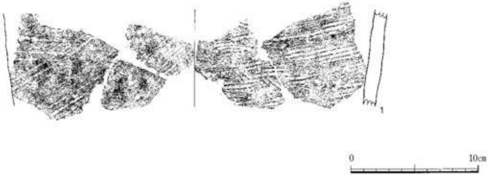
Ｓ－21区の南側，Ｔ－21区の北側の境目近くで検出されたもので，８基中，最も礫の範囲が広く



第４図　縄文時代早期１～６号集石遺構



第５図　縄文時代早期７・８号集石遺構



第６図　集石遺構内遺物

集石遺構内遺物観察表

挿図番号	遺物番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第6図	1	SS	W−12	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	条痕文	スス

189×270㎝の範囲に広がる。角張った礫を中心に108個からなり北側に集中している。掘り込みは見られず，ほぼ平坦である。

８号集石遺構（第５図）

Ｔ−21区で検出されたもので，190×150㎝の範囲に広がる。拳大の礫を中心に29個からなる。掘り込みは見られず，ほぼ平坦である。

（２）遺構内遺物（第６図）

①縄文早期土器

１は２号集石内で検出された。外面は不規則な貝殻条痕文。内側は条痕が見られ，表面には煤が付着している。

（３）遺物（第７図〜第８図）

①土器（第７図）

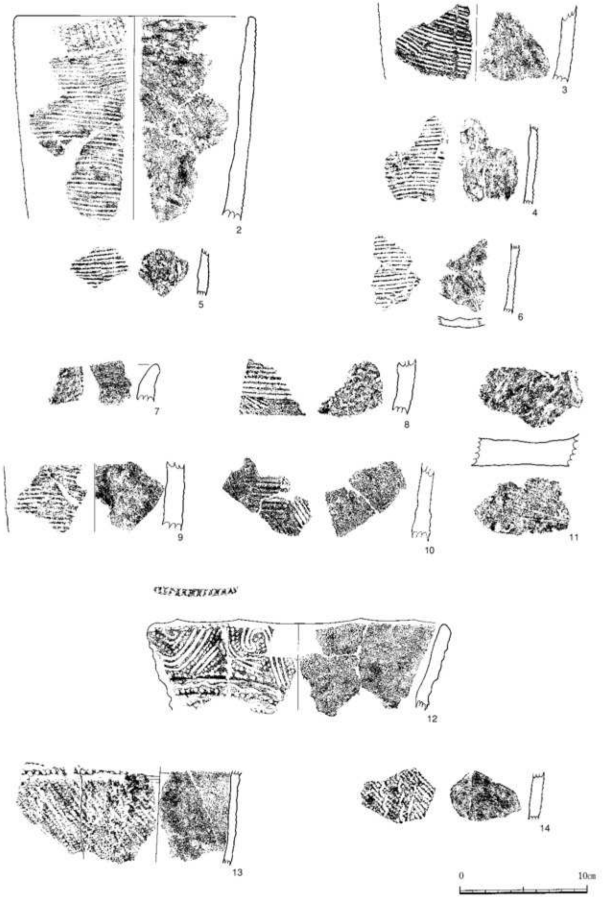
縄文時代早期の土器は少量で13点を図化することができた。２〜６はⅠ類土器，７〜10はⅡ類土器，12・13はⅢ類土器に分類される。

２は口縁径19㎝を測る。口縁部に縦位の連続する貝殻刺突文があり，胴部には横位の貝殻条痕文が施されている。３〜６は胴部で横位の貝殻条痕文が施されている。６は角筒の胴部である。７は口縁部が外反し，貝殻による刺突文が斜位に施されている。

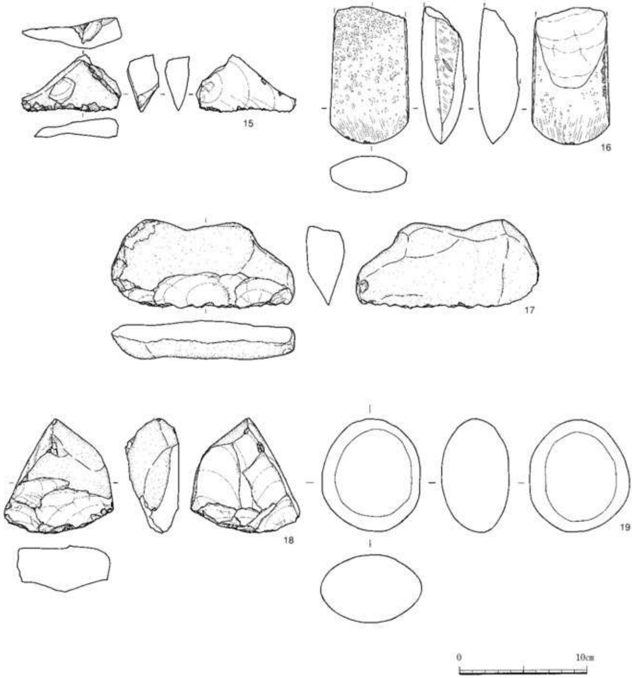
８〜10は胴部に綾杉状の条痕文が施されている。11は厚みのある底部である。12は口縁部で口縁径が24㎝を測る。直径３㎜くらいの棒状施文具による沈線文，連続刺突文が施されている。13・14は胴部でＲＬの一段による結節縄文が施されている。

②石器（第８図）

15は頁岩の縦長剥片を素材とした，スクレイパーで下縁部に剥離調整が施され刃部としている。16は刃部形成に入念な調整が見られる磨製石斧である。表面には敲打痕も見られる。17・18はホルンフェルスの礫器である。17は自然面を多く残し，下部に刃部形成の痕が見られる。18は荒い剥離が行われ自然面を多く残している。19は砂岩を素材とする磨石である。敲打痕などはなく磨石だけの機能を持つ。



第７図　縄文時代早期土器



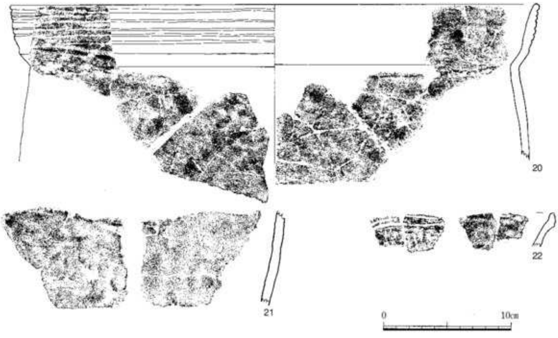
第8図　縄文時代早期石器

縄文時代早期土器観察表

挿図番号	遺物番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第7図	2	Ⅳ	S−14	口縁部	暗褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	3	Ⅳ	S−14	胴部	暗褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	4	Ⅳ	S−14	胴部	黒褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	5	Ⅳ	S−14	胴部	黒褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	6	Ⅳ	S−14	胴部	黒褐	灰褐	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	角筒
	7	Ⅳ	−	口縁部	灰褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	8	Ⅳ	−	胴部	黒褐	橙	○	○			良	綾杉条貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	9	Ⅳ	S−14	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○			良	綾杉条貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	10	Ⅳ	−	胴部	黒褐	にぶい褐	○	○			良	綾杉条貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	11	Ⅳ	S−14	底部	にぶい橙	褐灰	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	12	Ⅳ	S−14	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○	金雲母	良	棒条痕文・棒状刺突文	ヘラケズリ	
	13	Ⅳ	S−14	胴部	橙	橙	○	○	○	金雲母	良	結節縄文	ヘラケズリ	
	14	Ⅳ	−	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○	○		良	結節縄文	ヘラケズリ	

縄文時代早期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第8図	15	スクレイパー	V－13	Ⅳ	頁岩	7.9	4.4	1.4	490	
	16	磨製石斧	－	Ⅳ	頁岩	10.7	3.1	2.8	330	
	17	礫器	S－14	Ⅳ	ホルンフェルス	7.1	14.45	3.1	395	
	18	礫器	V－8	Ⅳ	ホルンフェルス	9.1	8.65	4.25	315	
	19	磨石	－	Ⅳ	砂岩	8.8	7.8	5.3	440	



第9図　縄文時代晩期土器

縄文時代晩期土器観察表

挿図番号	遺物番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第9図	20	Ⅳ	S－14	口縁部～胴部	褐灰～灰黄	浅黄橙	○	○	○		良	沈線文　ナデ	ミガキ	
	21	Ⅳ	S－14	胴部	灰黄	浅黄橙	○	○	○		良	ナデ	ミガキ	
	22	Ⅳ	S－14	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	沈線文　ミガキ	ミガキ	

2　縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期は，遺構は検出されなかった。遺物は限られた地点で少数だが出土している。

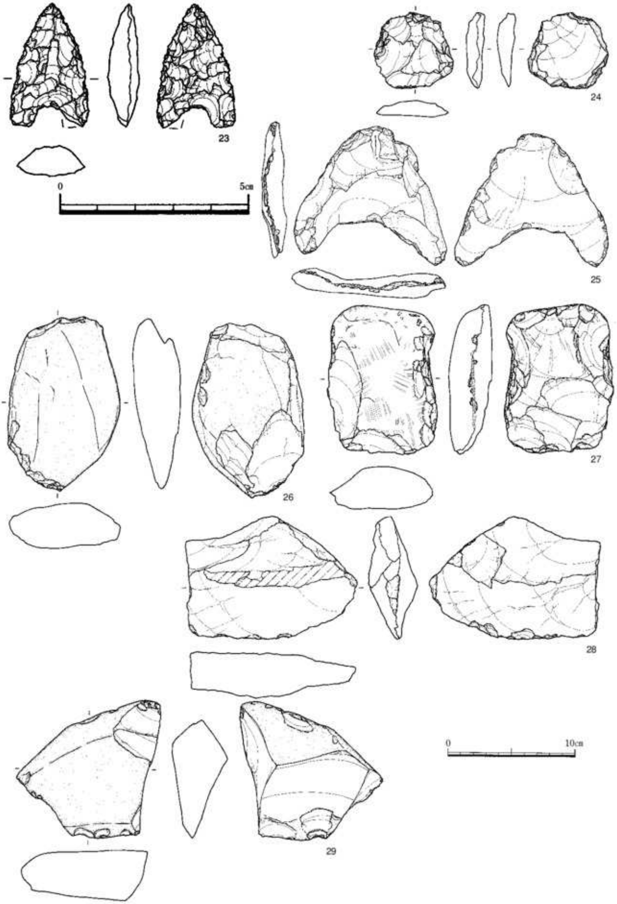
（1）遺物

①土器（第9図）

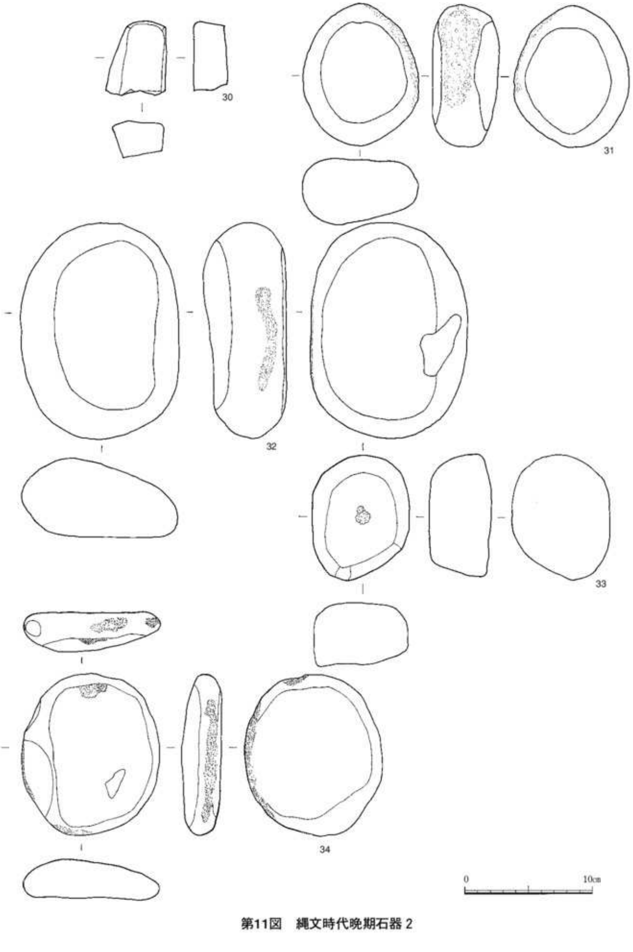
20～22は深鉢形土器である。20は口縁径41cmを測る。口縁部に沈線があり，屈曲した頸部から口縁部は外反する。口縁部はわずかに肥厚し，5～6条の沈線文が施される。21は胴部で20と同一個体の可能性がある。22は口縁部である。頸部から外反した口縁部は端部近くで肥厚し直行気味になる。又，2条の沈線文を施す。

②石器（第10図～第12図）

23は打製石鏃で針尾産に類似する黒曜石が使用されている。本報告書P21の農業開発総合センター内の石鏃分類図ではA－b－dに分類される。基端の片方が破損している。24・25はスクレイパーである。24は全体に調整を施している。25は剥離の後，各面に調整の痕が見られる。26は打製石斧である。側面に剥離痕があり，下部は破損している。27～29は礫器である。27は自然面を多く残し，下部に刃部の形成痕がある。28は安山岩で横長剥片を素材にし，下部に刃部形成痕がある。29は自然面を残し，下部に刃部の形成痕がある。30は棒状磨石の一部である。砂岩で作業面は片面である。31・32・34は砂岩で磨石と敲石の機能を持ったもので側面に敲打痕がある。33は磨石と凹石の機能を持ったものである。



第10図　縄文時代晩期石器１



第11図　縄文時代晩期石器２

縄文時代晩期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第10図	23	石鏃	—	—	黒曜石	3.3	1.7	0.8	4.39	A-b-d
	24	スクレイパー	—	—	頁岩	6.4	5.3	1.1	60	
	25	スクレイパー	V−12	Ⅲ	ホルンフェルス	10.75	12	2.1	185	
	26	打製石斧	V−13	Ⅲ	頁岩	11.8	8.7	3.5	465	
	27	礫器	V−13	Ⅲ	ホルンフェルス	13.85	8.95	3.85	550	
	28	礫器	V−11	Ⅲ	安山岩	9.75	13.55	3.9	425	
	29	礫器	V−8	Ⅲ	頁岩	11	11.35	4.4	511	
第11図	30	磨石	V−13	Ⅲ	砂岩	5.5	4.6	2.6	150	
	31	磨石	V−13	Ⅲ	砂岩	11.1	9.1	5.2	670	
	32	磨石	—	—	安山岩	16.9	12.3	6.5	2200	
	33	磨石	V−14	Ⅲ	砂岩	9.7	7.7	4.9	620	
	34	磨石	V−13	Ⅲ	砂岩	12.7	10.8	3.1	610	

第12図　古墳時代土器

古墳時代土器観察表

挿図番号	遺物番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第12図	35	—	—	口縁部	橙	橙		○	○		良	ハケ目	ハケ目	
	36	—	—	メンコ	橙	橙	○	○	○		良	ミガキ	ケズリ	

第５節　古墳時代の調査

古墳時代では，遺構は検出されなかったが，古墳時代の遺物と思われる土器片が検出された。

（１）遺物（第13図）

35は小型の甕形土器の口縁部である。口径約13，8㎝を測る。内側，外側ともハケ目調整が見られる。36は土器片を加工した土製品で一般にメンコと呼ばれている物で大きさは3×3㎝である。

第６節　古代の調査

（１）遺構

古代の調査では，第１地点で溝状遺構が検出された。精査したところ，平成13年に神原遺跡で検出された古代の溝状遺構の延長であると確認された。神原遺跡では溝内から多くの須恵器・土師器が出土しているが，本遺跡では遺物が見られなかった。神原遺跡と同一の溝であるため，神原遺跡の項でまとめて記述することにした。

第７節　小結

頭無遺跡では，縄文時代早期・晩期，古墳時代，古代の遺構・遺物が出土している。農業開発総合センター遺跡群の他の遺跡と比べるとその量は多くはない。しかし，縄文時代早期の前平式土器，石坂式土器，平栫式土器や縄文時代晩期の上加世田式土器が出土していることや神原遺跡と結合される溝状遺構も検出され，他の遺跡と同時期にこの地でも生活が営まれていたことが想像される。

縄文時代早期では，集石遺構が８基検出された。掘り込みのない物ばかりであるが第２地点に３基，第４地点に５基とまとまったところから検出されている。また，２号集石には遺構内遺物として縄文時代早期の土器が出土した。形式分類は不明である。縄文時代早期の土器はⅠ類を前平式土器，Ⅱ類を石

坂式土器，Ⅲ類を平栫式土器として分類した。特に平栫式土器は農業開発総合センター内では数が少ない。また，スクレイパー，磨製石斧等の石器も検出されている。

縄文時代晩期では，遺構は検出されなかったが，上加世田式土器と思われる沈線文の入った土器が数点，打製石鏃が１点，砂岩の磨石や礫器が数点ずつ検出された。

古墳時代では成川式土器の小型の壺と思われる口縁部や二次加工したメンコが検出された。

古代では神原遺跡と結合する溝状遺構が検出された。神原遺跡では，遺構内遺物として須恵器等が多数検出されたが，頭無遺跡では遺物が検出されなかった。

頭無遺跡では，遺構・遺物の検出・出土が少量であったので，時代ごとの時期などを特定することは難しかった。

<参考文献>

１　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（112）
農業開発総合センター遺跡群（Ⅳ）「諏訪牟田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・鍛冶屋堀遺跡」2007年３月鹿児島県立埋蔵文化財センター

２　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98）
農業開発総合センター遺跡群（Ⅲ）「尾ヶ原遺跡」
2006年３月鹿児島県立埋蔵文化財センター

３　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（83）
農業開発総合センター遺跡群。（第１分冊）「窪見ノ上遺跡・建石ヶ原遺跡・古里遺跡・西原遺跡」
2005年３月鹿児島県立埋蔵文化財センター

頭 無 迫 田 遺 跡

第Ⅷ章　頭無迫田遺跡の調査成果

第１節　調査の経過

頭無迫田遺跡は，平成11年度，12年度，15年度に本調査を実施した。本調査は，１号調整池建設に伴う削平部分，及び作物付帯研究施設建設に係る範囲を対象とした。

平成11年度日誌抄

平成12年

２月　調査開始。表土剥ぎ，掘り下げ。縄文晩期及び早期の遺物が多く出土する。早期集石遺構検出。

３月　掘り下げ継続。早期遺物出土，集石遺構検出。
鹿児島大学上村俊雄教授・本田道輝助教授に現地指導を受ける。
10日調査終了，引渡し。

平成12年度日誌抄

平成13年

２月　表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。Ⅲ層上面での遺構検出。縄文晩期柱穴列検出。中世掘立柱建物跡検出。掘立柱建物跡は隣接の市堀遺跡の建物と一連のものと思われる。

３月　掘立柱建物跡の調査。21日調査終了。

平成15年度日誌抄

平成15年

10月　遺跡の範囲確認のためのトレンチによる確認調査。上層は削平を受けている範囲が多く，Ⅲ層，Ⅳ層の調査とⅧ層の調査を平行して実施する。Ⅲ層から縄文晩期の遺物出土。Ⅳ層から縄文早期の遺物出土。

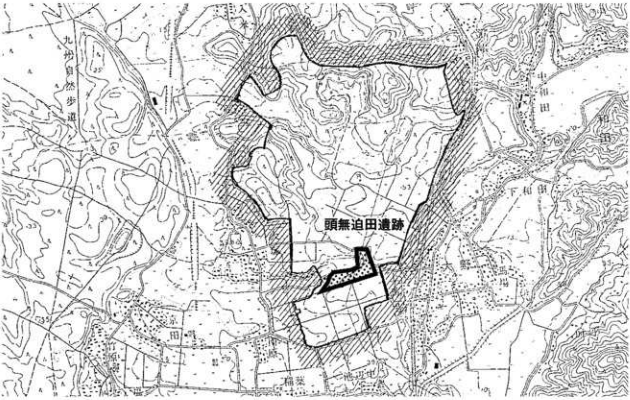
11月　Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅷ層掘り下げ。Ⅷ層よりナイフ形石器出土。チャート礫の集積遺構検出。土坑検出。
鹿児島大学本田道輝助教授の現地指導。

12月　Ⅳ層掘り下げ，集石遺構検出。Ⅷ層掘り下げ。

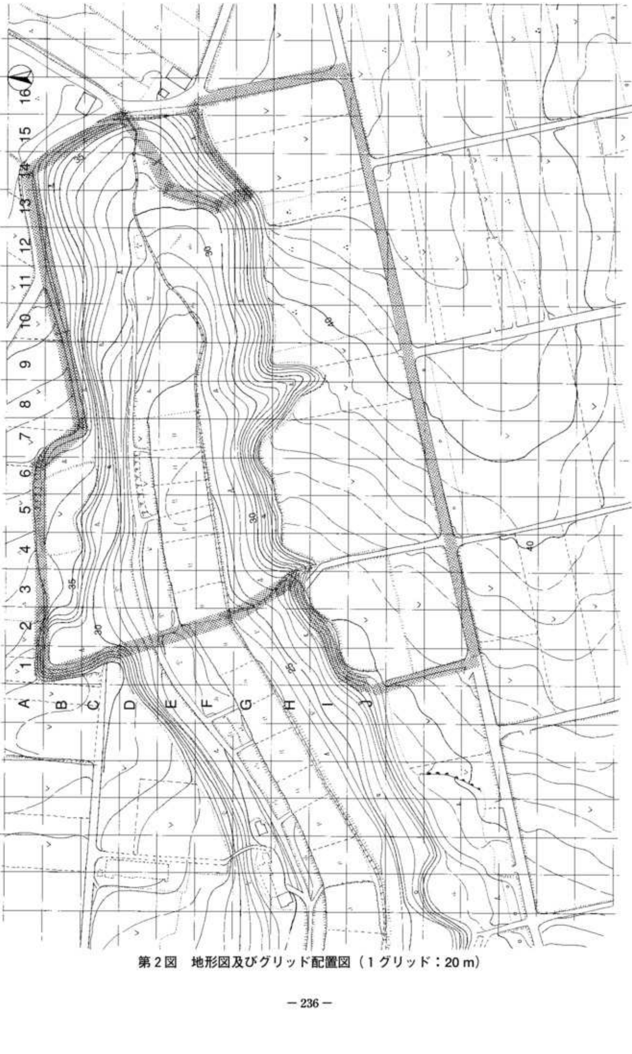
平成16年

１月　Ⅳ層掘り下げ，集石遺構調査（実測・写真撮影）。Ⅷ層掘り下げ。土層断面実測。

２月　下層確認トレンチ調査。土層断面実測。
別府大学橘正信教授現地指導。６日調査終了。



第１図　頭無迫田遺跡位置図（１／25,000）



第２図　地形図及びグリッド配置図（１グリッド：20 m）